

●山本（やまもと）　剛（つよし）

1969年8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F. E. A. R.に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『アラベスク　運命の風』（ホビー・データ）がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

カバーイラスト／壱
カバーデザイン／小林博明
ぷよぷよは（株）コンパイル登録商標です。

SNEAKER BUNKO

魔導物語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

山本　剛



角川スニーカー文庫

56-1
520

魔導物語　ぷよぷよ大魔王の降臨っ！　山本　剛　角川スニーカー文庫

9784044156015

1910193005203

ISBN4-04-415601-8

C0193　P520E　定価520円
（本体505円）

魔導学校に春が来た！　新学期、アルルとルルーは最上級生に進級。一年がかりの大課題卒業試験に挑戦だ。大好きなルシファー先生から与えられたアルルの問題は『シュテルン博士のところに行って、ある物品（アイテム）を受け取ってくること』。でもシュテルン博士って誰？　おきらくの～てんきなカーバンクルと一緒に、博士を探す旅に出たアルルの行く手には……。「魔導物語」「ぷよぷよ」シリーズで大活躍のキャラたちが総出演！　面白すぎる大冒険!?

角川スニーカー文庫
山本　剛作品集

魔　導　物　語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ！
魔　導　物　語　2
ぷよぷよ大明神の復活っ！

カバー　晩印刷

魔導物語

ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

山本 剛

角川文庫 9329

魔導物語 ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

山本 剛

角川文庫

9329


魔導物語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ!


アルル
ファイヤー
ぐうう


ルルー
破岩掌っ
ボ


『さすが、オレの妃と
見込んだだけのことはあるな』
サタン

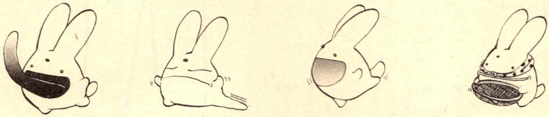
魔導物語

ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

山本剛

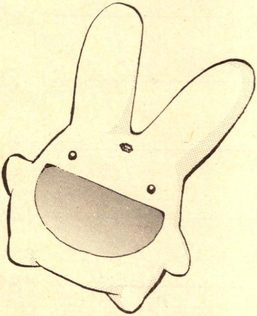
角川文庫 9329

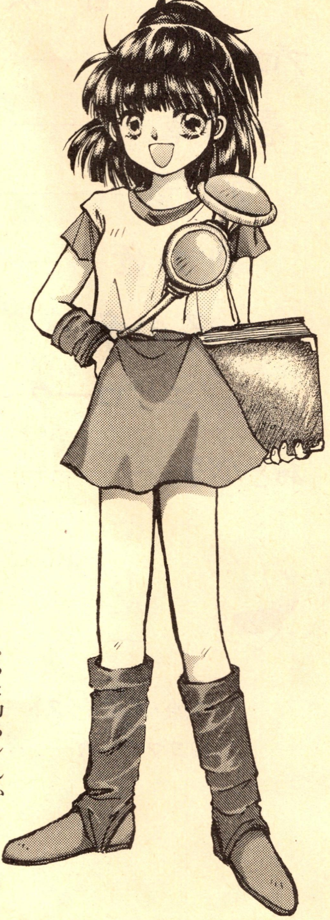
目次



口絵・本文イラスト――壱
四コママンガ――あるてみす
沢渡寿三郎
弓弦之介

アルルと魔導ワールドの仲間たち





カーバンクル

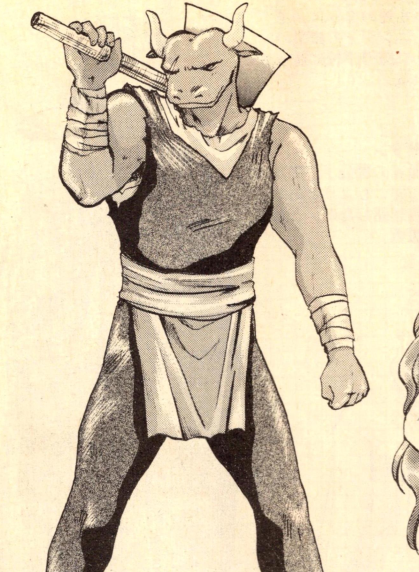
以前はサタンのペットだったが、なぜかアルルについてきてしまったおかしな生き物。女のコと食べ物が大好きで、踊りがじょうず。

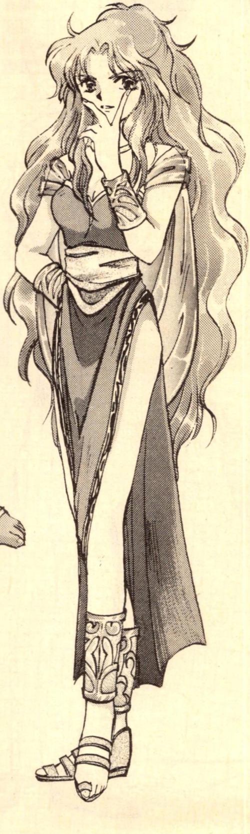
アルル

ボクはアルル・ナジャ。一人前の魔導師になるために修行中。ちっとも強くないのに、『強力な魔導力』を持ってるって言われて、サタンやシェゾに狙われるんだけど、ホントなのかな。

ルルー

魔界の王・サタンのお嫁さんになるために、魔導学校で修行中のお嬢サマ。そのためアルルをライバル視している。





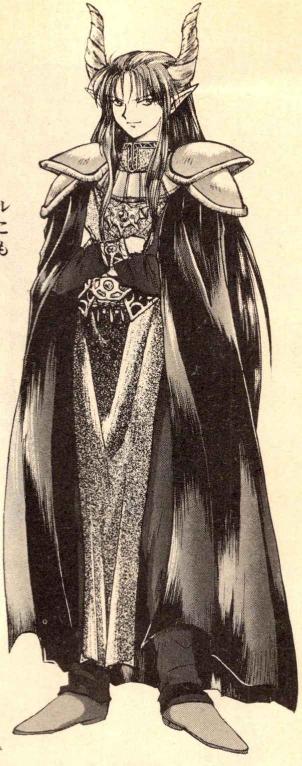
ミノタウロス

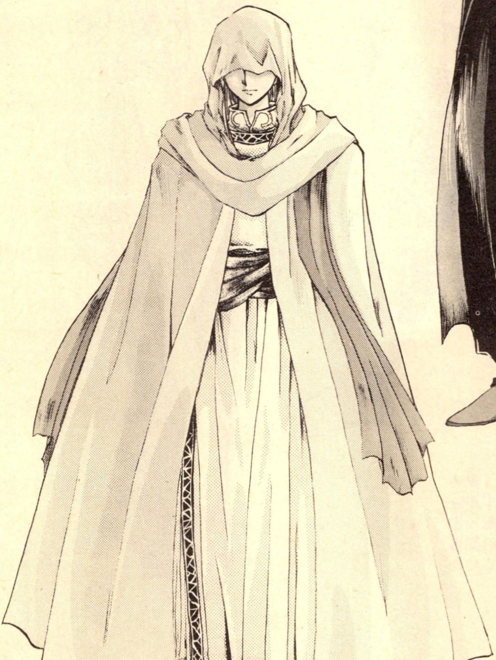
ミノタウロスは、タカビーなお嬢様・ルルーのわがままにもゼッタイ怒らない優しい従者。でもとっても強くてたよりになる。



ムラサメくん
アルル達のクラスメイト。ニンジャの修業のために魔導学校に通っている。

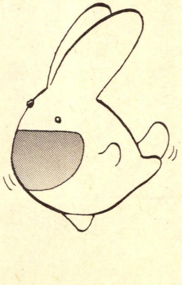
サタン
魔界の貴公子。アルルを妃にしようとあれこれ誘惑したが、どれも失敗。





ルシファー先生
かっこよくて優しくて、みんなの憧れのマトの魔導学校の先生。ちょっとドジで、みょ〜なところでおおざっぱな、変な魔導師。

プロローグ
忍びよる黒い影！
……というほどのものでもない



「だいぶ、薄暗くなってきたわねぇ……」
先頭を歩いてるルルーが、辺りを見回しながらいった。
つられてボクも空を見上げると、東にぽっかりと浮かんだ、まぁるいお月サマが夜を運んできていて、西のほうのオレンジ色をだんだん狭くしているのがわかる。
お日サマはもうとっくに、山の向こうでベッドの用意をしてるんだろう。
「急ぐわよアルル！　こんなところで野宿するなんて、あたくしはゴメンですからね」
ルルーは、ボクらのほうをキッと振り向いた。……と思ったら、急にうつむきながら両手をホッペにあてて、イヤイヤをするように首を振り始める。
「野宿なんてしたら、あたくしの大事なお肌が荒れちゃうわ。それに、あたくしの美貌を狙って、いつ野盗がやってくるかわかんないしぃ……」

前のセリフと、次のセリフの性格が、ゼンゼン違うんですけど……。
「…………」
ボク、とカーバンクルとミノタウロスは、もはや声も出ない。
ルルーは、いっつもこんな調子でお肌や野盗の心配を勝手にしてるけど、何度も野宿してるワリには、ツヤツヤのお肌はいつも変わらない――ちょっと悔しい――し、野盗やモンスターが襲ってきたこともない。
いや、一度だけ、ボクらが寝てるあいだに山賊が来たことがあった。
あのときは確か、
「あたくしの心地好い睡眠を邪魔するなんて！……許しませんわよ！」
って、寝ボケたままのルルーが、超必殺技の〝女王乱舞〟で全員ボコボコにしたんじゃなかったっけ……？
ルルーってば、それ知っててブリッコしてるのかなぁ……？　しばらく一緒に旅をしてるケド、そのへんがまだよくわからない。良家のお嬢様って、こんなもんなの？
「ああ、サタン様……。あなたさえ振り向いてくだされば、こんな苦労なんかしなくてもいいのに……」
まだルルーは自己陶酔ブリッコしてる。こうなっちゃうと、もう誰にも止められない。次の街までまだだいぶあるし、やっぱりここで野宿することになりそう。

「いいえ！　この苦労を乗り越えてこそ、本物の愛で、あのお方を優しぃく包むことができるのだわ！」

〝愛〟ってところに、ヤケに力がこもってる。

ルルーは、当分止まりそうにない。

ボクはまた空を仰いだ。

さっきまで東の空にいたお月サマが、いつのまにかボクらの真上で見降ろしていた。

＊　＊　＊

暗闇(くらやみ)に、おぼろげな光が浮かぶ。

そう、夜空に浮かぶ月のように。

しかしそれは月ではなく、人の頭ほどもある巨大な水晶玉が放つ光であった。

水晶の光を受けて暗闇にたたずむのは、夜のようなローブを着た占い師。

フードを目深に下ろしているために、顔の上半分は見ることができない。しかしその下半分から見える、通った鼻筋、引き締まった口許(くちもと)から、占い師は若く、端麗な容姿であることが想像できる。

『…………？』

水晶玉を覗き込む占い師の表情は、あきらかに困惑していた。

『なんだ？　この影は……？』

占い師は水晶から目を離さぬまま、そうひとりごちた。少なくとも、彼がいま占っていることは、よい結果にはなっていないようだ。

『やはり、このままでは……』

最後の言葉を、占い師はグッと呑みこんだ。まるで、自分の発した言葉がその通りの結果となることを、忌み嫌うかのように。

だが表情までは押し隠すことができず、とぎれた言葉を引き継いでいた。

このままでは、世界は破滅する……？

＊　＊　＊

「ファイヤー！」

呪文を唱えると、ボクの指先から火の玉が飛びだし、目の前にいるゼリーまんじゅう――あんまり、おいしそうなお菓子じゃないね――みたいなモンスター、ぷよぷよに向かって一直線に飛んで行く。

「うよよよぉぉぉ……」
ボクの出した炎に包まれたぷよぷよは、ドロドロの体液を出してしぼんだ。
ばたんきゅ〜だ！
「うげ〜」
ばたんきゅ〜はいいんだけど、ドロドロの体液を見るたびに、ボクは気持ち悪くなってくる。
ぷよぷよって、姿形はぷにぷにしてて結構カワイイのに、どうしてこんなに気味悪い体液なんかつまってるんだろう。
（だったら、殺さなきゃいいんじゃない？）
心の奥にいるもうひとりのボクが、そう問いかける。
いや、そりゃそうなんだけどさ……。
「ぷよぷよぉ」
またボクの目の前に、ぷよぷよがどこからか落っこちてきた。
ひとりボケツッコミをかましてる場合なんかじゃない。ボクは戦闘中なのだ。ドロドロの体液でもなんでも——ホントはイヤだけど——ばたんきゅ〜させなきゃ、どうにもならない！
「ぐー！」
突然、ウサギのような耳と、指先くらいの長さの手足しかない黄色いモンスターが、べろ

～んと身長の何倍もある長い舌を出して、ボクの目の前のぷよぷよを捕まえた。

身体(からだ)のどこに、そんな長い舌をしまってあるんだろ？

「ぐー！」

そいつは舌で巻き取ったぷよぷよを、ニコニコしながら自分の口に運んでいく。

……って、あれはボクのカーバンクル！

「こら――っ！　カーくん、そんなの食べちゃダメでしょ！　ペッしなさい、ペーッ！」

あわてて止めに入ったけど、もう遅い。カーバンクルはごっくしとぷよぷよを呑(の)みこんだ。

ついでに短い手足をぴこぴこと動かして踊りだす。

「ぐっぐぐぐっぐぐっぐっ！」

ぱんぱからったほいほい、と踊っているつもりみたい。

踊るのはいいんだけど、ぷよぷよの、あのドロドロの体液がカーバンクルのお腹の中でどうなってるのかと思うと……。

「う～っ……」

背筋がゾクゾクしてきた。これ以上ぷよぷよなんか食べないように、ちょっとおしおきしておかなきゃ！

「カーくん！　あれほど食べちゃダメだっていったでしょ！」

ボクはカーバンクルのほっぺたを両手でひっつかんで、ぐにぃ～っと伸ばした。カーバンク


あっっ、カーバンクルっっ
べろ〜ん
ごっくん
げぷっ
おそかったかあ

ルの身体はやわらかくて、どこまでも伸びる。つきたてのおもちみたいだ。
ぐにぃ〜〜っ、パッチン！
ぐにぃ〜〜っ、パッチン！
ぐにぃ〜〜っ、パッチン！
伸ばしては離し、伸ばしては離し……。
そのたびにカーバンクルの顔が大きくゆがんでヘンな顔になり、そしてまたもとに戻る。
「うふふ、おもしろぉ〜い」
「ぐー！」
カーバンクルは手足をジタバタさせてもがくけど、ただそれだけ。ボクのなすがママだ。
……といっても、野菜のナスがお母さんというワケじゃないよ。
「アルル！　そんなおバカなギャグかましてる場合じゃないわよ！」
「あ！」
叱咤の声で、ボクは我にかえった。そうだ、ボクは戦闘中だったんだ。
あやうくカーバンクル遊びの閉鎖空間に入りこんじゃうとこだった……。
「ごめぇ〜ん」
「なにやってんのよ、まったく！」
見ると、両手を腰にあてたルルーがボクらを睨んでいた。昨日の夕方に「サタン様ぁ〜★」

とかいいながら自己陶酔ブリッコしてたときとは、ゼンゼン雰囲気が違う。謎の格闘技を使う、超気が強くて、超ワガママで、超高圧的なお嬢様に戻っている。これが、彼女のいつもの顔。
「ぷよぷよぉ」
スキあり！　とばかりに、ボクらをコワイ顔で睨むルルーの後ろから、いきなりぷよぷよがジャンプして飛びかかってきた！
「ルルー、うしろっ！」

「やあっ！」

ボクの声と同時に、ルルーは気合い一閃！　後ろ回し蹴りでぷよぷよをはたき落とした。サラサラした水晶色の髪が乱れるのも、スリットの大きく入ったスカートから、形のいい足がキワドイとこまで見えちゃっても、ゼンゼンおかまいなし。まあ、ボクらのほかに誰も見てないからいいんだケド。
でもボクにとっては、そんなルルーの姿がいい絵になってるから、ちょっと悔しい。とても二歳しか年が離れてないとは思えない。もっともっとお姉さんみたいだ。
戦いのときは、とっても頼もしい存在だね。
……なぁんてコトを考えてると、ルルーは乱れた髪を右手でさっとかきあげ、またボクをタカビーに見下ろした。

「なにボケっとしてんのよ、あんたもぷよぷよをなんとかしなさいよ！」
もはや、ボクらの周りはぷよぷよだらけ。
さっきまでは数えるほどしかいなかったのに、いつのまにこんな数に増えたの？
「ほら、さっさとしなさいよね！」
「わ、わかってるよぉ」
ボクはカーバンクルを自分の肩に乗せた。
「ぶもー！」
ルルーの向こうでは、ウシ頭のモンスター、ミノタウロスがぷよぷよのくっさい体液を身体(からだ)中に浴びながら、巨大な斧(おの)をブンブン振り回している。
「うげげ……」
その姿を遠くから見ただけで、吐き気がしてきた。あの体液さえなければ、ぷよぷよもそれなりにかわいいモンスターなんだけどなぁ……。
でも、この状況をなんとかしなきゃ、先に進めやしない。ボクらの目指す魔導学校まで、あともう少しだというのに！
「ファイヤー！」
ボクはまたぷよぷよ目掛けて呪文(じゅもん)を唱えた。
「破岩掌！」

続いてルルーが得意技の掌底突きをくりだす。
「んもーっ！」
ミノタウロスはあいかわらず斧を振り回してる。
「ぐー！」
「キミはいいの！」
みんなにつられて舌を伸ばそうとするカーバンクルを、ボクは寸前で止めた。さっき、あれだけ〝ほっぺた引き伸ばしの刑〟をしたというのに、もうカーバンクルは忘れてる。
そんなカーバンクルの邪魔？　もあって、倒しても倒してもぷよぷよはいっこうに減らない。もう、何時間戦ったのかもわからない。
「ええい！　キリがないわね！」
「ぶも――――っ！」
ルルーもミノタウロスも、もはやキレる一歩手前だ。ボクもいい加減めんどクサくなってきたし、お腹も空いてきた。
こうなったら、アレをやるしかない……！
「ルルー！　ミノタウロス！　ぷよぷよを一ヶ所に集めて！」
ボクはふたりに怒鳴った。
「な、なんであたくしが……！」

「いいから！」

ミノタウロスは素直に、ルルーはしぶしぶぷよぷよを集め始めた。そのあいだに、ボクは増幅呪文(じゅもん)を唱える。

「ダイアキュート！」

まだまだ、一回だけじゃ物足りない。たくさんのぷよぷよを、いっぺんに消せるだけの魔導力を増幅させなきゃ！

「ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ——中略——ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダイアキュート！」

こんなもんでいいかな？

ボクの身体(からだ)の中で、はちきれんばかりの魔導力が駆け巡ってる。

「集めたわよ！」

ルルーのほうも準備OK。

よぉーし……。

「◎¢△☆↓！」

〝ファイヤー〟と唱えたつもりだったけど、増幅のしすぎで呪文(じゅもん)がまともな声にならない。

ドッゴ———ン！

うずたかく積み上がったぷよぷよの山を中心に、大きなキノコ雲が立ちのぼった。
「うわぁお！」
呪文を唱えたボク自身が驚いちゃう。こんな大爆発になるなんて……。
なぁんて驚いてるヒマもなく、爆煙はボクらをも巻きこんだ。

＊　＊　＊

占い師は暗闇（くらやみ）の中で、じっと水晶玉を凝視し続けていた。
何十分も、何時間も……。
しかし、彼には水晶に映る黒い影の正体が、いまだに判然としていなかった。
ふと、水晶の放つ光が急に弱くなる。
『…………！』
いぶかしげに、占い師が水晶に顔を近づけたその瞬間……！
カッ！
今度は逆に、水晶がまるで真夏の太陽のような光を放ち始めた。
『こ、これはっ……！』

占い師は思わずあとじさり、顔の前に手をかざす。
しばらく水晶は痛いほどの光を放ち続けたのち、また出し抜けにすっと引いて、もとの月のような淡い光に戻った。
『…………』
占い師はしばしのあいだ茫然(ぼうぜん)と立ち尽くしていたが、やがて水晶の前に座り直し、右手を形のいい顎(あご)にあてて考えこんだ。
『なるほど、そういうことか……。しかしそうなると、早々に手を打たねばなるまい……』
そうつぶやき、占い師は立ち上がって踵(きびす)をかえす。

ガッコン！

『アイタッ！』
暗闇(くらやみ)の部屋を出ようとした瞬間、占い師は何かに蹴(け)つまずいて転んだ……。

＊　＊　＊

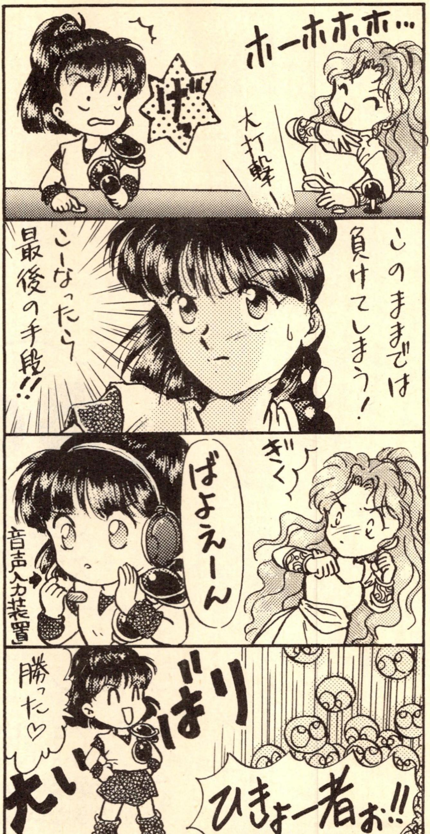
ボクらはいま、もうもうと舞うキノコ雲の煙の真っ只中(ただなか)にいた。
「げーほ、げほげほげほ……！」

「ゴホンゴホンゴホン……！」
みんなが、煙の中で思いきり咳きこむ。
ボクが増幅して唱えた呪文は、思った以上の凄じさだった。もし、爆発の勢いに驚いてなくても、爆煙に巻きこまれるのはやっぱり避けられなかった、と思う。
ボクの魔導力って、そんなに凄かったっけ……？
「まったく、あんた加減ってものを知らないの？」
煙が晴れてくると、さっそくルルーがぼやく。彼女がそうやって文句をいうのは、まあ、いつものコト。
それを無視して爆発の中心を見ると、ぷよぷよの山はきれいさっぱり消えていた。ボクらまで巻きこまれるのは想像してなかったケド――そのワリには、いっつもおんなじ結果になっちゃうんだケドね――、とりあえず最初の目的は達成できたみたい。よかったよかった。
「ああん、あたくしの美し～い髪とお顔が台無しだわ」
まだルルーはブツブツいってる。彼女にとっては、ボクが聞いててもそうでなくても、あんまり関係ないみたい。というより、自分のいうことはみんな全部聞いてるって思ってるんだろうね。ルルーちゃん、ワガママだから。
「いいじゃない、ぷよぷよはいなくなったみたいだし。それとも、砂ぼこりより、ぷよぷよのドロドロでグチャグチャの体液のほうがいいってワケ？」

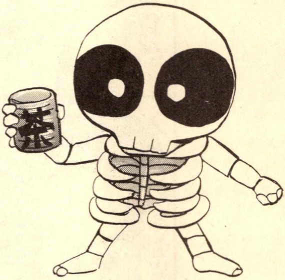
〝ドロドロでグチャグチャ〟ってところで、両手の指をわしゃわしゃと動かしたりして必要以上のアクションをまじえながら、ボクはルルーに向かって話した。
「う……」
さすがのルルーも、これには絶句。
ぷよぷよの体液を浴びて平気な顔できるのは、ミノタウロスやカーバンクルくらいだもんね。ボクだって、ルルーの立場だったら絶句しちゃう。
「ふ、ふん！　今度からは、あたくしだけは巻きこまないでよね！」
ルルーは腕を組んで、プイっとふてくされてそっぽを向いた。そして、そのまま歩きだす。
「なにやってんの、さっさと行くわよ！」
「はいはい」
なにはともあれ、ボクらは旅を再開した。
街道沿いの街をあとふたつ越えれば、そこはボクらの旅の終点、魔導学校だ！

春の章

奥の手



ホーホホホ…
げ
大打撃ー
このままでは負けてしまう！
こーなったら最後の手段!!
ぎく
ばよえ～ん
音声入力装置
勝った♡
ばり
大い
ひきょー者お!!

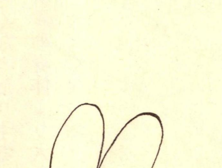


スケルトンT

お茶のワビサビを味わいたい、ちょっとふーりゅーなモンスター。でも肉がないので望みを果たすことができないのが悩み。

一　夢が現実になる新学期！

……こりゃあ春からエンギがいいや！



キ〜ン、コ〜ン、カ〜ン、コ〜ン……。

緩やかというか、間延びしたというか、でもそのワリには音の大きな鐘にあわせるように、桜ふぶきがはらはらと校庭で舞っている。

たったいま鳴り響いた鐘は、ボクら魔導学校の生徒たちにとって、新しい一年の始まりの合図。そう、今日から新学期なのだ！

さぞかしクラスのみんなも緊張してるコトだろう、とまわりを見回してみると……。

ざわざわわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ……。

ウルサイ、というほどじゃないケド、妙に騒がしい。

かくいうボクも、ついさっきまでお友達とおしゃべりしてたトコで、予鈴の鳴るちょっと前

に席についた。
う〜ん、優等生だなぁ、ボクって。……成績はともかく。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」
そんなボクの気分をブチ壊しにする——同時に、ボクのねがいを表わす——かのように、カーバンクルがボクの机の上で気持ちよさそうに居眠りしてる。ボクが手をキズだらけにして縫った、カーバンクル用の枕(まくら)を頭と耳とのつけねあたりに敷いて。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」
ぷ〜ぅ、ぷぅ……。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」
ぷ〜ぅ、ぷぅ……。
寝息とおなじリズムで、鼻ちょうちんが大きくなったり小さくなったりする。小さいときでもボクのゲンコツくらいあって、それがふくらむとカーバンクルの身体(からだ)より大きくなっちゃう。まるで風船みたい。……というより、ほとんど風船と同じで、大きくなったときに針かなんかでつつけば、ものすごい大きな音がして破裂する。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」
ぷ〜ぅ、ぷぅ……。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」

ぷ〜ぅ、ぷぅ……。
鼻ちょうちんをじっと見てると、なんだか身体がムズムズしてきた。
（わ、割りたい……！）
だけど、いまここで割ったら、教室中が大パニックになっちゃう。そんなにモノスゴイ鼻ちょうちんなのに、割ったって当の本人はぜっっっったいに起きない。カーバンクルが起きるのは、食べ物の匂(にお)いがしたときくらいだ。
「むにゃむにゃ……、もぐもぐもぐ……」
ボクの心を見透かしたように、カーバンクルは口をモゴモゴさせながら寝返りをうった。食べ物の夢でも見てるのかな？
てろ〜ん。
横になった拍子に、カーバンクルの口の端からヨダレが下がってきた。どうやらボクの予想は大当たりみたい。
「あーあー、キタナイなぁ、もう」
ボクはポケットからハンカチを取りだして、カーバンクルのヨダレをふいてあげた。ついでに、ホッペタを指先でつついてみる。
つんつん。
「むにゃむにゃ……」

つんつん。
「むにゃむにゃむにゃ……」
つんつんつんつん。
「むにゃむにゃむにゃむにゃ……」
「ふふふ、おもしろぉい」
カーバンクルの反応は、いちいち楽しくてあきない。
……のはいいんだけど、もうすぐ先生が来て授業が始まるというのに、ゼンゼン起きる気配がない。
まあ、外は春のポカポカ陽気で、ボクの席は窓際。とくれば、居眠りするにはこんなにいい場所はないってくらいだから、気持ちはわかるんだケドね。去年のちょうど今頃かな？　ボクも思いきり居眠りして、先生に水をかけられたコトがあったっけ。
「ふわぁ〜あ……」
それを思いだしたら、ボクも眠くなってきちゃった。先生もまだ来ないみたいだし、ちょっと寝ちゃおうかなぁ〜……。
すうぅっと、目をつむりかけた瞬間……！
ガタガタッ！
「な、なに？」

見ると、みんなが慌てて席について、姿勢を正していた。

しぃ〜んとした教室に、廊下から高らかな足音が響いてくる。

カッ、コッ、カッ、コッ……。

先生の足音だ！

いったい、今年はどんな先生が担任なんだろう？

魔導学校には、いろんな先生がいる。もちろん魔法使いがほとんどだけど、それだけじゃあない。薬草師のきりかぶの老人とか、必要以上になまめかしい、バニーガールのウォーターエレメント先生とか、ぞう大魔王先生とか、燃えるヘビメタ、ファイヤーエレメント先生とか、音楽のハーピー——ちなみに人妻——先生とか、授業中に手や足がポロポロ落ちちゃうゾンビ先生とか、巨人の精霊使い、スプリガン先生とか……。

こうして数えてみると、トンでもないというか、ロクでもないというか、いろんな意味でスゴイ先生ばかりなんだなぁ、この学校は。

そうそう、ひとりだけ、若くてカッコイイ男の先生がいたっけ。そういう人が担任だったらいいのになぁ……。

「おりょりょ？」

そういえば、と思い立って、ボクは教室を見回した。

ボクの予感どおり、いつも真ん中の列のイチバン後ろで、これみよがしに座ってるルルーの

姿が見当たらない。どうしちゃったんだろう、カゼでもひいたのかな……？
カッ、コッ、カッ、コッ……、ピタッ。
なぁんて考えてると、ついに、足音がボクらの教室の前で止まった。よくよく聞いてみると、足音はハイヒールをはいてるようなカンジ。……というコトは、女の先生かな？　最後に思いだした、カッコイイ先生じゃなくて、ちょっと残念。

ガラッ！

と勢いよく扉を開けて入ってきたのは、非のうちどころない、ちょっとキツめの美人顔、長くてサラサラした水晶色の髪の毛に、それとよくマッチした空色の大きなスリット入りドレス。後ろには、筋肉りゅーりゅーでウシ頭の大男が控えてる。
「あ〜ら、みなさん、そんなにかしこまって迎えられると、さすがのあたくしも照れちゃいますわ。オホホホホホ……！」
ズルッ！
ボクらは一斉にズッコケた。
遅刻だというのに落ち着き払ってるところが、いかにもタカビーなルルーらしい。
「あらあら、みなさん、集団でお昼寝？　あたくしもしようかしら」
とかいいながら、ルルーはしゃなりしゃなりとイチバン後ろまで歩いて、自分の席に、おし

とやかに、かつタカビーに座った。

「………」

ボクらは無言で立ち上がり、ひっくり返った机やイスをガタガタと直す。緊張の糸をいきなり切られたショックと、あきれかえりで、もはや声もでない。

すると……！

ゴンッ！

ついさっきルルーが入ってきた扉のところから、今度はものすごい大きな音がした。

ボクらが一斉に注目すると、そこには、真っ黒なローブを着た男の人が、頭を押さえてうずくまっていた。

『痛(つ)ぅ〜っ……』

うずくまる身体(からだ)つきから見て、ローブの人はずいぶん背が高そう。鴨居(かもい)に頭でもぶつけたのかな？

「だ、だいじょぶでちゅかぁ？」

イチバン近い席に座っている、舌ったらずなニンジャのムラサメくんが声をかけると、ローブの人は、何事もなかったかのようにすっくと立ち上がった。

『いや、大丈夫だ。心配はいらん』

想像どおり、ローブの人は背がかなり高い。おでこ——だと思う——に、ちょうど鴨居がぶつかるほどだ。「だと思う」のは、その人はフードで顔全体を覆ってて、鼻と口と顎くらいしか見えないから。

顔の下半分しか見えないローブの人は、呆然とするボクらを尻目に、ツカツカと教壇の上まで歩いた。

下半分しか見えなくても、スジの通った鼻、キリリと引き締まった口許、ほどよくとがった顎の線から、フードの下には美男子が隠れてるにちがいない。しかも若い。

というコトは……？

「きゃぁ〜……★」

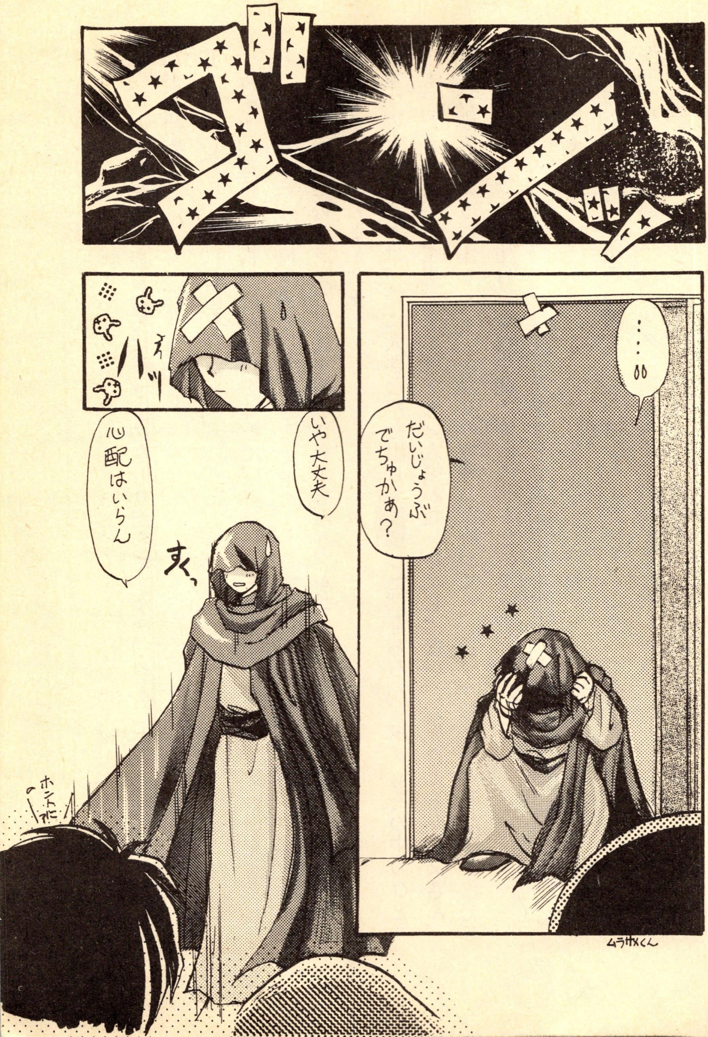
教室中の女生徒たちが、みんないっせいにため息まじりの声をもらす。

ボクもおんなじ気持ちでいっぱい。

だってだって、さっきまで考えてたコトが、まさか現実になるとは思ってもみなかったんだもの！

そう、いま教壇に立ってる背が高いローブの人こそが、魔導学校には珍しく、若くてカッコよくて、優しいルシファー先生なのだっ！

やっぱり、そういうコトってあるもんなのね。「こうなるといいなぁ……」なぁんて考えてたコトが、そのまま現実になるってコトが。タダの偶然かもしれないケド、やっぱりウレシイ。


・・・・!!
だいじょうぶでちゅかぁ？
ハッ
いや大丈夫
心配はいらん
すくっ
ホントにの
ムラサメくん

カッ、カッ、カッ……。
ルシファー先生は、おもむろにチョークを取りだして、ゆっくりと、大きく自分の名前を黒板に書き始めた。
L、U、C、I、F、E、R。
ナカナカの達筆だ。書き終わったところで、パンパンと手を叩いてチョークの粉を落としながら、ボクらのほうを向き直る。
『え～、私が、このクラスの担任を務めさせてもらう、ルシファーだ。一年間、よろしくな』
「よろしくお願いしま～す★」
教室中の女の子たちは、特に大きな声を出して挨拶した。もちろん、ボクもその中のひとり。
でも、だからといって男の子にゼンゼン人気がないワケじゃない。お兄さんとかお父さん、ときには恋人のように優しくて、かなりの魔導力を持ってて、ちょっちアバウトだけど教え方もうまいルシファー先生は、全校生徒の憧れのマトなのだ。
ウチのクラスでは、特にルルーが先生にぞっこん。
「………★」
ほらほら。イチバン後ろの席で、もう目がハートマークになってる。
魔導学校に入る前までは、サタンひとスジ――いまでもそういってるケド――だったルルーが、なんでこうなっちゃったのかっていうと、サタンによく似てるからじゃないかな。もちろ

ん、顔の下半分が。

あ、あとは、声もそっくり。だけど、氷のように冷たいサタンに対して、ルシファー先生の声は、ちょうどいまの季節の陽気みたいにポカポカした暖かいカンジがする。

……まあ、もともとルルーは惚(ほ)れっぽい性格なんだろうケドね。

『し、しまった！』

いきなり先生は、慌ててふところをゴソゴソやり始めた。

「…………？」

ボクらは首をかしげる。

どうしちゃったんだろ、忘れ物かな……？

ゴソゴソゴソ、とどんなに動いても、ルシファー先生のフードは絶対に動かない。ボクには、それが前から気になってしょうがない。たぶん、みんなもそう思ってるんだろうケド、でも、そのへんのナゾめいたところが、またイイんだよね。いかにも魔導師、ってカンジで。やっぱ、将来はああいうふうな魔導師になりたいよね。顔半分をフードで隠すかどうかはともかく。

「！」

ふと、ボクの頭の中に、真っ黒なローブを着た自分の姿が浮かんだ。でも、単にいまのボクにローブを着せただけで、ぜんっぜん似あってない。ローブはだぶだぶで裾(すそ)をだいぶ引きずってるし、フードは半分どころか顔全部を隠しちゃう。

（ちがうちがうちがう！）

ボクは頭をブンブン振って、キモだめしのオバケみたいな自分の姿を追い払った。いまのボクにローブを着せてもしょうがないでしょ！　もっとこう、……なんというか、ルルーみたいなプロポーションで、艶（なまめ）かしくて、妖（あや）しくて……。

だけど、どうがんばっても、ボクのそんな姿の映像は浮かんでこなかった。まさか、このまんま大人になっちゃったら、ちょっとヤだなぁ……。

『う～む、困ったな……』

ボクが未来の自分を想像しようとがんばってるあいだも、ルシファー先生はまだゴソゴソやっていた。

「ど、どうしたんですか？」

生徒のひとりが声をかけると、先生は右手で後ろ頭をかきながら、ちょっとハズカシそうに笑った。

『いや、出欠を取ろうと思ったのだが、肝心の名簿を忘れたみたいでな……』

「だったら、魔法で取りだせばいいんじゃないですか？」

誰かがいった。魔法でいろんな物を取りだすのは、ルシファー先生の得意技だ。

『そうか、その手があったか！』

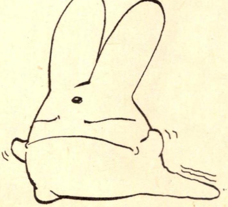
先生は、自分の力をすっかり忘れてた様子で、ポンと手をうつ。

「プッ！」
そんな先生の仕草がミョーにおかしくて、ボクらは一斉に吹きだし、そして大きく笑った。
『いやはは、私としたことが』
といいながら、ルシファー先生も笑ってる。
さっき鴨居に頭をぶつけたのもそうだけど、ルシファー先生はちょっとドジだ。
あまり人のコトはいえないんじゃない？　ってボクもいわれそうだケド……。
そんなところが玉にキズなんだけど、逆に人間くさくてボクは大好き。みんなもそう思ってるに違いない。完璧な人間なんて、そうそういやしないもんね。

二　卒業試験は！

……借り物競争ぉ？

ルシファー先生がパッチンと指を鳴らすと、ボンッ！　と煙をあげて、教壇の机の上に名簿が現われた。
『よし！　じゃあ、出欠を取ろう。……アルルくん！』



「はい！」
ボクは右手を高々とあげて、元気よく返事した。
……と同時に、
「ぐ～ぅ！　むにゃむにゃ……」
カーバンクルのいびきが教室中にこだまする。
『え～と……』
先生は絶句し、クラスのみんなは目が点。
『それは、キミのペットのカーバンクルくん、……かな？』
「は、はい……」
ううっ、恥かしいよぉ。
カーくんったら、なにもこんなときに大きないびきをかかなくたって……。
『カーバンクルくん、お昼寝中。と……』
イジワルにもルシファー先生は、生徒でもないカーバンクルのコトを名簿に書きこんだ。
カ～～ッ。
(穴があったら入りたい……)
ボクは肩をすぼめてうつむいた。点の目から、ニヤニヤ笑いの目に変わったみんなの視線がイタイ。特に斜め後ろからの、ルルーのあざけるような視線が……。

『さてさて、じゃ、次に行こうか……』

そんなこんなで出欠確認は進み、みんなの名前を呼び終える頃には、ボクの恥かしい気持ちはすっかり薄れていた。

『よし、欠席者なし！』

パタンと名簿を閉じると、先生はまた指をパッチンと鳴らした。

ボンッ！

と煙をあげて出てきたのは、人の頭くらいのまあるい穴のあいた、大きな箱。

「………？」

これから、なにが始まるんだろう？

『え〜、すでに知っていると思うが、キミたちは卒業まであと一年。この一年を使って、これから出す課題をこなしてもらう』

みんな、「いよいよ来た！」って顔をして聞いてる。もちろん、ボクだっておんなじ気持ちだ。だけど、イヤでもなんでも、いま先生の話したように、課題をやらなきゃならない。この課題は卒業試験と同じ意味を持っていて、うまくできたかどうかが、卒業できるかどうか、そして、これからの進路に深ぁ〜く関わってくるからなのだ。

この課題は、生徒ひとりひとりによって違うのが大きな特徴。先輩に聞いたところによると、普通に授業を受けるだけで済んだり、まるまる一年のあいだ図書館にこもらなきゃならないよ

うな調べ物だったり、洞窟に棲む邪悪なドラゴンを倒さなきゃいけなかったりと、いろんなものがあるみたい。

いったい、ボクの課題はどんなものなんだろう……？

そう考えると、なんだか緊張してきちゃった。ドラゴンと戦うのだけはイヤだなぁ……。

ルシファー先生は、ボクと同じように緊張する生徒たちの視線を浴びながら、話を続ける。

『で、この箱の中に何が入っているのかというと……』

といいながら、さっき魔法で出した箱の中に手を入れた。

そこから出てきたのは……。

くるくるくるくるくるくる……。

先生のてのひらで回る、黄色い物体。それはひとしきり回転したあと、ピタリと止まり、その場で踊り始めた。

「ぐっぐぐぐっぐっ、ぐっぐっ」

ズルッ！

ボクらは一斉にズッコケた。

「カ、カーくん！」

よく見ると、ボクの机の上で寝ていたカーバンクルの姿がない。

ガァ――ン！

カ、カーバンクルが課題だったなんて……！
……なんて、大ボケをかましてる場合じゃない。
ボクらが座り直す様子を眺めながら、先生は子供をからかうオジサンのように笑った。
『はっはっは、冗談だよ。冗談』
ひょいっと先生が放り投げると、カーバンクルはきれいな弧を描いてボクの机の上に着地。
そして、しゅたっ！　と手をあげてボクに挨拶（あいさつ）する。
「ぐー！」
いったい、ナニが起こったのかゼンゼンわかってない。……というより、このコの場合、始めからナニも考えてない。
なんだかなぁ……。
『冗談はさておいて、この箱の中には人数分の紙切れが入っている。その紙に書いてあることが、キミたちに与えられた課題、というワケだ』
「え――――――っ！」
ボクたちは今度は一斉にイスから飛び上がるほど驚いた。
か、課題って、クジ引きで決まるものだったの？
「ちょ、ちょっと待ってください！」
クラスメイトのひとりが立ち上がった。

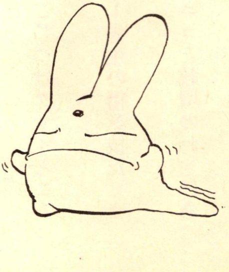
「課題って、先生があらかじめ決めておくって聞いてたんですけど……」
『うむ、普通はそうなんだが、それではおもしろくないじゃないか』
出た！
ルシファー先生の〝おもしろくない〟理論！
先生は、ときたまアバウトな授業をやってくれる。〝おもしろい〟というだけの理由で。
そりゃあ、結果的にみんなもおもしろく感じるからいいんだけど、あまりのとっぴさに、始めは誰もが驚いちゃう。つくづく、先生はひとをビックリさせるのが好きみたい。ビックリするほうはたまったものじゃないんだケド。
それに、卒業がかかってる課題にそれをやるのは、アバウトにも限度ってものが……。
ざわざわざわざわざわざわざわ……。
あまりのコトに、みんなざわつき始めた。そりゃあ、ほとんど将来がかかってるといってもいいコトをクジ引きで決められちゃあ、たまんないよぉ。
ルシファー先生は、そんなボクらの様子を、ちょっとイジワルな笑みを浮かべて見てる。
『確かに、キミたちが驚くのも無理はない。だが、クジ引きにする明確な理由があるのだ』
先生の言葉に、ボクらはざわつくのをやめ、静かに注目した。
『キミたちは、〝運命〟という言葉について、どう思っている？』
「？」

いきなりナニをいいだすんだろう、この先生は。
ボクらの不思議そうな顔を尻目に、先生は話を続ける。
『私は、占いも研究しているのだが、その関係上、たとえば町内会の福引きで一等が当たるのも、スカが出るのも、ある種の運命に支配されていると考えている』
ボクをふくめた生徒全員が、固唾を飲んで先生の話に聞き入っている。
『そして、これからキミたちがクリアしなければならない課題は、キミたちの将来を示す羅針盤だ。それは私たち教師が決めるものではない、運命が決めねばならないはず。そう思って、私はあえてクジ引きにしたのだ』
「はぁー……」
ボクらは、感心とも、あきれともつかないため息をついた。なんだかこじつけクサイところがあるような気がするケド、なぁんとなく納得できちゃうから不思議。
いろんな言葉を難しく並べて、結局は納得させちゃうのも、ルシファー先生の得意技だ。まあ、確かに間違ってはいないんだろうケド……。
みんながなんとか納得したのを見て取ると、ルシファー先生は、ニコニコと教壇のわきにある先生のイスにすわった。
『さぁ〜て、出席番号の一番から順にクジを引いてくれたまえ。なにが出るかはお楽しみだ』
……なんだか、ダマされてるような気がするなぁ。

『課題を一番早く持ってきた者には、私からなにか賞品をあげよう！』
それじゃ、運動会の借り物競走と変わんないよぉ。
実は、単にそれがやりたかったんじゃないの……？

三　シュテルン博士、……って誰？

〝シュテルン博士のもとへ行き、ある物品（アイテム）を受け取ってくること〟
ボクが箱から引いた紙切れに、そう書いてある。
「え～と……」
ボクは紙を裏返してみた。だけど、そこにはなんにも書いてない。
も、もしかして、これだけ……？
お日サマに透かしてみても、達筆なルシファー先生の文字だけしかない。
くるくるくると紙を皿まわしみたいに回してみても、やっぱり同じ。
「………」



え～ん！
これだけじゃ、なんにもわっかんないよぉ。
そんな気持ちをなんとかグッとこらえて、ボクは紙切れをじっと見つめた。
質問しようと思っても、ルシファー先生はもういない。みんながクジを引き終わるとすぐに、『なにかあったら、私の研究室まで来たまえ』といって出ていっちゃった。
ううっ、もうホントに泣いちゃおうかなぁ……。
こんな課題なんかもらっちゃって、ボクはいったいどうすればいいの？
「はぁ～あ……」
ボクは思いっきりため息をついた。
「ぐ～ぅ、ぐぅ……」
なんにも考えてないカーバンクルは、またいつのまにか眠っちゃってる。
それを見てると、またため息がでちゃう。いいわねぇ、カーくんは悩みがなくて。
「はぁ～……」
「！」
ふと、ボクの視界が水色になった。
……といっても、いきなり空や水の中にワープしたワケじゃあないよ。
顔をあげると、腕を組んで、ボクをタカビーな笑いを浮かべて見下ろしてるルルーがいた。

「あなたはどんな課題をいただいたの？　アルル」
「なぁに？」
「どうして？」
　ボクが聞き返すと、ルルーは右手を口に当てて、ちょっとのけぞりながらオホホホホ！　と笑った。必殺のタカビー笑いだ。
「だあって、いつもよりぼぉ〜〜っとしてるんだもの。さぞかしいい課題なんだろうなぁと思って」
〝ぼぉ〜〜っと〟ってところで、ワザワザけだるそうに肩をすくめながら、ルルーは話す。
「ボク、いつもそんなにボケっとしてないもん！」
「あ〜ら、そうだった？　ごめんなさいね、あたくしには、どうしてもそう見えちゃって。オホホホホ……！」
「ぶ〜っ！」
　ボクはむくれた。
　ルルーなんかだいっきらい！
　いっつも、なにかっていうとボクにつっかかってきて、バカにするんだもの。
「じゃあ、ルルーのほうはどうなのよ？」
「う……」

ボクが反撃すると、ルルーは絶句した。でもすぐに、いつものタカビー笑いにもどる。ちょっとひきつってるケド……。
「オ、オホホホホホ！　も、もちろんあたくしに相応し～い課題に決まってるわ！」
「ふぅん」
この動揺のしかた。きっと、ボクなんかみたいにムツカシイ課題をもらったに違いない。ちょうどいいや。いまここで、いっつもバカにされてるお返しをしちゃおう！
「じゃあ、教えてくれてもいいじゃない？」
というと、急にルルーはそわそわしだした。
「あっ、課題の準備をしなくちゃ！　悪いけど、あなたなんかとお話ししてるヒマはないわ。じゃぁねぇ～」
ちょっかい出したのは自分のクセに、ルルーはそういいながら、ミノタウロスを従えてさっさと教室を出ていっちゃった。
「ちぇっ」
逃げられた。
でも、あの慌てぶりからすると、きっと〝ムツカシイ魔法を覚えろ〟とかなんとか書いてあったに違いない。
ルルーってば、魔法が使えないからねぇ。いままでは、魔法みたいな力を持ってる格闘技で

なんとかごまかせたケド……。
ちょっと心配だなぁ。
やなコだけど、やっぱり友達だもんね。

＊　　＊　　＊

占い師は、ふたたび暗闇(くらやみ)の中で水晶玉を凝視していた。
『………』
水晶に映るそれは、少なくとも彼にとって、決してよい結果をもたらすものではない。それを防ぐために、全力で手段を講じねばならぬ。閉ざした口が、無言でそう訴えている。
『影……？　いや、空虚なフィールドか……』
ようやく発したその口調には、相も変わらぬ当惑の中に、ほのかな落ちつきがあった。
そう、決してよくない結果に対して希望を持たせるべく、占い師が相手に語るように、医師が患者に語るように……。

＊　　＊　　＊

「あり？」
気がついたら、教室の中にいるのはボクだけになっていた。
「ぐ〜ぅ、ぐぅ……」
あとは、机の上であいかわらず眠ってるカーバンクル。
みんな、とにもかくにも課題をやるために教室を出ちゃったみたい。ボクもぐずぐずしてちゃいられない、課題をやらなきゃ！
「とはいってもねぇ……」
ボクは腕を組んで、寝てるカーバンクルの脇に置いたメモを見つめた。ボクが課題をやるには、ひとつだけ大きな問題がある。
「シュテルン博士って、……誰？」
ボクのゼンゼン知らない人だ。だけど、この人が誰だかわからなきゃ、お話にならない。
〝ある物品〟のコトだって……。
「むにゃむにゃ、もぐもぐもぐ……」
カーバンクルが、口をもごもごさせながら寝返りをうった。なにか食べてる夢でも見てるんじゃないかな？
「はぁ〜あ……」
いいなぁ。ボクもカーバンクルみたいにずっと寝ていたいよぉ。

なぁんて見てると……、

「ぺろぉ～～ん」

カーバンクルは眠ったまま、いきなり長い舌で脇にあったメモをつかんで、口の中に入れた。

「もぐもぐもぐ、ごっくん！　むにゃむにゃむにゃ……」

「あ――――――――――――っ！」

メ、メモを、食べちゃった……！

「こらぁ――っ！　カーくん、それ食べ物じゃないよぉ！」

ボクは、カーバンクルのほほを両手でつかんでぐにぃ～っとひっぱり、それからブンブンと上下に振った。でも、カーバンクルは起きないし、メモも出てこない。

「ペッしなさい、ペ――ッ！」

今度は片足をつかんで、逆さにして振ってみる。……それでもやっぱりダメ。

「え～ん！　カーくぅ～ん、出してよぉ……！」

泣いてもダメ。

そりゃぁ、忘れるようなコトが書いてあるワケじゃないから、なくなってもそんなに困るワケじゃないんだけど……。

「あっ！」

突然、あることを思いだして、ボクはカーバンクルを振る手を止めた。ぶらぁ〜ん、って宙ぶらりんにさせたまま……。でも、いまはそんなコトを気にしてるばあいじゃない。

よく考えたら、シュテルン博士のことは、ゼンゼン知らないワケじゃない。一度だけ、講義を受けたことがある。

「どんな人だったったっけなぁ……？」

ボクは、もうずっと目が覚めないいんじゃないかって思うくらい、深く眠ってるカーバンクルをそっと机の上に寝かせて、博士から受けた講義のコトを思い返してみる。

確か、筋肉りゅーりゅーの身体（からだ）で、真っ白な白衣を袖（そで）まくって着てたんじゃなかったっけ。それから、スキンヘッドで、年齢はルシファー先生よりオジサンだけど、魔導師としてはまだ若いほうで……。

「うんうん」

だんだん思いだしてきたぞ。

そうそう、魔法と機械が大好きで、〝魔導と機械を融合させるぞ！〟とかいってガンバッテる、魔導師としては変わりダネの人だ。ルルーみたいに、不思議な格闘技を使うし。だから力が強くて、そのぶん少ない魔導力を活かすために、機械を使ってるっていってたなぁ……。

極めツケは、博士の〝声〟。

おしゃべりしてるコを、

「コラ――――ッ！」

って怒鳴っただけで、吹き飛ばしちゃったんだよね。格闘技の呼吸法だとかなんとか、あとで説明してくれたっけ。ルルーの〝気合い〟みたいなもんかな……？

「なぁ～んだ！」

ここまで思いだして、ボクは答えを出すことができた。よくよく考えたら、モノスゴク簡単なコトじゃない。

講義を受けた、ってコトは、シュテルン博士は魔導学校の先生だっていうコト。それだったら、職員室に行けばいいんじゃない。

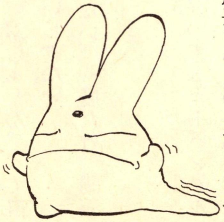
「よ～し！」

そうとわかったら、さっそく行動開始だ！

大いびきをかいてるカーバンクルを頭にちょこんと乗せて、ボクは教室をあとにした。

四　犯人！

……じゃなくて、博士を探そう！



占い師がパチンと指を鳴らすと、部屋中のロウソクすべてに火が灯った。
そういいながら占い師がパチンと指を鳴らすと、部屋中のロウソクすべてに火が灯った。占い師といいえど魔導師のはしくれ、これくらいの芸当は造作もない。
古びた書物、巻物、羊皮紙がうずたかく積み上げられ、各種の宝石、魔法的な文字の彫られた短剣などが雑然と散らばる部屋の中にいるのは、占い師ひとりだけではなかった。
いまはなにも映らない水晶玉をはさむように、彼と対峙する者がいる。
血と泥のこびりついたズタズタの衣服に、化膿と腐敗の進んだキズだらけの全身、右目は眼窩からはみ出し、キズからは肉や骨、あまつさえ脳までが見え隠れしている。
生ける屍、ゾンビであった。
「先生ぇ、どうだぁ？」
脳の機能低下による間延びしたゾンビの問いに、占い師は羊皮紙の上で羽根ペンを走らせながら、視線をあわせずに応えた。
『あなたの空腹の原因は、腹の中になにもないことです。内臓すらもね。……どこかに落としました？』
「う〜ん……」
ゾンビは首をかしげる。
「覚えてないなぁ」

『まあいいでしょう。あとで内臓を培養しておきますから、また来てください。それまで、この包帯でも巻いておくといいでしょう』

右手でペンを走らせたまま、占い師は左手で包帯を差し出した。ゾンビはそれを受け取って退出する。

「ありがとぉ」

『いえいえ、お大事に』

黒いローブの男は、占い師と、魔導師と、そして医師と、三つの顔を持っていた……。

＊　＊　＊

〝職員室〟

と札のかかった扉の前についた。

「…………」

別に悪いことをして呼びだされたワケじゃないんだケド、どうもここに来るとキンチョーしちゃう。

あまり、いい思い出がないからなぁ、職員室には。

成績が悪かったりとか、魔法の発動に失敗してガラスを割っちゃったりとか、女のコをイジ

メてる男のコとケンカして、逆に大ケガをさせちゃったりとかして、よく呼びだされて怒られたっけ……。
これがルシファー先生だったらなぁ。
間違って校舎の半分を吹き飛ばしちゃっても、『気にすることはない。この失敗を糧として、次にがんばればいいのだ』って元気づけてくれるのに。
なぁんて、いつまでも扉の前で立ってちゃしょうがない。
すぅー、はぁ〜。すぅー、はぁ〜。
ボクは深呼吸してからコンコンとノックして、扉を元気よく開けた。
「しっつれいしまーす！」
しぃ〜〜ん……。
だけど、職員室には誰もいなかった。
え〜ん、せっかく勇気を出して中に入ったのにぃ……。
「あ、そうか」
ボクは悔しさを忘れて、ポンと手を打った。
よく考えたら、ボクらはともかく、下級生はまだ授業中だったっけ。ウチの学校は、先生の数が多くないから、授業中に職員室がカラになることがよくある。
「なぁ〜んだ」

いないんならしょうがない。また授業が終わってから来ようっと。
と振り返った途端……！
「ぐべぇ〜っ！」
扉の陰から、いきなり人の死体が飛びだした！
「キャ――――ッ！」
驚きのあまり、ボクはバランスを崩してしりもちをついた。そのショックで、頭の上で寝てるカーバンクルも、ぼてっと落っこちる。で、でも、そんなのを気にしている余裕なんてない。
「あわわわわわ……」
に、逃げなきゃ……！
だけど、腰が抜けちゃって、思うように動けない。
「おいおいぃ、そんなに驚かなくたっていぃんじゃないかぁ？」
「ほえ？」
よつんばいになったボクの後ろから、聴いたことのある声がする。このアクビを我慢してるような声は……。
首だけ振り向くと、扉のところに立っているのは、やっぱり人の死体。身体(からだ)中が腐ってドロドロのキズだらけで、肉や骨や、脳みそまでが見えてて、右目がぶら〜んとぶら下がってる。

だけど、普通の人みたいに動ける死体……。
「ゾ、ゾンビ先生……！」
去年の担任だった先生だ。
「ごめんごめぇん。そぉんなに驚くとは思わなかったんだぁ」
始めは気持ち悪かったケド、もうずいぶん慣れた。でも、いきなり出てこられちゃぁ、誰だって驚くわよ！
「ひどいじゃないですかぁ、脅かすなんて」
相手がゾンビ先生だとわかった途端に、ボクの抜けた腰はもとに戻り、立てるようになった。でも、しりもちをついたおしりがまだヒリヒリする。
「だからぁ、あやまってるだろぉ」
まったくもう、プンプン！
「ところでぇ、アルルぅ、職員室になんの用だぁ？」
「あ！　そうそう」
怒りのあまり、大事な用を忘れるトコだった。それもこれも、ゾンビ先生が脅かすからだわ。
「ゾンビ先生、シュテルン博士って知ってます？」
「あぁ、あの格闘機械魔導師だろぉ？　知ってるぞぉ」
〝格闘機械魔導師〟って……、すっごい名前。まあそれはともかく……。

「博士って、いまドコにいるんですか？」

「う〜ん……」

ゾンビ先生は首をかしげた。その拍子に、腐ったキズ口にわいていたウジムシがポロポロと落っこちる。

うげ〜。

慣れたといっても、あんまり気持ちのいいものじゃないよねぇ。ぷよぷよのドロドロ体液とゾンビ先生と、どっちがイヤかっていわれたら、ボクはどっちもヤ。

「知らんなぁ」

しばらく考えこんだあと、ゾンビ先生はようやっと答えた。一回死んでるから、普通の人より頭の回転がちょっと遅いのが玉にキズ。性格は悪くないんだけどねぇ。気味は悪いケド……。

「誰か、知ってる人いませんか？」

「う〜ん……」

またしばらく時間がたつ。そのあいだに、ボクは床に落ちたカーバンクルを拾った。……まだ寝てるよ、このコ。

「おりょ？」

カーバンクルを拾おうとしてしゃがんだときに、ゾンビ先生のお腹(なか)が、包帯でぐるぐる巻きになってるのに気がついた。

「どうしたんですか？　このお腹」

「あぁ、またどっかに内臓を落としたみたいでなぁ。新しい内臓ができるまで、包帯でフタしてるんだぁ」

「ふ〜ん」

ゾンビ先生は身体中が腐ってるから、手とか足とかが取れちゃうのはいつものコト。そのたんびに保健の先生のところへいって、新しいのをつけてもらってる。

「………？」

そういえば、保健の先生って誰？

ケンカして相手をケガさせることはあるけど、ボク自身はめったにしないから、保健室に入ったことがない。……まあ、いま考える問題じゃないケド。

「内臓がないぞぉ、なんつってぇ……」

カックン★

ボクは、あやうくその場にズッコケそうになるところを、なんとか首だけでおさえた。

つ、つまらない……。

ゾンビ先生のダジャレは、ヘタな魔法よりずっと強力だ。

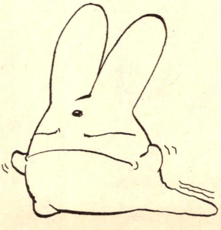
「おぉ、ギャグをいったら思いだしたぞぉ」

と、先生はポン――ほんとはグチャッって音だけど――と手を打った。

「誰か、博士のコト知ってるんですか？」
「あぁ、用務員のスケルトンTぃなら知ってるんじゃないかぁ」
「なるほど、わっかりました！」
ボクはゾンビ先生に深々とおじぎをした。
「そぉか、卒業の課題だなぁ？」
「はい、そうです！」
「うんうぅん、がんばれよぉ」
身体（からだ）中が腐って気持ち悪くても、内臓がなくても、つまらないダジャレをいっても、やっぱり魔導学校の先生。
その一言で、ボクは元気が出た。
うん、なんとかなりそう！
「ありがとうございます！」
ボクはゾンビ先生にお礼をいって、スキップしながら職員室を出た。目指すは用務員室！
がんばるぞぃ！

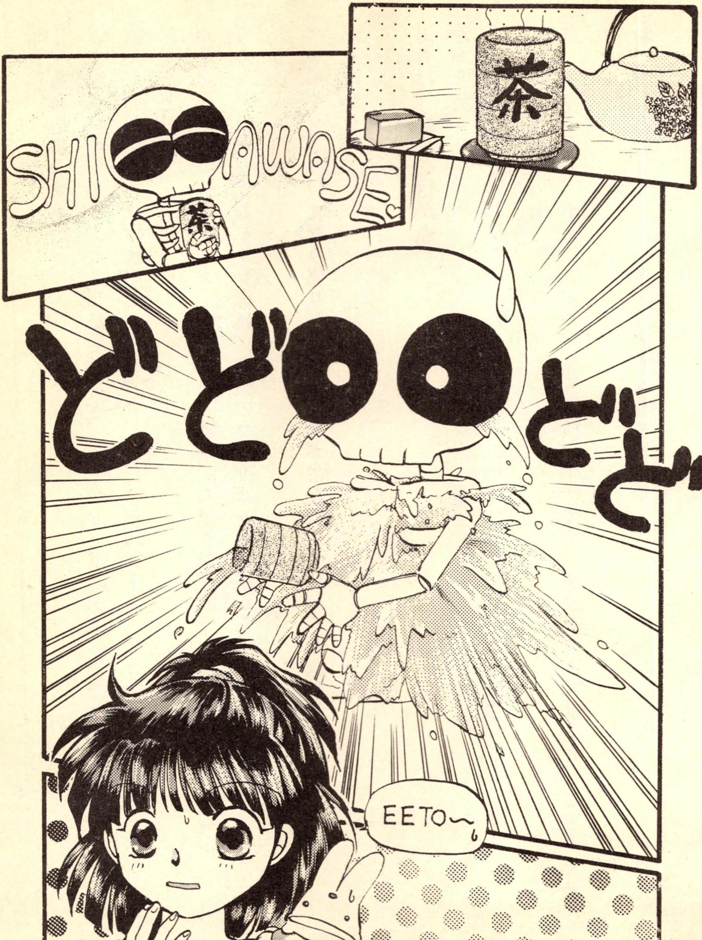
五　用務員さん、スケルトンTの悩み。

……をボクが解決するのぉ？



用務員さんの部屋は、校門のスグ近く。用事がないから入ったコトはないけど、毎朝そばを通ってるからスグわかる。
ボクは部屋のドアをノックした。
コンコン。
しぃ～ん……。
返事はない。
職員室みたいに、誰もいなかったらヤだなぁ。せっかくヤル気になってるのにぃ。
コンコン。
もう一度ノックしてみる。
しぃ～ん……。
やっぱり返事はない。

「誰もいないのかなぁ……？」
もう少しで、シュテルン博士がドコにいるのかわかりそうなのに……。
ためしにドアノブを回してみたら、ガチャリとあいた。……ってコトは、やっぱり誰かいるんだわ。
「用務員さぁ〜ん、入りますよぉ〜」
そっとドアを少しあけて、ボクは中を覗きこんだ。
こぽこぽこぽこぽこぽこぽ……。
ずずぅ〜っ……。
「んんん、お茶がうまい」
部屋の中では、ガイコツのモンスター、スケルトンTが、ちゃぶ台を前にしてお茶を飲んでいた。
用務員さん、だよねぇ……。
「あのぉ〜……」
「ああ、オレ様はしあわせ者だなぁ〜」
ボクの声なんか、ゼンゼン耳に入ってない。まさに至福の瞬間ってカンジ。骨だから表情はないケド、雰囲気でよくわかる。
「え〜と……」


茶
SHIAWASE
茶
茶
どどどどどど
EETO～

じゃあああぁぁぁぁ……。

ボクがまた声をかけようとしたそのとき、スケルトンTのあばら骨のスキ間から、いまさっき飲んだお茶がゼンブ流れ出た。そりゃぁ、骨だからねぇ……。

どどどどどど……。

お茶と一緒に、スケルトンTの目から、鯉が滝のぼりできそうなほどの涙が流れる。

「ううっ、なぜだ。なぜオレ様は、お茶のワビサビを腹の底から味わえないんだぁっ！」

ドガシャ――ン！

スケルトンTはいきなり怒りだして、ちゃぶ台を両手でひっくり返した。

なんだかな～。

「…………」

ボクは、もはや目が点。

「んっ？」

そんなボクに彼はようやっと気がついて、こっちをキッ！　と睨んだ。

「なんでぃ、オメェは！」

「あ、え～と……、ボクはアルル、魔導学校の生徒です。用務員さんに聞きたいことがあるんですケド」

「おう、なんでぇ！　さっさといってみろぃ！」

「えーと……」
「こちとら江戸っ子、気が短ぇんだ！」
「あの……」
「ほれほれ、どうした、なんとかいったらどうなんでぇ！」
一気にスケルトンTがまくしたてるから、ボクはなんにもいえない。このままほっといたら、いきなり殴られちゃいそうなくらいの勢いだ。
「そ、それじゃぁ、話せないよぉ」
「おおそうか、すまんすまん」
あっさりとスケルトンTは落ち着いて、ひっくり返ったちゃぶ台をもとに戻し、その上にどっかりと座った。
意外と素直なのね……。
「で？　なんなんでぇ」
「あのですね、シュテルン博士がドコにいるか知りたいんですケド……」
「おお、あのツルッパゲのオッサンだな？　知ってるぜ」
「ど、どこにいるんですか？」
「しかしなぁ……」
スケルトンTは、右手をあごに当てながら考えこんだ。

なにが、〝しかし〟なんだろう……？
「タダじゃあ、教えらんねぇな」
「え〜〜〜〜〜〜っ！」
もう、イジワルだなぁ。
「けちんぼ」
「ナニィ？」
「教えてくれたって、いいじゃないのよぉ」
「うるせぇ！　オレ様はいま機嫌が悪ぃんでぇっ！」
「それじゃ、タダのやつあたりじゃない！」
さすがのボクも怒っちゃうぞぉ！
「ううっ、そ、それをいわれるとツライ……」
急に、スケルトンTは下手にでた。
イジワルなんだか、素直なんだか、よくわかんない。
あ〜あ、ヤなときに来ちゃったなぁ……。ちょうど、スケルトンTの機嫌を悪くする原因を見ちゃったもんなぁ。
スケルトンTはいった。
「オレ様の悩みを解決してくれたら、博士の居場所を教えてやろう」

「悩みって？」
「オレ様は、どぉ〜〜しても、お茶を腹の底から味わいてぇんだっ！」
彼はちゃぶ台の上に立って、グッとこぶしをにぎった。
なるほど、飲んだお茶がすぐ出てきちゃうのが、スケルトンTの悩みってワケね。
「ようするに、お腹からお茶が漏れないようにすればいいんでしょ？」
「ああ、……まぁ、ようするにそういうコトだわな」
「それだったら、いいアイデアがあるわ。なにかでお腹をふさげばいいのよ」
「ふさぐったって……、どうやって？」
「ちょっと待ってて」
ボクは用務員室を飛びだして、美術室からカラのドラム缶と石膏を借りてきた。誰もいなかったから、あとでそっと返しておくというコトで……。
「さっ、ドラム缶の中にはいって」
「なんでぇ、コレは？」
「いいから！」
スケルトンTは、素直にボクのいうとおりにした。
「入ったぜ。で？　どうすんだい」
「あのね、ドラム缶の中に石膏を入れるの。それが固まれば、もうお茶は漏れないよ」

「ちょ、ちょっと待ちやがれ！」

ボクがさっそく石膏（せっこう）の袋をあけようとしたら、スケルトンTは慌ててドラム缶から出る。

「ああっ、出ちゃダメだよぉ」

「バカ！　ンなものなんか入れたら、オレ様は動けねぇだろうが！」

「あ、そうか」

ボクとしたことが……。動けなかったら、お茶なんか飲めないもんね。

「じゃあ、こういうのはどぉ？」

「なんでぇ？」

「校庭のはじっこに穴をほって、手と頭だけ出して埋めるの。それだったら手が動かせるから、お茶が飲めるよ」

「アホかテメェはっ！」

「ひどーい、バカとかアホとかっていうコトないじゃない」

スケルトンTは、震えながらボクの肩に手を置く。目だけは笑ってるケド。

「……あのな、オレ様がちゃぁんと動けなきゃ意味ねぇだろ？」

「どうして？」

「ムキ――――ッ！」

急にスケルトンTは怒りだした。ボク、なんか気にさわるコトいったかなぁ……？

「動けなきゃ、用務員の仕事ができねぇだろが！」

「あ、そうか」

「あ、そうか、じゃねぇ！」

「じゃぁさ、砂場にすれば、埋めてもスグ出られるんじゃない？」

「うが――――っ！　埋めるってのをやめろ――っ！」

「え～っ、ダメぇ？」

「うるせ――っ！　とっとと顔洗って出直してきやがれっ！」

結局、ボクは用務員室から追い出されちゃった。

「ちぇ～っ……」

いいアイデアだと思ったんだけどなぁ。

「はぁ～あ……」

一日目にして、課題はいきなりつまっちゃった。

どうすればいいんだろ……。

ボクは、校庭のはじっこにあるベンチに腰を下ろした。その目の前で、いつのまにか起きだしてたカーバンクルが踊ってる。

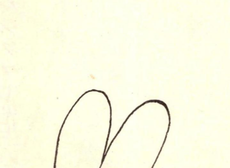
「ぐっぐぐぐーぐーっ、ぐーぐっ」

チンジャオロースー、パークパクって？
そういえば、お腹がすいたなぁ。
でも、せめてシュテルン博士がどこにいるかくらいは突き止めておきたいよねぇ。
これは、ルシファー先生にきくしか……？　とはいっても、いきなり答えを教えてくれるはずもなし……。
「はぁ〜あ……」
またボクはため息をついた。どうすればいいんだろうなぁ……。
「そうだ！」
博士のコトを聞くんじゃ課題の答えになっちゃうから、そうじゃなくて、スケルトンTがお茶を飲めるようにする方法を相談すればいいんだ！　それだったら、博士のコトには関係ないから、きっと教えてくれるはず。
「そーしよぉ、そうしよぉっと！」
ボクは立ち上がった。
「カーくん、行くわよ！」
「ぐー！」
カーバンクルはぴょーんとジャンプして、ボクの肩に乗る。すごいジャンプ力だ。
さてさて、次の目的地はルシファー先生の研究室！

「うふふっ」
なんだかワクワクしてきたぞ。
お昼時だから、ちょっとした楽しみもあるし……。

六　先生のテラスで、ちょっとティータイム★

……う～ん、でりぃしゃす！



ルシファー先生の研究室のある場所は、校舎からちょっと離れた、原っぱの真ん中。
校舎の中に研究室を持ってる先生はいっぱいいるけど、学校から離れてるのはルシファー先生だけしかない。
『私は、ここが好きだからな』
ってルシファー先生はいってるケド、でもホントは、ルシファー先生があんまり人気があるもんだから、ほかの先生がやっかんで原っぱなんかに追いやったんじゃないかって、ボクだけじゃなくて、みんなもそう思ってる。
「シットって、ヤだよねぇ……」

ボクはルルーを見てるから、その気持ちがよくわかる。いっつも「サタン様を取った!」とかなんとかいって、イジメるんだもん。

「ありゃ?」

そのルルーとミノタウロスが、いつのまにかボクの横を歩いていた。

「あ~ら、アルル、どこ行くの?」

ルルーは、さもいま気がついたようなフリをして、タカビーにのけぞってボクを見下ろす。

わ、わざとらしい……。

ボクのことに気がついてたから、そっと横を歩いてたクセに。

「ドコだっていいじゃない。ルルーこそ、どこ行くのよ?」

とはいっても、ボクらが歩いてる方向にあるものはひとつ、ルシファー先生の研究室。

「オーホホホホホホ!」

ルルーは、右手の甲を左のほほに当てて、高らかに笑った。

「ちょっと、ルシファー先生からお呼ばれをしてるのよ」

「呼びだし?」

「呼びだしじゃなくて、お呼ばれ!」

「あんまり変わんないじゃん」

呼びだしってコトは……。

「あーわかった！　なんかやったんでしょ、ルルー。それで、先生から呼びだされて……」
「呼びだしじゃないっつってるでしょ！」
ルルーは怒った。
んもう、スグ怒るんだから……。
「じゃあ、なんなの？」
「あたくしが先に聞いたのよ！」
あ、そうか。そういわれればそうね。
「ボクは、ルシファー先生に課題のコトを聞こうかなぁって思って……」
「オ――ホホホホホホ！」
ボクが全部いい終わるまえに、ルルーはまたふんぞりかえってタカビー笑いをした。
怒ったり、笑ったり、いそがしいコだなぁ。
「甘いわね、アルル！」
「どーして？」
「あたくしはねぇ、ルシファー先生が直々に『課題のことで話しておきたいことがある』って、お呼ばれしてるのよ！　オホホホホホ……！」
ガァ――――――ン！
「ルルー、ずるぅい！」

「オ——ホホホホホ！」

いや別に、ルルーがずるいワケじゃないんだケド……。

「じゃ、あたくしは先に行くわ。じゃぁねぇ〜」

「あ！　ちょ、ちょっと待ってよぉ！」

さっさと歩き始めるルルー。ボクは慌てて追いかけた。

「なによ、先生はあたくしだけに用があるのよ。あなたは関係ないでしょ」

「一緒に行ったって、いいじゃないのよぉ。ボクだって先生に用があるんだもん！」

「どうせ、課題のコトがゼンゼンわかんない〜とかって、そんな用事でしょ？」

「う……」

図星。

「で、でも、ほかの用事だってあるもん！」

「ふん、どーだか」

『なにを騒いでいるんだ？　ふたりとも』

突然、ボクらの上から声がした。……といっても、空から聞こえたワケじゃない。

顔を上げると、ルシファー先生がボクらの目の前に立っていた。先生が、あんまり背が高いもんだから、真上から声が聞こえる感じになるってワケ。

いつのまにか、ボクらはルシファー先生の研究室に着いていた。

先生の向こうに広がるのは、古めかしい二階建ての家と、その脇にある真っ白で統一したテラス。そのテーブルの上には、同じく真っ白なティーセットと、布をかぶせたバスケットが置いてある。
『ケンカはいかんぞ、ふたりとも』
ルシファー先生は、まるでお父さんのようにいった。
「だってぇ、ルルーが……」
「ルシファー先生！　あたくしだけをお呼びになったんですよね！」
ルルーの勢いに、先生はちょっとだけたじろぐ。
『いや、まあ、そうなんだが……』
そういい終わるか終わらないかのうちに、ルルーはタカビーにボクのほうを見た。
「ほぉ〜ら見なさい」
「ぶぅ〜っ」
ボクはむくれた。
なにもそんな、これみよがしにいわなくたって……。
『いや、確かにルルーくんを呼んだのは私だが、別に、人に聞かれてはまずい話というワケでもない。せっかくアルルくんも来たことだし、みんなで楽しくお茶を飲もうじゃないか』
はっはっは、とルシファー先生は、夏の朝日みたいなサワヤカ〜なニコニコ顔を、ルルーに

向けた。
「そ、そうですわね、た、楽しくね。あはははは……」
そんな先生の微笑みに負けて、ルルーのタカビーな気持ちはどっかに行っちゃったみたい。
『まあ、とにもかくにも、みんな座りたまえ。ちょうど、クッキーも焼けたところだ』
「はぁ～い★」
ボクはウキウキしながら、ルルーとミノタウロス、ルシファー先生と一緒に真っ白なイスに座った。
先生の研究所に来るときの、イチバンの楽しみがコレ。
……といっても、綺麗なイスに座るコトじゃないよ。
春風にただよう、ハーブティーと焼きたてクッキーのにおい……。
う～ん、コレですよ、コレ！
ルシファー先生は、格好に似あわず——といっちゃ失礼だけど、お料理やお菓子づくりがホントに上手。ときたま、ボクたちのためにその腕を見せてくれる。だからお昼休みとかになると、いっつもこのテラスは女のコたちでいっぱいなんだよね。
やっぱり、おムコさんにするならこういう人が……。
違う違う、そうじゃなくて、ボクがこういうおヨメさんにならなくちゃ。まあ、ずぅ～っと先の話だけどね……。

「ぐー！」
先生がまだお茶を淹れてる途中だっていうのに、もうカーバンクルはバスケットの前でピコピコと手を振ってる。
『そうか、カーバンクルくんは、お茶よりそっちのほうがいいんだな？』
「ぐー！」
そうだよぉ～ん、みたいな。
『ちょっと待っててくれ、いま布を取ってあげるから』
そういいながら、ルシファー先生はボクらの前にハーブティーを淹れたカップを置いて、そして、バスケットにかぶせてある真っ白なハンカチをパッと取った。
ほわぁ～～ん……。
いかにも焼きたて、っていうクッキーの湯気があたりいっぱいに広がる。
ん～、美味しそう。
『さ、どうぞ』
「いっただっきまぁ～す！」
「ぐー！」
誰よりも早く、カーバンクルは両手にひとつづつクッキーを取って、それを口に入れた。
ぱくっ。

「ぐー！」
ぱくっ。
「ぐー！」
と、始めはひとつひとつ味わっていたのが、
ぱくっ。
ぱくっ。
ぱくっ。
ぱくっ。
ぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱくぱく……。
とだんだん早くなり、最後には……、
「こらっ！　カーくん、キミちょっとペース早いよ！」
ボクはカーバンクルの背中をつまんで持ち上げた。すると、「もっともっとぉ！」とでもいたげに手足をぱたぱたさせる。
『はっはっは。いくらでもあるから、遠慮はいらないよ』
「え、で、でも……」
いきなりルルーが口をはさんだ。
「オッホホホホ……！　いいじゃない、カーバンクルの好きにさせてあげれば。これだから貧

乏人は……」
「ム！　そういういい方するコトないじゃない？」
『まあまあ。……しかし、作った私がいうのもナンだが、そんなに美味しいのかね？』
いきなりの質問に、ボクらはちょっと戸惑った。
先生って、自分の作ったお菓子、食べたことないのかなぁ？
「そ、そりゃぁもちろん！」
「とっても美味しゅうございますわ」
『どれどれ……』
ルシファー先生は、クッキーをひとつつまんで、口の中に放り込んだ。それからしばらく味わって、
『おお！　これはうまい！』
いうが早いか、先生はクッキーの入ったバスケットをいきなり取り上げた。
『こんなにうまいんなら、もう誰にもやらん！』
「え――――っ！」
そ、そんなぁ……。
「先生、いまさらズルイですわ！」
ボクらが本気で抗議すると、ルシファー先生はニッコリ笑って、またバスケットをテーブル

の上に戻す。
『ははは、冗談だよ』
「ぶぅ〜っ！」
「先生ったら、イジワルにもほどがありますわよ！」
『いやははは、すまんすまん』
これさえなければ、ホントにいい先生なんだケドなぁ。そりゃあ、本気で怒るようなコトじゃないんだけどさ……。
『冗談はさておいて、ルルーくんの用事を先に済ませようか』
「なんですの？」
ルルーは小指を立てて、上品そうにお茶を飲んでいる。
『私が思うに、どうもキミは魔法が使えないような気がしてな……』
「ドキ！」
先生の言葉に、ルルーの動きが一瞬止まった。けど、すぐにティーカップをゆっくりと下ろして、手を口に当ててコロコロと笑う。
「ほほほほほ。い、いやですわ、ルシファー先生ったら……」
だいぶ、顔がひきつってるよ。

「あ、あたくしだって魔法は使えますわ。キズを治したりとか、相手を眠らせたりとか……」
それはウソ。実は〝パワーウェイヴ〟とか〝スリープダンス〟とかの技で、魔法みたいなコトをやってるだけ。
まあ、ここはあえて、黙っといてあげよう。
『そうか、それならいいんだが……。ではひとつだけ、忠告しておこう』
「な、なんです？」
珍しく真面目（まじめ）な顔して、ルルーは先生の話に聞き入ってる。それじゃ、自分で「魔法が使えません」っていってるようなものだよぉ。
『私の予感が正しければ、キミが課題をクリアする可能性はゼロに等しい』
「は、はぁ……」
『それをゼロでなくすためには、キミが格闘技で培ってきた〝気〟の力を、魔導力に転換するすべを考えなければならん。それを、頭に入れておいてくれ』
「わ、わかりましたわ……」
ルルーは、はぁ～とため息をつきながら、がっくりと肩を落とした。そりゃぁ、課題ができないっていわれちゃぁねぇ……。ボクだったら泣いちゃってるトコだよ。
でも心なしか、なにかふっきれたようにも見える。やっぱりボクの予想どおり、ルルーの課題は魔法を習得しろってヤツみたい。それをどうやったらクリアできるか、ずっと彼女なりに

悩んでたんだろうね。
『さて、アルルくん』
「は、はい！」
先生がいきなりボクのほうを向いたので、ボクはちょっと驚いた。
『キミの用事はなにかな？』
「え、え〜とですね……」
ボクは迷った。博士のコトと、スケルトンTのコト、どっちを話そうか……。
先生は、相変わらずやさしいニコニコ顔のままだ。
ええぃ、ままよ！
「シュテルン博士って、いったいドコにいるんですかぁ？」
おおっとぉ！ ってカンジで、ルシファー先生はちょっとのけぞった。
『いきなりそう来たか。……まあ、キミのそんな素直なところが、気に入っているのだがな』
「えへへへ」
わ〜い！ 先生に褒められちっった。
『だが、それでは答えを教えることになってしまうからなぁ……。すまんが、それには返答できん。ルルーくんの場合は、クリアする可能性がないと踏んだからヒントを与えたまで。だがキミには力があるのだ、それくらいは自分で考えないとな』

「はぁ、そうですか……」
褒められてウレシイやら、教えてもらえなくてカナシイやら……。
「ホホホホホ！　アルルは相変わらず甘いわねぇ、そんな質問に先生がお答えできるワケないでしょ」
「うっさいなぁ、ルルーは黙っててよぉ」
さっきまで、ずぅ〜〜んって落ちこんでたクセに。
「じゃ、じゃあ、もうひとつ聞いていいですか？」
『なにかな？』
「スケルトンTが、ちゃんとお茶を飲めるようにしてあげたいんですケド……」
ボクは、用務員室であったコトを話した。スケルトンTが、お茶が飲めなくて泣いてたコト、石膏（せっこう）づめや生き埋めにしようとして怒られたコト……。
『ふ〜む……。土や石膏で固めるというアイデアは決して悪くないな』
「そ、そうですよね！」
やっぱり、ルシファー先生ならわかってくれると思った。
『だがそれでは、彼は身動きできなくなってしまうだろう』
「だから、埋める場所を砂場にして、出入りが簡単になるようにしたんですケド……」
『ようするにスケルトンTがいいたいのは、ちゃんとテーブルの上でお茶が飲みたいというこ

とだろう？』
『それをかなえてやるには、どうすればいいと思う？』
「なるほど」
「う～ん……」
ボクは腕を組んで考える。そこへ、ルルーのタカビー笑いが響いた。
「そぉんなコトもわからないのぉ？　アルルは」
「じゃ、じゃあ、ルルーはわかるの？」
「う……」
ルルーの顔が、一瞬だけ固まった。だけど、スグもとのタカビーな態度に戻る。
「も、もちろん、あたくしにはスベテお見通しよ。だけど、あたくしは敵に塩を送るようなお人好しじゃないの。ごめんなさいねぇ」
「なぁ～んだ、ルルーもわかんないんじゃない」
「し、失礼ね！　そうじゃないって、いってるでしょ！」
ルルーが怒って立ち上がると、ルシファー先生がいった。
『まあまあ。ふたりとも、どうしてそうケンカばかりするんだ？』
「だってぇ、ルルーが……」
「あ～あ、こんなコがクラスメイトかと思うと、ため息が出ちゃいますわ」

「ぶぅ〜っ！」

『はっはっは。まあ、ケンカするほど仲がいいというしな』

「な……！」

今度は、先生にルルーが抗議しようとした瞬間、ボクらの後ろから間延びした声がした。

「おぉ〜いぃ、ルシファー先生ぃ！」

ボクはもう驚かない。だって、さっき会ったばかりだもの。

『おや、ゾンビ先生』

「新しい内臓はできてるかぁ？」

『できてますよ。こちらへどうぞ』

ルシファー先生はボクらのほうを向くと、

『キミたちは、そこでお茶でも飲んでてくれ。すぐ戻ってくるから』

といって、ゾンビ先生と一緒に家の中へ入っていっちゃった。

そういえば、ゾンビ先生は内臓を落っことして、新しいのを作ってもらってるっていってたっけ。……ってコトは、ルシファー先生が保健の先生だったの？

「…………」

ルルーは、すました顔でお茶を飲んでる。

彼女に話したらまたバカにされそうだから、ルシファー先生が保健医かどうかを聞くのはや

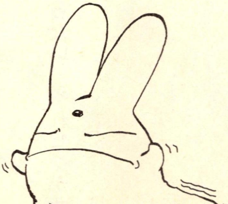
めとこ。
それにしても、ルシファー先生はいろんなコトができるんだなぁ……。あらためて感心しちゃうね。
そうこうしてるウチに、ふたりの先生が家から出てきた。ゾンビ先生のお腹には、また新しい包帯がぐるぐる巻きになってる。
「いやいやぁ、いつもすまないねぇ」
『いえいえ、お安い御用です。今度はしっかり包帯を巻いておきましたから、かなりのあいだは持つと思いますよ』
「！」
ふたりの話を聞いていて、ボクは突然ひらめいた！
「ルシファー先生！」
『なにかな？　アルルくん』
「包帯をい〜っぱいください！」
『どうするのだ？』
「スケルトンTの身体をぐるぐる巻きにするんです。それだったら、ちょっとは動きにくいかもしれないケド、なんとかなるかもしれません」
『なるほど、やってみる価値はありそうだな』

「どぉ？　ルルー、グッドアイデアでしょ？」
ボクがえっへんとふんぞりかえっても、ルルーはすましたまんま。
「まあ、あなたにしては上出来ね」
「………」
聞くんじゃなかった……。
とにもかくにも、ボクはルシファー先生から一抱えもあるたっくさんの包帯をもらって、急いで用務員室に走った。

七　変身、スケルトン・マミー！

……で、博士はドコ？

「なるほど、そりゃいいアイデアだな」
「でしょでしょ？」
カクカクシカジカと一部始終を話すと、スケルトンTは感心してうなずいた。
「よし！　じゃあ、さっそくやってくんな！」



そういって、スケルトンTはどっかりとちゃぶ台の上に座る。
「うん！」
ボクは、彼の身体に包帯を巻き始めた。
「バカ！　ちげぇだろが、そこじゃねぇよ！」
「うっさいわね、動かないでよぉ！　包帯が巻けないじゃない」
あーだこーだとスケルトンTの文句が多くて、なかなか作業がはかどらない。やれヒジが曲らないとか、首が回らないとか……。ちょっとは黙ってて欲しいわ！
カァ〜、カァ〜……。
カラスが鳴く頃になって、ようやく終わった。
「できた〜っ！」
「ぐー！」
あれだけ隙間だらけだったスケルトンTは、もはやガイコツじゃなくなっちゃった。包帯ぐるぐる巻きのモンスター、マミーにそっくり。
「ふ〜む、ナカナカいいじゃねぇか」
鏡を見ながら、スケルトン改めマミーTは、軽く体操をしてみる。
「じゃあ、シュテルン博士のおうちを教えて」
「まてまて、ちゃんと実験をしてからだ」

そういって、スケルトンTはちゃぶ台の前に正座して、コポコポとお茶を淹れはじめた。
そして、ずずぅ〜〜っと、ひとくち。
一分……、五分……、十分……。
包帯からお茶が染みだす気配はまったくない。
「やった！　これでオレ様も、茶の心を腹の底から味わうことができたんだ！　ああ、まさに至上の幸福……！」
スケルトンTは、今度は感無量の涙を流した。
「よかったよかった。……で、博士のおうちは？」
「おお、そうだったな。シュテルン博士は北にいるぞ」
ずずぅ〜〜っとお茶をすすりながら、スケルトンTはいった。
「へ？」
「北だよ」
「北……、って？」
それだけ？
「北に決まってんだろが！　何度も同じことといわせんな！」
「そんなコトはわかってるよ、でも、北っつったっていろいろあるじゃない。どのくらい行けばいいとか、どうやって行けばいいとか……」

「オレ様は知らん」
知らん、といわれても……。
「あんた、用務員さんでしょぉ？」
「ホ、ホントにそれだけしか知らねぇんだよぉ……！」
急にスケルトンTは脅えだした。気が強そうに見えて、実は、かなり気が弱いみたい。
「なぁ〜んだ」
知らないんじゃあ、しょうがないよね。まあ、方向がわかっただけでもよしとしましょう。
ボクは用務員さんの部屋を出ようときびすをかえした。
ちょうどドアを出たところで、後ろから飛んできた紙屑がボクの肩に当たり、ポトリと地面に落ちる。
「なにこれ？」
広げてみると、それは海と陸との境しか書いてない、おおざっぱな地図だった。それには、二重丸とバッテンが一ヶ所づつ書き込まれている。
二重丸の位置はだいたいわかる。いまボクのいる、魔導学校のあるところ。
……ってコトは、そこからずぅ〜っと北にいったバッテンのところに、シュテルン博士の家があるっていうことみたい。けっこうな距離がありそう。ワープの呪文（じゅもん）や、移動の魔法陣使えばなんとかなるかなぁ……？

「あ！」

大事なコトを思いだした。

そういえば、何年か前からワープや魔法陣が使えなくなってたんだっけ。ムッカシイことはよくわかんないケド、空間と空間を結ぶはざまが不安定になっちゃったって、誰だか忘れたケド先生がいってた。一度ワープしたら、もう二度ともとの世界に戻れなくなっちゃったりとか、魔界に落っこちたりとかするって……。

「う〜っ……」

ぶるぶるぶる。

ちょっと背筋が寒くなってきた。もとに戻れなくなっちゃうのは、ちょっとイヤすぎるよ。ルシファー先生とか、ルルーとか、みんなに会えなくなっちゃうなんて……。

でも、シュテルン博士のところまでずぅ〜っと歩くのも、あんまり気が進まないなぁ。誰よ、空間を不安定にさせちゃったのは！　メーワクだなぁ、まったく。

プンプン！

……って怒ったってしょうがない。

それとも、旅の途中でいろいろ修業しろって、ルシファー先生のいう〝運命〟がいってるのかなぁ……？

「…………」

振り返ると、いまやマミーになったスケルトンTが、ボクのことを見つめていた。でもあわててボクから視線をはずして、ちゃぶ台の前に座り直す。

「あのオッサンから地図もらったのを思いだした。大ざっぱだが、ちったぁ役に立つだろ。持っていきな」

「うん、ありがとう!」

なんにしても、この地図のおかげで、なんとか課題がこなせそう。

感謝感謝!

「よせやい、礼をいわにゃならんのはこっちだからな」

てへへへ、とスケルトンTは照れ臭そうに後ろ頭をかく。

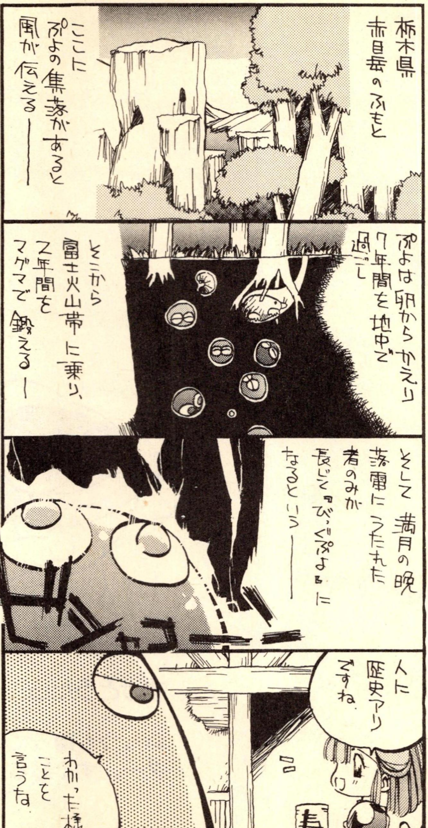
次の日、ボクは、荷物をいっぱいにつめたリュックを背負い、カーバンクルを肩に乗せて、気合いいっぱいで校門を出た。

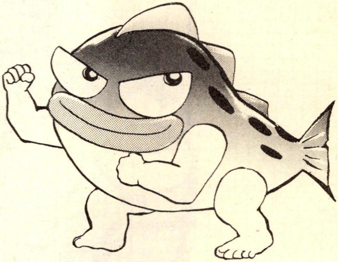
桜ふぶきがボクらを見送ってくれる。

長い長い旅の始まりだ!

夏の章

流星野郎びっくぷよ



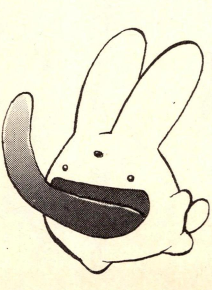


すけとうだら

いっつも踊ってるおさかなモンスター。すぐ怒る。

一　ドンドコドンドコ！

……あ〜、祭りだワッショイ！の季節だなぁ



草木も眠る、夜の真っ只中（ただなか）。

満月の光と、それを映すさざ波が、砂浜にたたずむひとりの少女を照らしだしていた。

いや、少女というより、もはや女性（レディ）としての雰囲気が、彼女にはただよっている。その傍ら（かたわら）には、影のようによりそう牛頭人身の怪物。

ルルーとミノタウロスである。

月明りを頼りに、ルルーは砂浜に巨大な魔法陣を描き、その中心に立った。そして、手にした巻物（スクロール）を開き、詠み始める。

「偉大なる海の魔神よ！　古え（いにしえ）の盟約に従い、我がもとに姿を現わしたまえ……」

呪文（じゅもん）の詠唱が進むにつれ、魔法陣内部の〝気〟が高ぶり、彼女の服、髪をはためかせる。

「はぁっ！」

ドォン！
気合い一閃、ルルーの発した〝気〟は、爆発的に上方へ立ち上った。
しばしの静寂……。
「………」
いくら待てども、あたりは寄せて返す波の音が響くだけ。
「はぁ、また失敗かぁ……」
ルルーは、その場に座りこんだ。
「何度やっても、ちっともうまく召喚できないわ。……やっぱり、ルシファー先生のおっしゃった通りにすべきなのかしら」
ミノタウロスとともにルルーは魔法陣を消し、踵をかえした。
その瞬間！
「！」
沖合いに奇妙な気配を感じ、彼女は振り向いた。……しかしそれは、まったく一瞬の出来事であったようだ。
「気のせいかな……？」
いぶかしげな表情を浮かべながらも、ルルーはスクロールを巻き、砂浜を後にした……。

＊　＊　＊

〝うぉりゃぁ〜〜〜〜〜っ！〟

とばかりに、お日サマがボクらの真上でカンカンしてる。

……そんなに怒らなくたって、ボクらはじゅうぶん暑いよぉ。

ミ〜〜ン、ミンミンミ〜〜ン……。

オ〜シ〜ツクツク、オ〜シ〜ツクツク……。

ショワショワショワショワショワショワショワショワショワショワショワ……。

ジィ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……。

まわりでは、セミさんたちの大合唱。ちょっとうるさいケド、セミさんたちはこの日のために、何年も土の中でガマンしてきたんだもんね。

「夏だねぇ〜」

「ぐー！」

ボクとカーバンクルはいま、北にまぁ〜っすぐのびた街道を歩いてるトコ。まわりでは、ボクの背丈と同じくらいの草でいっぱいの原っぱが広がってて、風が吹くたびにザァ〜ッてゆれている。さざ波みたい。

「そういえば、もう海の季節なんだねぇ……」
学校を出発して、はや数ヶ月。去年までだったら、今頃はもう夏休みで、海で泳ぎまくり～の、山で遊びまくり～の、学校の盆踊り大会で〝魔導音頭〟を踊りまくり～の、ってカンジだったんだけどねぇ……。
だけど、いまのボクにはそんなヒマなんてない。だって旅の商人さんとか、街道の警備員さんとか、いろんな人に聞いてみてわかったんだケド、シュテルン博士の研究所って、ずいぶん遠いところにあるんだもの。道草なんかくってたら、博士のところに着くだけで、一年が過ぎちゃうよ。
いまようやっと、半分くらいかな？
「はぁ～あ……」
でも、せめて盆踊り大会だけでも行きたかったなぁ……。
浴衣(ゆかた)を着て、ウチワかなんか持ってさ、花火をバックに〝魔導音頭〟を踊るのが毎年の楽しみだったのに。
残念だなぁ……。
「ぐぅ～……」
ボクと同じように、肩の上のカーバンクルもため息をついた。でもこのコの場合、踊りよりは、タコヤキとかヤキソバとか、ワタアメなんかが食べられなくて、残念なんだろうケド。

ドンドンドン！
……ああ、太鼓の音が、幻聴になって聞こえてきた。
ドンドコドン！
ハッピ着て、ハチマキやタスキをぎゅっとしめて、やぐらの上で太鼓を叩くのもいいよねぇ。
いちどやらせてもらったケド、あれはナカナカ気分爽快。

ドドン！

「…………？」
幻聴にしては、やけにリアルな音だなぁ。
ボクは立ち止まって、耳をすませてみた。
ドンドンドン！
やっぱり、幻聴なんかじゃあない。かなり遠いケド、本物の太鼓の音だ！……ってコトは、
ボクはいつのまにか、学校に向かって逆戻りしちゃってたワケぇ？
「ガァ―――ン！」
……というのはウソ。
ドンドコドン！
太鼓の音は風に乗って、ちょうどボクらの前のほうから聞こえてきてるみたい。と、いうコ

トは……。

「カーくん、お祭りだよ！」

うまくいけば、ちょっとくらいは踊れるかもしれない！

「ぐー！」

さっきのため息はどこへやら。ボクは足取りも軽く、先を急いだ。

カーバンクルはボクの肩の上でゆられながら、元気に踊りだす。

「ぐっぐぐぐーぐーっ、ぐーぐっ」

チンジャオロースー、パークパクって？

……さすがに屋台じゃあ、チンジャオロースーは売ってないと思うケド。

＊　＊　＊

夜のごとき暗闇(くらやみ)の中、占い師が水晶を見つめる。

静かに、そして困惑の中にほのかな安堵(あんど)の色をおりまぜながら……。

『………』

水晶は、なにも語らない。鼓動する心の臓のように、明滅を繰り返すだけであった。

『…………！』

ふと、占い師は自身の背後に人の気配を感じた。それが誰なのかは、彼にはすでに分かっている。占い師は振り向かずに、意識だけを背後に向けた。

『状況はどうなっている?』

背後の気配が口を開く。その声は、占い師に酷似しているが、微妙な相違点を持っていた。たとえるなら、占い師の声は春の陽光のように暖かく、父親のように優しい。背後の者のそれは、吹雪のように冷たく、鋭く、そして独裁者のように威圧的……。

『いまは膠着(こうちゃく)状態だな』

占い師は答えた。

『無理な魔法的負荷がかからないかぎり、しばらくはなにも起こらないだろう』

『ふん』

背後の声は、不機嫌さを隠すことなく鼻をならす。

『さっさと空間の歪(ひず)みを治せ。このままでは魔界に帰るどころか、空間転移(テレポート)もままならん』

『無茶をいうな。現界と魔界のはざまは、非常にバリケード、……いやデリケートなのだ。無理に治そうとすれば、逆に決壊を早めるだけだぞ』

『それをどうにかするのが、貴様の仕事だろうが!』

ついに背後の声は激昂(げっこう)した。

『そう怒るな。すでにあらゆる手段は講じてある。あとは祈るだけだ。よい結果がでるのを

な』

『ふん！』

魔界の者とおぼしき背後の声は、踵（きびす）をかえした、……ようだ。

『早くなんとかしろ。それだけが貴様の存在価値なのだからな……』

背後の声がそういい終わるか終わらないかの瞬間、

ガッシャン！

『痛（いて）えっ！』

『ひとついい忘れたが、この部屋はかなりちらかっててな、ヘタに歩くと転ぶぞ、……ってもう遅いか……』

『遅（おせ）えよ！　いてててて……』

魔界の男は、占い師とまったく同じ轍（てつ）を踏んだ……。

＊　＊　＊

太鼓の音が聞こえてきたのは、小さな港町からだった。小高い丘まで広がるたくさんの家と、波止場（はとば）に並ぶ船、それから港の隣にある、ちょっとした砂浜。ボクはそれを、ちょっと離れた

丘に登って眺めた。

砂浜の真ん中にやぐらが組まれてて、そこのてっぺんで太鼓をドンドン鳴らしてる。

ドンドンドン、ドンドコドン！

体格のいいお兄さんが一生懸命に太鼓の練習をしてるところをみると、お祭りは今晩にははじまるのかな？

「う〜ん、いいなぁ」

ムリヤリにでも、ここで一泊しちゃおうっかなぁ。

あたりを見回すと、街道は、この町を通って、ずっと西のほうに向かってのびてる。というコトは、このまま街道沿いに歩いたんじゃあ、シュテルン博士のとこには行けない。

「ふむふむ」

ガサゴソガサゴソ……。

ボクは、リュックから地図をだして広げてみた。スケルトンTにもらったこの地図は、始めは真っ白だったケド、いまじゃあボクが自分で書いたり、いろんな人に書いてもらったりしたメモでいっぱいになっている。

「え〜と……」

つつぅ〜っと街道を指でなぞって、ボクは港町のマークを見つけた。位置から考えて、いまボクが前にしてる町と、地図に書いてある町はおんなじところに間違いない。地図のメモを見

ると、〃ここから北行きの船に乗れ〃って書いてある。親切な街道の警備員さんが書いてくれたヤツだ。

……と、いうことは？

（ラッキ――――ッ！）

飛び上がりそうになる自分の気持ちを、ボクはやっとの思いでおさえた。

いやぁ、でもウレシイなぁ。これはきっと、ボクがあまりにも一生懸命やってるもんだから、神様が〃ちょっとは休みなさい〃っていってるんだよ。うんうん。

もうお昼をだいぶ過ぎてるし、今日はここに泊って、明日の朝、船に乗るってコトで……。

「よしっ！　カーくん、お祭りに行こう！」

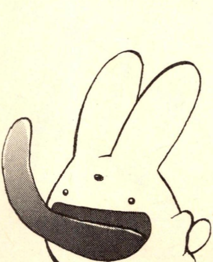
「ぐー！」

ボクはほとんど全速力で、港町に向かって丘を駆け降りた。

こぉんなコトもあろうかと、浴衣（ゆかた）を持ってきたんだもんね！

二　あれれ？　どうしてルルーがいるのぉ？

……ヤな予感がするなぁ



「これでよし、っと！」

夕ごはんをさっさとすませたボクは、宿屋さんでとった部屋の中で浴衣(ゆかた)に着替えた。白地にカーバンクルの柄が入った、お気に入りのヤッだ。

あとはウチワを帯にはさんで、お金——あんまり持ってないケド——やなんかをキンチャク袋に入れてと……。

ドンドンドン、ドンドコドン！

もうお日サマはだいぶかたむいて、太鼓の音にいよいよ熱気がこもってくる。

ワイワイガヤガヤ、窓の外の騒がしさからすると、もうたくさんの人が、表に出てるみたい。

「う〜ん」

コレですよ、コレ！

ボクはお祭りのこういう雰囲気が大好き。なんだかウキウキしてきちゃうよね。

「ぐー！　ぐー！」
カーバンクルが浴衣のすそを引っ張って、早く早くってせかす。もう、イカ焼きやヤキソバなんかの匂いが窓から流れてくるもんだから。
「いい？　カーくん。あんまりお金もってないんだから、アレやコレや買えないんだからね」
「ぐー！」
「……………」
右手を元気にしゅたっとあげて、カーバンクルは答えた。
ボクのいってるコトが、ホントにわかってるのかなあ？……まあ、よくて半分くらいなんだろうケド。
ま、いいか。ちょっとくらいハメを外したって。
「よし！　行こうか、カーくん！」
「ぐー！」
ボクらは、ウキウキ気分で表に出た。
ワイワイワイワイワイワイ……。
ドンドンドン！
ピーヒャラ、ピーヒャラ！
ガヤガヤガヤガヤガヤガヤ……。

ドンドコドン！
ピーヒャララ！
もはや町の中はお祭り一色！
お好み焼き屋さんやヤキソバ屋さん、タコヤキ屋さんにイカ焼き屋さん、金魚すくい屋さんに大人向けの賭博屋さん、エトセトラエトセトラ……。いろぉんな屋台が道にそってずらりと並んで、そこに町の人たちがどわぁ～って集まってる。あんまり人が多くて騒がしいもんだから、太鼓や笛の音が聞こえないくらい。
「屋台を見ながら、あのやぐらまで行って、ちょっと踊ったら帰ることにしようか」
ボクはつぶやいた。疲れるまで踊っちゃったら、また明日からの旅にひびいちゃうもんね。遊んでても、ちゃぁんと課題のコトは忘れない！
う～ん、エライなぁボクって。
「あ～ら。アルル、こんなトコでなにやってるの？」
「わっ！」
突然、後ろから声をかけられて、ボクは飛び上がるほど驚いた。……だ、だって、こんなところに知りあいがいるなんて思わないもん！
しかも、この聞き覚えのある、超お嬢様的な、タカビーな声は……？

「ル、ルルー……？」

「ハァ～イ」

ボクのイヤな予感は大当たり。ボクの後ろに立っているのは、あのルルーだった！

や、やっぱり……。

「ど、どうしてココに……？」

デフォルメしたサタンの顔をちりばめた、うすい水色の浴衣(ゆかた)なんか着ちゃって……。

「あら、先に訊(き)いてるのはあたくしのほうよ。……まったく、しつけがなってないわねぇ」

む！　こ、このナンかひっかかるようないい方。半分なつかしくて、半分ムッとする。

「ボ、ボクたちは、たまたまここに寄っただけだよ。明日、ここから船に乗って北のシュテルン博士のとこに行くんだもん」

「船？」

ピクッ、とルルーの細くて形のいいマユゲが動いた。……なぁんか、アヤシイなぁ。

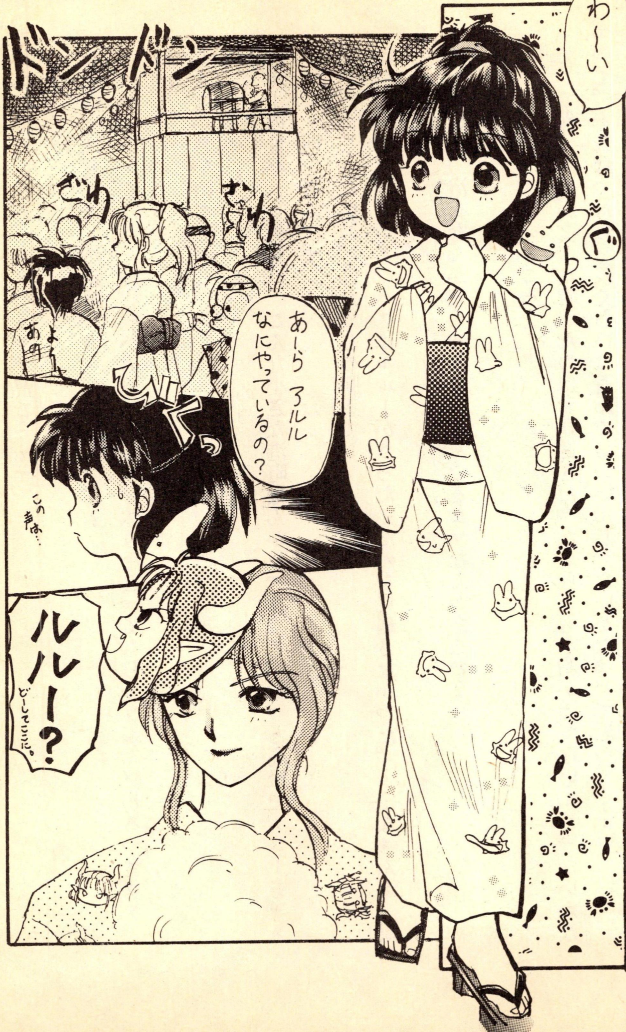
「ルルーは、どうしてこの町にいるの？」

「あたくしは夏休みよ」

「へ？」

ボクが聞き返すと、ルルーはオーホホホホ！　と笑ってタカビーに胸をはった。

「あたくしにかかれば、課題なんてオチャノコサイサイ、へのカッパよ！……あらいやだ、あ


わ〜い
ドンドン
ざわ
ざわ
あのよ
あーら ア ルル
なにやっているの？
ぴくっ
この声は…
ルルー？
どーしてここに。

たくしとしたコトが、とってもお下品な……」
「はぁ……」
そういえば、ルルーの課題って、なんなんだろ？
「とにかく！　あなたとは才能が違うからね、夏休みをとってもじゅうぶん終わるってワケ。おわかり？」
「こんな小さい町で？」
おかしい。
ルルーの性格から見れば、こんな小さな港町なんかじゃなくて、もっと高級で、ゴージャスなリゾート地を選ぶはず。
「い、いいじゃないの、あたくしの勝手でしょ！」
ほんの一瞬だったケド、ボクはルルーがうろたえたのを見逃さなかった。……なぁんか、隠してるなぁ？
「あなたこそ、浴衣（ゆかた）なんか着ちゃって、遊んでるヒマなんかあるの？」
「う……」
し、しまった、痛いところを……。
「で、でも、ボクがここに着いたのはお昼過ぎだったから、もう船が出てないんじゃないかなあって。それだったら、夜くらいは遊んでもいいんじゃないかなぁって思って……」

「あら、ここから船が出るのは、いつもお昼過ぎになってからだって聞いたわよ」
「げ！　マ、マジ？」
「あたくしがウソをいうワケないじゃない」
もうすでに、それがウソ。
でも、こういうときにルルーはあんまりウソをいわないのは本当。
「いいもん！　一日くらい、なんとかするから」
「そう、うまく行くかしらねぇ」
「ぶぅ～っ！」
ってムクれてもしょうがない。過ぎちゃったコトだもんね。明日のコトは、明日に考えましょう！
そう結論が出たら、さっきの疑問がふつふつとよみがえってきた。
「ねぇ、ルルー」
「なぁに？」
「どうして、この町で夏休みをとるの？　ボクには、どぉ――――しても納得できないんだケド……」
「い、いいじゃない、たまには庶民の祭りを見物するのもいいかなぁって思っただけよ！」
「ふぅん」

よく見ると、ルルーはデフォルメ・サタンのお面――ドコで売ってるんだろ?――をかぶってて、手にはワタアメやらヤキソバやら、金魚の袋なんかがい〜っぱいぶらさがってる。〝たまには〟っていうワリには、もう思いっきり楽しんでるようにしか見えないんですけど……。
「その格好で?」
「こ、これも修業のうちよ! 魔導師たるもの、いろんなコトを知ってなきゃいけないでしょ、リサーチよ、リサーチ、おわかり?」
一気にルルーはまくしたてる。こういうときは、なにかをゴマかそうとしてるときだ。実は、ルルーもお祭りが大好き。学校の盆踊り大会のときもそうだったもんね。
「ま、そういうコトにしときましょ。……ところで、ミノタウロスは?」
いま気がついたケド、いっつもルルーの後ろにいる彼の姿がない。
「あそこ」
ルルーが指差したのは、やぐらの上。
「?」
遠くてよくわかんないケド、よくよく眼をこらしてみると、角のはえた身体(からだ)の大きな人間が太鼓をたたいてる。なるほど、あれはミノタウロスだったのか。あとで見に行こうっと。
「あり?」
いないのはミノタウロスだけかと思ったら、いつのまにかカーバンクルもいない。どおりで

静かだと思ったら……。

「！」

いや、そぉんな悠長にかまえてる場合じゃない！　あのコをこんな屋台がいっぱいのところに放したら、お金がいくらあっても足りないよ！

「ボク、ちょっとカーくん探してくる」

ボクはそういって、カーくんを探して人ゴミの中に飛びこんだ。

屋台中を食べつくしてなきゃいいんだケド……。

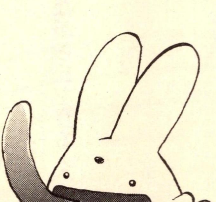
三　祭りも佳境の花火大会！

……は、ちょっとセンチメンタル

ド————ン！　ドド————ン！

お祭りもいよいよ終盤に入って、盛大に花火がうちあげられ始めた頃、ボクはようやくカーバンクルを見つけだし、昼間に町を見下ろした丘に登った。ここからなら、花火がよく見える。

もう、お祭りもじゅうぶんタンノーしたしね。ミノタウロスのナカナカうまい太鼓も見れた



し、それに合わせて踊りも踊った。それよりもなによりも、カーバンクルの被害——屋台もそうだけど、どちらかといえばおサイフのほう——がそれほど多くなかったのがありがたいね。

あとは、ほくほくのタコヤキでも食べながら、花火を見物してオシマイ!

「ぐー!」

「こーら、暴れないの。お口がふけないでしょ!」

ソースでベトベトになったカーバンクルの口をハンカチでふきながら丘を登ると、そこにはすでに先客がいた。

「おりょ?」

誰だろう?

ドドド————ン!

ひときわ大きな花火の光で浮び上がったのは、ルルーの姿だった。

「!」

ルルーの眼から、一瞬だけ光のつぶがこぼれたような気がする。

涙?

……いやまさか。

「ルルー!」

ボクが声をかけると、ルルーは慌ててハンカチを取りだして、眼をふいた。
「どうしたの？　ルルー。泣いてるの？」
「な、なんでもないわよ！」
声はいつものタカビーな調子だけど、鼻の頭と眼が赤い。……やっぱり泣いてたんだ。
「べつに泣いたっていいじゃない。誰も見てないんだしさ。ボク以外は」
「うん。……まぁ、ね……」
ありゃりゃ？　ズイブン素直になっちゃったなぁ。どうしちゃったんだろ？
この丘は、光なんか届かないほど町から離れてるから、けっこう暗い。まわりは人の気配なんかゼンゼンなくて、くさむらの虫が鳴く声と、遠くからの花火の音と光が届くだけ……。
たしかに、こんなところにひとりでいたら、おセンチな気分になっちゃうよねぇ。ボクも、ルルーや、カーバンクルさえいなかったら、泣いてたかもしれない。
「なんか、ひとりで花火を見てたら、急にあのお方のコトを思いだしちゃって……」
「あのお方？……ああ、サタンのコトね」
そう、ルルーが魔導学校に入ったワケはただひとつ！
大好きな〝魔界の貴公子〟サタンにふさわしい魔導師になるため。そのサタンはといえば、ボクを魔界の妃（きさき）にしようと企（たくら）んでた。
いうなれば、ボクとルルーは恋敵（ライバル）ってワケ。ボクはサタンなんかどうでもいい——いや、べ

つに大っキライってわけじゃないケド、一流の魔導師になるには、まだまだやるコトがい〜っぱいあるから、かまってなんかいられない。それに、結婚だとかなんだとかって、まだ早い、……と思う。
ステキな彼氏が欲しいなぁ〜、なぁんてはいつも思ってるんだケドね。
「はぁ……、サタン様は今頃どうしているのかしら……」
ルルーがため息をつきながらつぶやいた。魔導学校に行くために、一緒に旅をしてた頃はいっつも聞いてたセリフだけど、今日はちょっと違う。うわべだけじゃなくて、かなり本気でそう思ってないと出てこない雰囲気だ。
そういえば、ボクがサタンをばたんきゅ〜させてから、一度も会ってない。ちゃんと、魔界に帰ったんだろうねぇ。
ルルーと知りあったのはそのあと。ボクがサタンをばたんきゅ〜させて魔導学校に行く途中、彼を追ってきたルルーとハチあわせしたんだっけ。始め、ルルーは怒りまくって、ボクを殺そうとまでしたんだケド、いまでは魔導学校の——一応なかよしの——同級生。
人生って不思議だね。
「大丈夫、魔界で元気にしてるって！」
ボクがそういうと、ルルーはまたため息をついた。
「いいわねぇ、あなたは。いっつもヘラヘラできて、悩みなんかとは無縁で……」

お、いつもの調子が出てきたぞ。それでこそ、ルルーってもんだね。
「さ、こうしちゃいられないわ」
いきなりルルーは立ち上がって、浴衣(ゆかた)のおしりをはたいて草や泥を落とした。
「いつまでもこんなトコにいたら、お肌が荒れちゃうわ」
出た。
都合が悪くなると、いっつもこの手を使って逃げちゃうんだから。……ルルーの場合、ちょっとくらいおセンチでいるほうがいいんじゃないの？
でも、今日はいつもより元気がないみたい。ボクに泣いてるところを見られたからかな？
「じゃぁねぇ」
おしとやか、かつタカビーな挨拶(あいさつ)を残して、ルルーはうちあがる花火に照されながら、丘を駆け降りていった……。
「…………」
まあ、なんにしても、ルルーは、いつものルルーに戻ったってコトね。

四　げげっ！　船が出ない？

……どどど、どうしてぇ？

〝本日、諸事情により、旅客便はすべて欠航いたします〟

「…………」

次の日の朝、船のチケットを買いにでたボクは、波止場(はとば)の掲示板の前で立ち尽くしていた。

「え〜と……」

な、なにかの悪い冗談だよね。

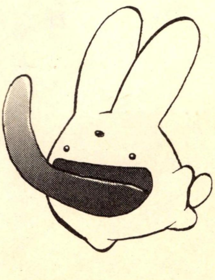
ボクは眼をごしごしこすってから、また掲示板を見た。

……だけど、内容は変わらない。

「あれぇ〜？」

右から見ても、左から見ても、ナナメから見ても、後ろから見ても、上から見ても、下から見ても、やっぱり書いてあるコトは変わらなかった。

「どどど、どういうコトぉ？」



いまさら欠航っていわれても困るよぉ。できるだけ早く北に行かなきゃいけないのに……。
「すいませ〜ん！」
ボクは、チケット売場の小さな窓をコンコンと叩いた。
「掲示板に書いてあるとおりだよ〜」
と窓を開けて顔をだしたのは、イカにも船乗りといったふうの、固め——じゃなくて片目のお兄さん。
「なんだお嬢ちゃん、船に乗りてぇのか？」
「うん。どうしても、北に早く行かなきゃいけないんです！」
「う〜ん、そういわれてもなぁ……。悪ぃが、せめて明日まで待ってくれぃ。いろいろとこっちも事情があんのよ」
「え〜〜〜〜〜〜〜っ！」
ボクが思いっきりイヤそうな顔をすると、お兄さんは困った顔をしてポリポリと頭をかいた。
「乗せてやりてぇのはヤマヤマだが、船がだせなきゃしょうがねぇんだよなぁ」
「どうしてだせないんですか？」
「お嬢ちゃん、口はかてぇほうか？」
急に、お兄さんはマジメな顔で身を乗り出してきた。
「う、うん……」

あんまり自信ないケド……。
「これはオレもよくわかんねぇんだケドな、事情っつーのがどうも、沖に妙な怪物が出るからしいんだよ」
「か、怪物ぅ？」
「わ――――っ！　バカ！　声がでけぇよ！」
「ご、ごめんなさい……」
「いきなり船だして、お嬢ちゃんも怪物に食われたかねぇだろ？　だったら、その騒ぎが収まるまで、もうちょっとだけガマンしてくれや、な？」
「…………」
ほんの一日だけ寄り道しようとしただけで、どうしてこんなコトになっちゃうのぉ？
神様のイジワル！
はぁ〜あ、こんなコトになるんだったら、さっさと船に乗ってればよかったなぁ……。
「そんなに、北に行きてぇのか？」
「う、うん……」
もう泣きそう。声もまともにでないよ。
お兄さんはしばらくボクの顔を覗（のぞ）きこんで、いきなり、パン！　と手を打った。

「よしわかった！　なんとか明日の朝イチに船がだせるよう、オレが手配しといてやる。それくれぇなら待てるだろ？」
ボクはこぼれそうになる涙をぐいっとふいて、お兄さんに向かって微笑んだ。
「うん、ありがとう！」
「なぁ～に、礼はいらねぇよ。女の子を泣かすなぁ、海の男のやるこっちゃねぇからな。ま、今日のところは海水浴でもして待っててくれや。波打ち際なら怪物もでねぇだろ。夜が明けたら、またここに来な」
「うん！」
ボクは、お兄さんに向かって深々とおじぎをして、宿屋さんへと歩き始めた。
優しいお兄さんだなぁ。そういえば昨日のお祭りのとき、カーバンクルが屋台のものをつまみ食いしてまわっても、みんな笑って許してくれてたっけ。この町の人々は、みんないい人ばっかりだね。
優しいのはいいんだけど、結局、ボクは今日一日なにもやることがなくなっちゃった。お兄さんは、海水浴でもしてろっていってたケド……。
水着なんか、ボク持ってきてたかなぁ。
「え～と……」
宿屋さんに戻ってリュックをあさったら、運よくというかなんというか、奥のほうから水泳

の授業で使ってた紺色でワンピースの水着が出てきた。ラッキー、ラッキー。
……こういうところだけ、ボクは運がいいんだよねぇ。
「ま、せっかくだから泳いでみますか」
「ぐー！」
ボクは海の家で水着に着替え、カーバンクルと一緒にあっつい砂浜に飛びだした。もちろん、裸足（はだし）じゃヤケドしちゃうから、ちゃんとサンダルをはいてね。
カ～～～～～～～ッ！
お日サマが、昨日より激しく燃えてる。まるで、いっつも炎をまとってるファイヤーエレメント先生みたい。街道をてくてく歩くにはちょっとツライけど、泳ぐにはちょうどイイね。
ちゃぁんと準備体操をしてから、
「そぉ～れっ！」
とばかりにボクとカーバンクルは海に飛びこんだ。
「ぷはぁっ！」
う～ん、冷たくて気持ちがいいな★
結局、また一日つぶしちゃうコトになっちゃったケド、そんな悩みなんか一発で吹き飛んじゃうね。
「ぐー！」

カーバンクルが小さな手足をパタパタさせて、ボクの前を横切る。
「わぁ～！　上手だねぇ、カーくん」
「ぐー！」
どうやったら、あんなに小っちゃい手足で泳げるのかわかんないケド、少なくともボクよりは泳ぎがうまい。ちなみに、ボクはあんまり泳ぎが得意じゃない……。
「ぐー！」
カーバンクルは調子に乗って、どんどん沖のほうに向かって泳いだ。
「カーくん！　そんなほうに行っちゃアブナイよぉ！」
ボクがそこまで泳げないっていうのもあるケド、それよりなにより、お兄さんのいってた怪物がでたりなんかしたら……。
くるっ。
いきなりカーバンクルは回れ右をして、ボクのほうに向かって泳ぎ始めた。
「そうそう、それでいいの。……あり？」
カーバンクルのようすがおかしい。ボクの声で帰ってきた、というよりは、なにかに追われてるみたいなカンジ。
「？」
よく見ると、水面から飛びだしたふたつのとんがったモノが、カーバンクルを追っかけてい

た。……も、もしかして、アレが怪物ってヤツ……？

「カ、カーくん！　早くこっちに！」

ボクの頭にカーバンクルが飛び乗ると同時に、ふたつのとんがったモノは、トップンと水の中に沈んでいった。

「…………？」

落ち着いてよぉ〜く考えてみると、あのとんがったヤツ、どっかで見たことないかい？　そう、誰かの角みたいな……。

なぁんて考えてると、いきなりっ！

「ぶも——っ！」

バシャ——ン！　と水しぶきをあげて、ナニかがボクらの前に飛びだした！

「キャ——ッ！……あわっ！」

ボクは驚きのあまり、足をすべらせて溺(おぼ)れそうになった。

「がばごぼげべ……」

く、苦しい……！　し、死んじゃう……！

と思った途端、誰かに身体(からだ)をつかまれ、水からガボッと引きだされた。

「あり？」

ボクを助けたのは、あのミノタウロス！
彼の顔を見た途端に思いだした。
水面から顔をだしてたふたつのとんがりは、ミノタウロスの角だったってワケ。
「ぶも〜っ……」
ミノタウロスはすまなそうに鳴いて、ボクをはなした。
「もう、ヒドイよぉ！　いきなり脅かすなんてさ」
「ぶもー」
いやいや、ごめんごめん、ってカンジ。……まったくもう！
「オーホホホホホホ！　すばらしい驚き方だったわ、アルル」
浜辺のほうから、超イヤミな高笑いが聞こえてきた。その声の主は、ボクは絶対に間違えるはずがない、あのルルー！
振り向くと、やっぱりルルーが波打ち際に立っていた。もちろん、水着。だけど、ボクみたいなスクール水着じゃなくて、髪と同じ水晶色のセパレーツだ。とっても露出度が高くて、ボクなんかじゃとうてい着られそうにない。ついでに腰には、昨日の浴衣(ゆかた)と同じデフォルメ・サタン柄の大きなスカーフを巻いてる。
「ルルー！　キミがミノちゃんをけしかけたのね！　まったくもう、いじわるなんだから！」
そういいながらボクは、ミノタウロスやカーバンクルと一緒に海からあがった。

「まあまあ、そんなに怒んなくてもいいじゃない。ほんの御挨拶よ」

くるりと踵をかえして、ルルーは自分のパラソルのほうへと歩きだす。昨日のおセンチな雰囲気は、ゼンゼンない。安心するというか、ムカムカくるというか……。

「で？ もうそろそろお昼になるケド、出発の準備をしなくていいの？」

「う……」

パラソルの下に座ると同時に、ルルーは思いっきり痛いところをついてきた。

「船、なんだか知らないケド、しばらく欠航なんだって」

そのワケは、関係者をのぞいてボクだけしか知らない。

「欠航……？」

また、ルルーの眉がピクリと動いた。昨日、お祭りであったときと一緒だ。

「ルルー、なぁんか隠してるでしょ？」

「な、なにいってんのよ、アルル。あたくしがそんなコトするワケないじゃない」

大ウソ。

ルルーってば根が正直だから、ゴマかそうとしてもスグわかる。

「………」

「それよりアルル、あたくしもシュテルン博士のところに連れてって！」

ボクより早く、いきなりルルーが口を開いた。

「は？」

「あたくしずっと考えてたのよ、〝気合い〟を魔導力に変える方法を。でも、どうしても答えがみつからなくて……。で、シュテルン博士って、優秀な魔導師で、それなのに格闘家じゃない？　彼に会えば、きっと答えが見つかると思うのよ」

「は、はぁ……」

こうやって、ルルーが一気にしゃべるときは、ナニかをゴマかそうとしてるとき。だけど、いってるコトそのものには、ウソはないみたい。

まあ、無下(むげ)にダメとはいえない——個人的には、あまり気が進まないケド——し、断る理由もみつからない。

「まあ、いいんじゃないの？」

「ホント？　やっぱり持つべきは友達よねぇ」

「はぁ、そうだね。……で、なにを隠してるの？」

「ドキ！」

いくら学校の成績がよくなたって、それでゴマかせるほど、ボクはおバカじゃあない。

「あ、こうしちゃいられないわ！」

「いつまでもこんなトコにいたら、お肌が荒れちゃう、って？」

ふっふっふ、もうその手はくわないよ。
「ううっ……」
ルルーは、完全にうろたえてる。こんな彼女を見るのは、初めてじゃないかな？
「さあさあさあ、白状してもらいましょうか！」
う～ん。なんか、悪人を裁くお奉行サマの気分だね。
「はぁ～……」
ついに観念したのか、ルルーは大きなため息をついた。
「実はねぇ、あたくしの課題は〝召喚魔法〟をマスターすることなの」
「召喚魔法って……」
ボクだってロクに使えない、ものすごぉ～くムツカシイ種類の魔法じゃなかったっけ？　これが得意なのは、あのルシファー先生。指をパッチンと鳴らしていろんな物を取りだすのも、召喚魔法の一種だって聞いたコトがある。
それが、よりにもよって魔法が使えないルルーのところに行くなんて……。やっぱり、神様ってイジワルだよね。
「そりゃあ、最初はひとりでなんとかなると思ったわ」
ルルーは、ひとりでずっとしゃべり続けてる。昨日のおセンチな気分が、またほんの少しだけぶり返したみたい。自己陶酔ブリッコも混ざってる。

「でも、いっくら召喚魔法のスクロールの通りにやっても、なぁんにも出てこない。やっぱり、ルシファー先生のおっしゃった通り、あたくしの〝気合い〟を魔導力に変える方法をみつけなきゃいけないみたいね……」
「ふんふん」
「で、シュテルン博士のところに連れてってもらおうと思って、先回りしてあなたを待ってた、っていうワケ」
「なるほど」
そういうワケだったのね……。ルルーも苦労してるんだなぁ。
「だったら昨日のうちに、はっきりいってくれればいいじゃない」
「…………」
いや、気持ちはわかるんだ。はっきり素直にいえないから、ルルーなんだよね。それが、いいところでも、悪いところでもあるんだケド。
「う〜ん……」
ルルーの悩みは、よぉ〜くわかった。だけど、もうひとつ謎が残ってる。
「それが、船の欠航と、どーいう関係があるワケ？」
「う……」
またルルーは絶句。

「い、いや……、そ、それは知らないわよぉ」
「ウソウソ、ついでだからゼンブ話しちゃいなよ。誰も怒らないからさぁ」
「あ、あのね、実はあたくし、あなたが来る前にここでもう一回だけ召喚魔法を使ったのよ。もちろん結果は失敗……」
「それが、思いっきり関係してると」
「たとえばの話よ！　ぜんっぜん無関係の可能性だってあるわ。ただ、あとで見たら、そのときに使ったスクロールの〝召喚期限〟が二十年も過ぎてるじゃない」
「召喚期限？」
ルシファー先生から聞いたコトがある。召喚魔法っていうのは、基本的に魔界からのナニかをボクたちの世界に呼びだすもの。
だけど、ボクらの世界——現界とおなじように、魔界も常に変化してる。その変化にあわせるのと、古い呪文(じゅもん)を使ったりして事故が起きないように、巻物やなんかには〝召喚期限〟っていうのがついてるんだって。
期限の切れた呪文を使うと、どんなコトが起こるのかは知らないケド……。
「ようするに、なんか事故があったんじゃないかと」
「そそそ、ちょぉっと心配だったワケよ。オホホホホホ……！」
笑ってる場合じゃないような気がするんですケド……。

だって、ボクが先に進めないのは、ルルーのせいかしれないんだもん。だけど、なんだかあきれちゃって、怒る気力もわいてこない。
「ルルー、もしキミが間違って召喚したものを、魔界に帰す方法はないの？」
「一応、スクロールの最後に書いてあるわよ」
「じゃ、明日の朝に出発するんだけど、そのときにもし怪物が出てきたら、ルルーがなんとかするってコトで」
「え〜〜〜〜〜っ！　なんであたくしが……」
ルルーは、思いっきりイヤそうな顔をした。
「誰のせいだと思ってんのよ！……あくまでもたとえばの話よ。ルルーが間違って召喚したものだとわかったら、というコトね」
たぶん、そうなるような気がするケドね。
「う〜〜……」
なんだか、いつもと立場が逆転してるなぁ。ま、そういつもあるワケじゃなし、たまにはいいんじゃないの？
「ルシファー先生もいってたじゃない。『自分のまいたタネは、自分で刈り取る。これが鉄則だ』って」
ボクは、できるだけ先生の口調をマネて話した。

「…………」

さすがのルルーも、これには返す言葉がない。

「ぐー！」

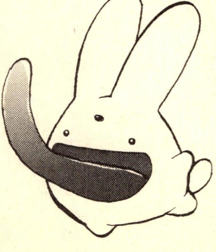
「ぶもー！」

どおりで静かだと思ったら、カーバンクルとミノタウロスは、波打ち際でずっと砂遊びをしていた……。

とにもかくにも、ボクがまたルルーと旅するコトになったっていうワケね。……ま、ちょっとくらいはにぎやかなほうがいいか。

五　出た！　デェ〜ッカイ〝すけとうだら〟！

……大物だねっ★



朝っ！

ボクはお日サマがまだ顔をだしきらないうちに、ルルーをムリヤリ起こして、片目のお兄さんが待ってる波止場（はとば）へと急いだ。

そういえば、お兄さんの名前を聞いてなかったっけなぁ……。
「おっ、来たな」
お兄さんは、力強い笑みを浮かべて、ボクらを迎えてくれた。
「すいません、人数が増えちゃったんですケド……」
「ああ、かまやしねぇよ。オレの船は頑丈だからな」
「へぇ〜」
そういいながらお兄さんが案内してくれたのは、確かに頑丈そうだった。木も使ってるケド、ほとんどが鉄でできてて、帆のところやらなにやらに、いろんな仕掛けがくっついている。こんな船、いままで見たことない。普通の船より、サイズが大きいし。
「はぁ〜……」
ボクらがあっけにとられていると、お兄さんは船の中に乗りこんで、ボクらを手招きした。
「昨日のうちに、操船システムに行き先を入力しておいた。あとは勝手に、こいつがキミたちを北の港町まで運んでくれる。いまからなら、夜には着けるだろ。ただし！　この操船システムにはさわるなよ。計算がくるうからな。……じゃ、またな」
それだけいい残して、お兄さんは船から降りようとする。ボクはそれを、慌てて引き止めた。
「ちょ、ちょっと待って！　お兄さんが連れてってくれるんじゃないんですかぁ？」
「う〜ん、そうしたいのはヤマヤマだが、オレも仕事があってなぁ……。だから、とっておき

の自動操船ができるヤツをひっぱりだしてきたってワケよ。シュテルン博士が造ったヤツだから、一応は信頼していいぜ」
「え？　シュテルン博士をご存知なんですか？」
ルルーが口をはさんだ。
「おう、よく知ってるぜ。ちょっと偏屈だが、腕は確かだ」
「ボクたち、その博士のところに行くんですよ」
「ほう、博士の教え子さんかい？」
「まあ、そんなようなもんです」
お兄さんは、またニヤリと笑った。
「そうかそうか、じゃあ、博士に会ったら伝えといてくれ。ドレイクがよろしくってな」
「うん！」
お兄さんは、ドレイクさんって名前だったのね。
「そうだ、お嬢ちゃんたちの名前は？」
「ボクはアルル」
「あたくしはルルーですわ」
「で、こっちがカーバンクルとミノタウロス」
「ぐー！」

「ぶもー！」
「よし！　アルルにルルー、それからカーバンクルとミノタウロス、機会があったら、また遊びにこいよ！」
そういうと、片目のドレイクお兄さんは船から飛び降りて、波止場（はとば）と船とを結んでたロープをほどいた。同時に、船がゆっくりと動きだす。
「さようなら〜っ！」
ボクはドレイクお兄さんに向かって、手を大きくふった。
「気ぃつけろよぉ〜っ！」
というワケで、ボクらはようやく北へと再び進むことができたのだった。
動かす人のゼンゼンいない船なんて、始めはなんとなく怖くて落ち着かなかったケド、すぐにボクらはくつろいだ。完全に慣れちゃえば、こんなに気楽な船旅はない。なんといっても、乗ってるのはボクとカーバンクルと、ルルーとミノタウロスだけ。乗り合いの船なんかとは、リラックスの度合いが違うよね。
カンカンのお日サマが、ボクらの真上に来たころ、ボクは甲板に出てみた。
「う〜ん……」
さわやかな海の風が、ほほにあたって気持ちいい。ちょっと、お日サマが眩（まぶ）しすぎるケドね。
朝にでて、夜に着く計算だから、ちょうど半分くらいは進んだのかな？

「あり？」
前のほうに、山みたいな、島みたいな、大きな物の影が見える。
……もう北側の港町に着いちゃったの？　いや、そんなはずはないよねぇ。
ボクは船室から望遠鏡を持ってきて、その大きな影を観察した。
「なに、アレ？」
見れば見るほど、不思議でしょうがない。
い、い、い、い、い、い、い、い、
なんで、あんなのがあそこにいるワケ？
「ルルー！　ルルー！」
ボクは大声でルルーを呼んだ。
「なによ、そんなに慌てて。真夏の太陽はお肌に悪いから、あんまり外にでたくないんだケド」
昨日のしおらしさはドコへやら。いつものルルーに戻っちゃってる。……ウレシイやら、カナシイやら。
まあ、そんなコトはおいといて。
「ルルー、アレ見て！」
と大きな影を指差して、ルルーに望遠鏡を手渡した。
「…………！」

さすがのルルーも、アレの正体には絶句してる。
「アレって、あんなに大きかったっけ？」
「さあ？」
ボクだって知らない。ヘタをしたら、ルシファー先生だって知らないんじゃないの？
船が進むにつれて、やがて、望遠鏡を使わなくても大きな影の正体がはっきり見えるようになってきた。
ボクらが見たアレというのは、タラ——お魚の名前ね——に手足をつけたモンスター、その名も〝すけとうだら〟！
もともと、すけとうだらは海のお魚だから、普通だったらべつにボクらも驚かない。問題は、あまりにも大きすぎるってコト。ざっと見ても、ボクらが乗ってる船よりもはるかに大きい。
あともうひとつ、重大な問題がある。それは、このまま船が進んだら、あの巨大すけとうだらにぶつかっちゃうってコト！
船はそんなに速くないから、向こうがこっちに突進してこなければ、ぶつかってもバラバラになっちゃうってコトはない、と思う。
だけど、ヘタに暴れられたら、転覆しちゃうかも……！
「グ〜〜〜ッ、グ〜〜〜〜ッ……」
おっきなすけとうだらは、ボクらなんか簡単に吹き飛んじゃいそうな寝息をたてて、お昼寝

の真っ最中。その寝息に正面からあおられて、船がますます遅くなってくる。
ついでに、コースをほんのちょっとだけ変えてくれればいいのに……。
そんなボクの願いも空しく、船はすけとうだらの鼻先に、ゴンッ！　とぶつかった。
その途端！
「うが〜〜〜っ！　誰だ〜〜っ！　オレのお昼寝タ——イムを邪魔するヤツはぁ〜〜っ！」
と叫んで、すけとうだらはグワァッ！　と起き上がった。そのショックで、ヘタな嵐なんかよりモノスゴイ波がたち、船が大きく揺れる。

ドッパア————————ン！

「わぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
「キャ——————ッ！」
「ぐー！」
「ぶもーっ！」
ボクらはロープやらなにやらにつかまって、振り落されないようにと踏ん張った。
どうか、転覆だけはしませんように……！
この願いだけは、神様は聞いてくれたみたい。波がおさまっても、ボクらはまだ甲板の上にいることがわかった。


どっぱ〜ん

「なんだぁ〜〜〜〜〜っ！　お前たちゃ〜〜〜〜っ？」
　ジロリ！
　と、すけとうだらは大きな眼でボクらを見下ろす。
「おっきなすけとうだらさん、ちょっとココを通らせて！」
　ボクは大声を張り上げて、すけとうだらに向かって話した。
「イヤだね！」
　すけとうだらの返事はそっけない。
「どうしてぇ？」
「オレのお昼寝タ——イムを邪魔したからだ！」
「お昼寝を邪魔したコトはあやまるわ！　だけど、あたくしたちはどうしても北に行かなきゃならないの！　お願い、通して！」
　ルルーも、一生懸命に説得する。
「ダメだよぉ〜〜ん！」
「どうしても？」
　とボク。
「う〜〜〜ん……。方法がないコトもないが、お前たちにゃぁ無理だろう」
「ナニソレ？」

う、なぁんかイヤな予感がするなぁ。
「あのな、オレはもともと魔界の住人なんだよ。それがだ！　なんだか知らねぇが、気がついたらこんなトコにいたって寸法よ……」
やっぱり。昨日からそんな予感はしてたんだケドねぇ……。
「ルルぅ〜っ……」
ボクは、ジトーーッと横目でルルーを見た。
「オ、オホホホホホ……！　ま、まあ、そうなの、大変ねぇ」
冷や汗たらたらのルルーを尻目(しりめ)に、ボクはすけとうだらに向かっていった。
「ようするに、すけとうだらさんを魔界に帰してあげればいいんでしょ？」
「で、できるのか？」
「うん！　このお姉さんができるよ！」
「え？　あ、あたくしぃ？」
「おお、そうか！　だったら早ぇとこやってくんな」
「な、なんであたくしが……！」
うろたえるルルーを、ボクはまたジト眼で見た。
「キミのせいだかんね。ちゃぁんと責任とってよ！」
「えぇ〜〜〜っ！　だってあたくし、魔法なんて使えないのよぉ」

またまた本音がでたぞ。それに、立場も逆転してるし。
「大丈夫、ボクにいい考えがあるんだ！　さ、呪文の準備しよう！」
ゼンゼン乗り気じゃないルルーの手を引っ張って、ボクらは召喚——の逆——魔法の準備を始めた。まず甲板いっぱいに魔法陣を描いて、その真ん中にボクと、スクロールを持ったルルーが立つ。
「さ、呪文を唱えて」
ボクはルルーの手を握りながらいった。
「…………？」
「ボクがキミに魔導力を送れば、たぶん成功すると思う」
ルルーはもともと気力の高いコだから、ボクが魔導力を送ってあげれば、なにかしらのキッカケにはなるはず！
「どうしたどうした、やっぱできねぇんだろ？」
上からすけとうだらが急かす。早くしないと、また暴れちゃうよぉ。
「早く！」
「わ、わかったわ」
ルルーは大きく深呼吸をしてから、巻物に書いてある呪文を詠み始めた。
「現世に迷いし子羊よ、使者の名において命ずる。母なるもとへ帰りたまえ……！」

呪文が進むと同時に、ルルーの〝気〟がドンドン高まっていくのがわかる。それにあわせて、ボクは握った彼女の手を通して、ありったけの魔導力を送りこんだ。

さらに〝気〟がふくらんでいく。ボクらの服や髪が、〝気〟の風で大きくバタバタとはためいた。でも、そんなコトなんか気にしてられない。

「はぁっ！」

ルルーが気合いを発した瞬間、真っ白な光がボクらを包みこんだ！

グオオオオオオオオオオオッ！

その真っ白な光は、やがて船全体を、さらにすけとうだらをも巻きこんでいく。

そして……、

「ありがとぉよぉぉぉぉぉ……！」

すいこまれるような、間延びしたすけとうだらの声が、どこか遠くから聞こえたような気がした……。

＊　＊　＊

夜空に浮かぶ月……。

いや、それは暗闇(くらやみ)の中にたたずむ、占い師の水晶であった。
主のいない部屋の中で、水晶は生物の心臓のごとく、明滅を繰り返す。
ふと、糸を引くように光が弱くなっていった。
そして……！

カッ！

また出し抜けに、水晶は太陽のそれよりも鋭く、まばゆい光を放った！
……ピシッ！……
水晶は、表面に亀裂(きれつ)を走らせる。まるで、自らが放つ光に耐えきれなくなったかのように。
やがて光は、再び鼓動のような明滅を繰り返し始めた。
しかし水晶の主は、ここにはいない……。

＊　＊　＊

「！」
突然の肌寒さを感じて、ボクは眼が覚めた。
まわりはもう真っ暗。さっきまでカンカンに怒ってたお日サマは、いつのまにかお月サマに

バトンタッチしてる。
「ありゃ？」
立ち上がろうとしたケド、身体(からだ)がいじょぉ〜〜に重くてダメ。
ゆ〜らゆ〜ら、と身体が揺れてる。ってコトは、船の上にまだいるコトは確かみたい。
首だけ動かしてまわりを見回すと、気を失って倒れてるルルーと、ミノタウロス、カーバンクルの姿が見えた。
でも、おっきなすけとうだらの姿はない。
その代わり、町の灯(あか)りが眼に飛びこんできた。
……と、いうコトは？
「ル、ルルぅ〜〜……」
こ、声もまともにでないよぉ。魔導力の使いすぎ。
「魔導力、なぁい」
ってカンジ。
「う、う〜ん……」
ようやくルルーも眼が覚めたみたい。
「す、すけとうだらはぁ？」
「魔界に帰ったんじゃなぁい？　たぶん……」

呪文が成功して、すけとうだらは魔界に帰った。だけど、魔導力と気力を使い果たしたボクたちは力つきて、気を失っちゃったみたい。そして、ずっと船がここまで運んでくれてたんだろう。

「オ、オホホホホホ……。あたくしの実力からすれば、こ、これくらい……」

どてっ。

安心したら、またルルーは気を失っちゃった。

「ううっ……」

ボクも、もう倒れそう……。

でも、単に身体が動かないというだけで、心は不思議とさわやかに晴れてる。なんたってルルーと協力して、召喚期限の切れたスクロールの呪文を成功させちゃったんだもんね。ボクたちは決して、実力がないワケじゃあないんだ！

そうやって自分を褒めても、やっぱり身体は動かない。

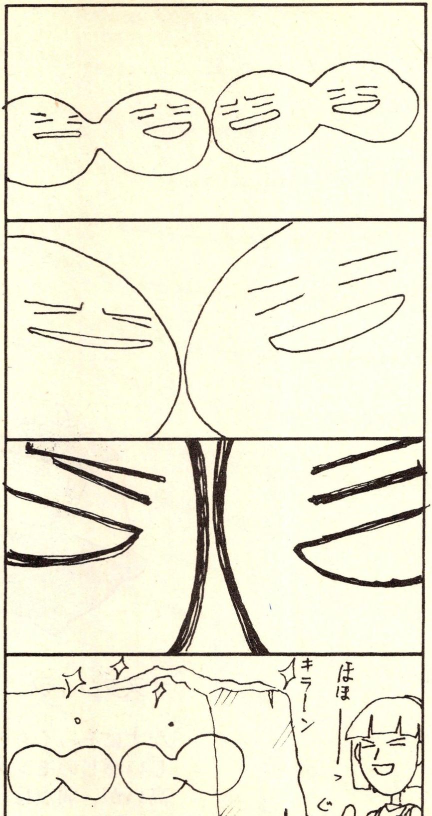
そんなボクたちを、月の光が優しく包み、そして、北の港町の灯りが暖かく出迎えてくれていた……。

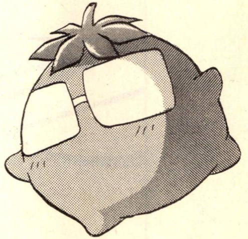
ルルーとミノタウロスを加えたボクらの旅は、もうひとがんばりってトコ！

ふにゃぁ〜〜……。

秋の章

つまらないくん



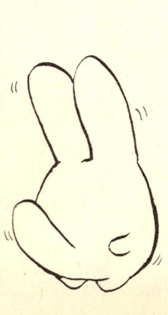


ナスグレイブ

なすにそっくりの、ちょっと気難しい感じのモンスター。防御力は高いが、弱点は好き嫌い……？

一　ルルーと一緒にしゅっぱぁ〜っ!

……はいいけれど



……ドクン……ドクン……。

……ドクン……ドクン……。

くぐもった音が、規則正しいリズムで耳の奥に響く。

何者かの歩く音？　いや、心臓の鼓動のような……。

（オレは、死んだのではなかったか？……少女（ヤツ）の強大な魔導力に負けて）

少年はそう思った。

かつて、少年はとある少女に戦いを挑んだ。彼女に隠された無尽蔵の魔力を吸収せんがために。結果は敗退。少女の放った呪文（じゅもん）に耐えきれずに胴を吹き飛ばされ、首だけになってもなお戦ったが、やはり負けた。

だが、耳の中で跳ね回る鼓動は、明らかに自身のもの。生命の気配は、まわりにはまったく

感じられない。
「…………」
少年は、薄く眼をあけた。
そこには、見覚えのある光景が広がっている。そう、少女を捕らえ、とじ込めておいた迷宮の出口だ。脱出を試みた少女を取り押さえるべく、自らおもむいたのが、返り討ちにあってしまったのであった。
そんな迷宮が、そのままの姿で——いや、積もったホコリの量からみて、それなりの時間が経過しているようだ。
とにかく、オレはここにいる。地獄に落ちたワケではない。
「…………！」
泣き別れになった四肢の感触もある。どころか、かつてよりすこぶる状態がいい。全身の魔導力が充実している。
少年は立ち上がった。
銀色の髪に、黒を基調とした服とマント、それに施された髪と同じ色の装飾。目鼻だちは極めて整っているが、切れ長の眼が、邪悪な光をたたえている。
「原因はわからぬ……」
そう少年はつぶやく。声の中には、外見とはうらはらに、老獪（ろうかい）な、古代魔法をも習得した魔

導師の響きがあった。
「だが、神……いや悪魔は、まだオレに死ぬなといってるらしい」
そう思うと、えもいわれぬ幸福感、満足感がふつふつと湧き上がってきた。自分自身がいままで成してきたことは、決して間違ってはいないのだ！
「ふはははははははは……！」
迷宮全体に響くほどの高らかな声で、少年は笑った。

「待ってろよ、アルル！」

＊　＊　＊

「ふぁっくしょ――――んっ！」
予期せぬクシャミに、ボクは両手にナイフとフォークを掴んだまま、お皿に顔をつけちゃいそうなくらい思いっきり身体を折り曲げた。
「きったないわねぇ……」
テーブルをはさんでボクの前に座っているルルーが、ハンカチを自分の口に当てて、心からイヤそうに横を向く。

「食事中に、なぁんてはしたないの？」
「ご、ごめん……」
誰か、ボクのことをウワサしてるのかな？　ルシファー先生が心配してくれてる、っていうんだったらウレシイなぁ……。
そんなボクの気持ちを台無しにするように、ルルーはいった。
「これだから、庶民のコは……」
「……………」
そりゃぁ、ボクはマナーのいいほうじゃないケド、出ちゃったものはしょうがないじゃない。ナニもそこまでいわなくたってさ……。
と口に出していうと、またキリがない口ゲンカが始まっちゃうし、口の悪さじゃルルーに勝てそうもないので、やめておこっと。
ボクは、またおサカナのソテーを見た。さすがに港町だけあって、おサカナ料理はホッペタが落ちちゃうほどオイシイね。
片目のドレイクお兄さんが貸してくれた機械の船は、予定どおりに北の港町に着いた。予定どおりでなかったのは、それに乗ってたボクたち。
ルルーが期限切れの召喚魔法を使ったせいでやってきた、おっきなおっきな〝すけとうだら〟を、もとの魔界に帰してあげるために魔導力を使い果たしちゃって、船が着いたというの

に、ボクたちは完全に気を失ったままだった。

で、なかなか船から降りてこないボクらを、不思議に思ったほかの船乗りさんたちが介抱してくれて、いまは宿のおばさんが作ってくれたお料理をおいしくいただいてるってワケ。まわりでは、介抱してくれた船乗りさんたちや、宿のおばさんがニコニコと優しい目でボクらを見つめてる。

……ちょっと、キンチョーしちゃうね。

「あ〜、おいしかった！」

「ごちそうさまですわ」

「ぐー！」

「ぶもー！」

ほどなくしてご飯を食べ終えたボクらは、ナイフとフォークを置いて、ハンカチで口を軽くふいた。

カーバンクルがテーブルの上に乗って、ぴょこんとおじぎをする。と同時に、どこからともなくBGMが流れてきた。

どんどこどん！

「ぐっぐぐっぐ、ぐーぐっ！」

すっちゃらっか、ちゃんかちゃんか。

「ぐっぐっぐ、ぐっぐっ！」
すっちゃらっか、ちゃんちゃん。
右へ行っては舌をべろ〜ん、左へ行っては宙返り。
音楽にあわせて、軽いステップでカーバンクルが踊る。BGMつきの、ごちそうさま踊りなんて久しぶりだね。それだけ、宿のおばさんのお料理がおいしかったってコト。
「ぐっ！」
BGMが終わると、またおじぎをして、カーバンクルはボクの肩に乗る。
「元気が出たようだね？」
お皿やなんかを片付けながら、おばさんが聞いた。
「うん、とっても！」
おかげで、とっても落ち着きました！
「いや〜、それにしても……」
イチバン年をとった船乗りさんのひとりが、ぷかぁ〜っとキセルをふかしながらつぶやく。まわりの船乗りさんやドレイクお兄さんたちとは年季が違う、ってカンジ。
「ドレイクの船がいきなり来たときゃ、ビックリしたよ。しかも、女の子が気絶したまま乗ってるときた日にゃあ、おりゃどうしようかと思ったぜ」
うんうん、とまわりのお兄さんもうなずく。

「よくもまぁ、魔物が出てすったもんだしてる中を、女の子だけで渡ろうとしたもんだぜ」
キセルのおじさんはチラッとミノタウロスを見て、
「まぁ、ガタイのいいのもいるがなぁ」
ご飯の前に、ボクらはおじさんたちにアレコレ説明した。でもやっぱりこういうセリフが出てくるところをみると、そのときのショックは並大抵のことじゃなかったんだろうね。……まあ、わかる気がする。誰も手が出せなかったモンスターを、ボクたちみたいなのが追っ払っちゃった、なぁんてわかったら、ボクだって驚いちゃうもん。
「でもよ、あの魔物を倒しちまうなんてスゲェよなぁ」
船乗りさんのひとりがいった。魔物というのは、もちろん〝すけとうだら〟のコト。
いやべつに、倒したワケじゃあないんですケド。
と、話そうとおもったら……、
「それほどでもありませんわ」
オホホホホ、といきなり、ルルーがタカビーに口をはさんだ。実は、ルルーが間違ってその魔物を召喚しちゃったコトまでは話してないので、みんなはボクらがすけとうだらを倒したと思ってる。だから、ボクらはいま、ちょっとした英雄あつかいだ。
それはそれで気分はいいんだけど、やっぱりなんとなく気がひけるなぁ……。
「なあ、お嬢ちゃんたちよ……」

急に、おじさんは真面目な顔になってキセルの煙をはいた。
「どうしても、船乗りにゃあなってくんねぇのかい？」
出た。
これで何回目だろう、このセリフ。
特におじさんは、ボクらのことを腕のいい魔導師だと思い込んじゃってるから、なんとか船乗りにしようと必死だ。ボクらがいれば、とてつもない大物や、またすけとうだらみたいな魔物が出てきても大丈夫！　ってワケ。
「で、でも……」
「このコたちにゃあ、行かなきゃなんないトコがあんだよ。いつまでもウジウジしなさんな」
宿のおばさんが、ボクの言葉を引き継いだ。
「だいたい、女の子を船乗りにしようなんて、ボケの始まりだよ」
「なんだとぉ！」
「なによ！」
思わずムッとして、おじさんは怒鳴った。その瞬間、壮絶なニラミあいが始まる。
おじさんの「船乗りになれ」っていうセリフと同じくらい、ふたりはこういうふうにニラミあってる。……というより、もっともっと多い。ふたりはいっつもケンカしてて、そのたんびに別の船乗りさんが、

「まあまあ、おやっさんも、あねさんも、お客人の前ですぜ。夫婦してみっともねぇですよ」
って止めに入る。
「てやんでぇ、ちきしょうめ！」
そういいながらおじさんは、いつものケンカの後みたいにプイッとキセルをくわえたままそっぽを向いた。
「ケンカするほど仲がいい、とはいうケドねぇ」
また別の船乗りさんがつぶやく。
あり？　どっかで聞いたような……。
そういえば、ルシファー先生が同じコトをいってなかったっけ？　ボクとルルーに。うんうん、なんだかわかる気がする。ボクとルルーも一緒かもしれない。なんだかんだいいながら、結局はまたこうして一緒に旅してるんだもの。きっと、おじさんもおばさんも、ずっとああやって暮らしてきたんだろうね。
ひとりじゃできないコトはたくさんある、ってルシファー先生も授業で話してた。
ま、単なるくされ縁かもしれないケド……。
「さてと、もうそろそろ行かなきゃ」
ボクはイスから立ち上がって、身支度を整え始めた。おばさんたちの親切に、充分応(こた)えることができないケド、いつまでもグズグズしてるワケにもいかない。

「そうね」
ルルーたちも同じく立ち上がる。
「おや、もう行っちまうのかい？　もっとゆっくりしていけばいいのに」
おばさんが、心から残念そうな顔をした。
「でも、ボクたちはホントに急がなきゃいけないんです。まだ日も高いし、進めるだけ進んどかなきゃ」
「お世話になりましたわ」
「そうかい、それなら無理にゃあ止めないよ。これを持ってお行き」
そういいながらおばさんがエプロンのポケットから取りだしたものは、ゲンコツくらいの大きさもある、ショウガがひとつ。
「これは……？」
「シュテルン博士のトコにいくなら、どうしても〝紫の森〟を通らなきゃなんないからね。きっと、なんかの役に立つはずだよ」
〝紫の森〟というのは、この港町からしばらく北に行ったところにある。おばさんのいった通り、博士のところに行くには、どうしてもそこを通らなきゃいけない。
これがいったい、なんの役にたつんだろう？
も、もしかして、吸血鬼（ヴァンパイア）が出るとか……！

……あ、それならニンニクか。

「ま、単なる気休めだと思ってさ」

いつまでもショウガを見つめるボクの背中を、おばさんはポンと叩く。

「うん！　ありがとう、おばさん」

ボクは、ショウガを受け取ってリュックの中に入れた。

「たまには遊びにおいでよ」

「ぜひ、そうさせていただきますわ」

ルルーが深々とおじぎをする。この品のよさというか、礼儀の正しさは、ボクにはなかなか真似できない。さすがお嬢様！　ってところだね。

「残念だなぁ……」

またおじさんがつぶやく。

「あんた、まだいってんのかい？」

「ンだとぉ？」

「たはは……」

おじさんとおばさんのケンカを尻目に、ボクとルルーたちは宿を出て街道を歩き始める。

「じゃあな～～っ！」

「また来いよぉ～～っ！」

船乗りのお兄さんや宿のおばさんは、にこやかに――おじさんだけは名残惜しそうに――ボクたちをいつまでも見送ってくれた……。

二　鬱蒼(うっそう)とした〝紫の森〟

……「うっそぉ！」なその正体！

街道は、もはやすっかり秋の色。

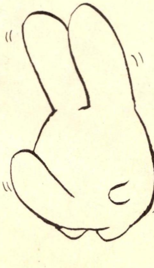
扇子みたいなイチョウの葉っぱが、黄色い絨毯(じゅうたん)みたいに街道を覆ってて、遠くに見える山々は、夕焼けみたいに真っ赤。ずぅ～っと北のほうの山なんかには、もう白いものがある。

……といっても、白髪じゃないよ。

「早いものねぇ、ついこないだまで海で泳いでたのに」

ルルーがひとりごちた。

確かに、あっという間に一年の半分以上が過ぎちゃった。ボクらは北に向かってるわけだから、秋が来るのはいつもより早いのは当然といえば当然なんだけど、こんなペースで、ちゃんと課題をこなして帰れるのかなぁ……。



ないもんね。
いまそんなコトを考えるのはヤメ。とにもかくにも博士のところに行かなきゃ、お話になら
ボクは、ぷるぷると軽く頭を振った。
「いやいやいや……」

カァ〜、カァ〜……。
ふと、カラスがボクらの頭の上を飛んで行った。もはや夕方も近い。カラスが鳴くからか
〜えろ、というワケには行かないケド、そろそろ寝る場所を探さなきゃ。
「秋といえば……」
山や街道を真っ赤に染める夕日を見ながら、はぁ〜、とルルーがため息をついた。
「人恋しい季節よねぇ〜……」
なんだか、イヤな予感がしてきたぞ。
ルルーは、右手をホッペタにあてて、はぁ〜っ、とまたため息をついた。
「あのお方は、いったいどうしていらっしゃるのかしら……?」
出た!
ルルーのおセンチな自己陶酔。そろそろ来るかなぁ〜、とは思ってたケド……。もちろん、
あのお方っていうのはサタンのことね。
「あ〜あ、今日はここで野宿かぁ……」

「ぶもー」

ボクがつぶやくと、ミノタウロスは「もう慣れた」というふうに肩をすくめた。きっと、ボクと知り合う前から「サタン様ぁ〜★」とかいって自己陶酔してるんだろう。ミノちゃんもタイヘンだよね。

でも最近、ルルーの自己陶酔モードは、もとに戻るのが早くなってきた。シュテルン博士に会えば、魔法が使えるようになるかもしれない！　と思ってるからじゃないかな？　そうすれば、サタンに気に入られるような魔導師になるのも夢じゃないもんね。

ルルーが自分でもとに戻るまで、ボクらはなんにもできないのは変わらないんだけど……。

そんなルルーはというと、沈みかけの夕日を、ぎゅっと手を握りしめて見つめてる。

「愛しのサタン様、お待ちになっててください！　あたくしはきっと……、きっと、アルルなんかより強い魔導師となって、あなた様をとりこにしてみせますわ！」

「…………」

ボクより強くって……。そういうのって、あんまり本人の前でいうようなコトじゃないと思うんですケド……。

まあ、とにもかくにも、ボクらは街道の脇で火を熾して、そこに野宿することになった。もう〝紫の森〟——でも、別に紫色をしてるワケじゃなくて、普通の森だけど——が目の前に広がってるんだけど、その中で寝るよりは、まあ安全だね。

火を熾して、晩ゴハンの準備を始める頃には、もうお月サマが顔を出してて、ルルーももとのタカビー状態に戻った。彼女は野宿がイヤだのなんだのと文句をいったケド、まあ、いつものコト。ぜんぜん気にしない。

「で、今日のゴハンはなんなの？」

野宿さわぎのあとの、いつものブスッとした顔で、ルルーが聞いた。……そんな顔をいつもしてると、ホントにブスになっちゃうよ、といおうとしたケドやめた。触らぬルルーに祟りなしだね。

「じゃ――ん！」

といいながらボクは、途中の村で買っておいたサツマイモやナスをリュックから取りだした。

「秋といえば、やっぱりこれでしょう。デザートにカキもあるよ」

しかも、わざわざ大きなヤツを選んで、い～っぱい買ってきたのだ。……でも、ほとんどはカーバンクルに食べられちゃうんだけど。

「ま、あなたにしては上出来の選択ね」

と憎まれ口をたたきながらも、ルルーの眼はじっとおイモやおナスに集中してる。

「食べてあげるから、早く焼いて」

これが本音だね。

パチパチと火の粉が躍るたき火の中にサツマイモを入れて、しばらくすると、ぷぅ～んとい

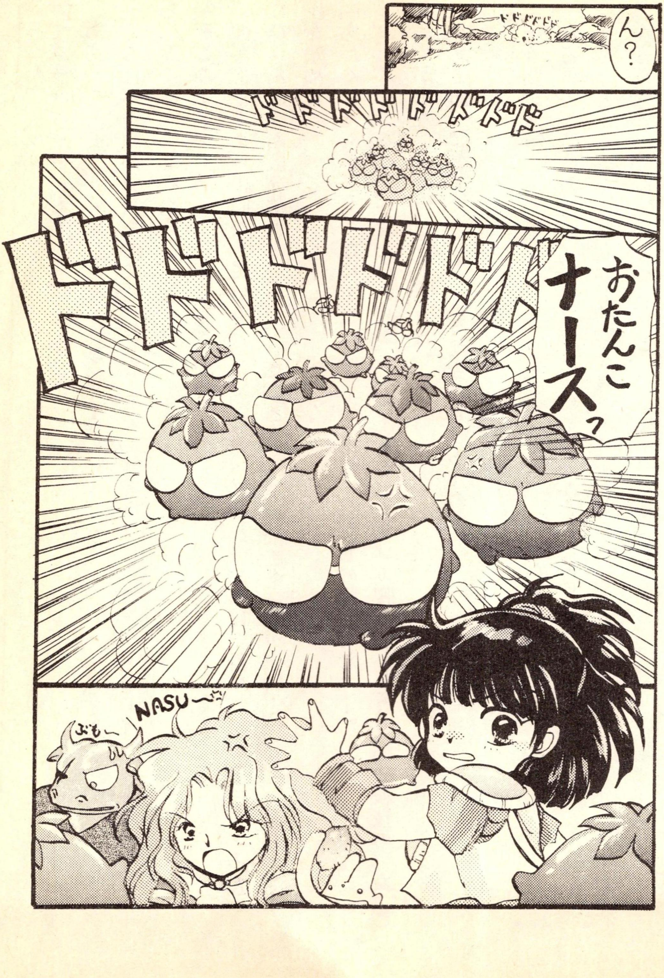
い匂いが辺りを包み込んだ。棒に刺して火の横に立てた、おナスの焼ける匂いもする。
「どれどれ……」
ぼくは、棒でつついて火の中からおイモを取りだした。
「あちちち……」
とお手玉する。焼きイモとくれば、まずやっぱりコレでしょう。
パカッと割ると、ほわぁ～んと甘い湯気が中から飛びだした。うん、よく焼けてるね。
ひょいとつまんで、口の中に放り込んでみる。
「ほふほふほふ……」
最初は熱いけど、だんだんおイモのあまぁ～い味がじんわりと口の中に広がって……。
「う～ん、でりぃしゃす！」
「ぐー！　ぐー！」
ボクの服を引っ張って、カーバンクルがくれくれとせがむ。
「はいはい、熱いから気をつけてね」
半分に割ったおイモのかたっぽを渡すと、カーバンクルはべろぉ～んと舌を長く伸ばしておイモをつかみ、そのまま口の中に入れちゃう。
「ぐー！」
オイシイ！　っていってるみたい。

……のはいいんだけど、ホッカホカの焼きたてなんですケド、それ。カーバンクルって、熱いとかなんとかかって感じないのかなぁ？……なんとなくうらやましいな。
「アルル、おイモは焼けた？」
「あ、うん」
「おナスもいけるわよ」
もう、ルルーとミノタウロスはおナスをつついていた。港町のおばさんにもらったショウガを、ナイフで細かくきざんでおろしショウガみたいにして、それをつけて食べてる。
ホントは〝紫の森〟で役に立つ、っていわれてもらったんだケド、もう役に立ってる。まさか、おばさんはコレを見越してたとは思えないんだケド、……ま、いいか。
「おしょうゆが欲しいところねぇ」
ルルーは焼きナスを頰張(ほおば)りながらいった。
「そんなの持ってきてないよ」
「あら、ダメねぇ、アルルって」
「…………」
そんなコトいわれたって、長旅におしょうゆを持ってきてる人なんて、普通はいないよねぇ。
まったく、ワガママなんだから。
ドドドドドドドドドドドドド……！

「な、なに？」
ボクも焼きナスを食べようと、手を伸ばした瞬間、遠くのほうから地響きが聞こえてきた。
ドドドドドドドドドドドドドドド……！
「なにかしら……？」
ルルーも食べるのをやめて、辺りを見回す。
地響きは、だんだん近付いてくる。よく聞いてみると、〝紫の森〟のほうからだ。だけど、暗くてその正体がなんなのか、まったくわからない。
けっこうすぐそばまで来てるような気がするんだけど……。
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！

「こらぁ〜〜〜〜っ！」

呆然(ぼうぜん)と地響きのするほうを見ていると、いきなり！　真っ黒な津波のようなものがボクらを包み込んだ。
「わぁ〜〜〜〜〜っ！」
それは、何十匹、何百匹ものナスグレイブ！……まん丸のおナスに、メガネとカーバンクルみたいな手足をつけたモンスターだ。
ナスグレイブたちは一斉にボクやルルーたちを取り囲んで、せっかく焼いたおナスをふんず


ん？
ドドドドドド
ドドドドドドドド
ドドドドドドド
おたんこナースっ
NASU〜
ぶも〜

けてグチャグチャにしちゃう。
ああっ！　せっかくおいしそうに焼けてたのにぃ！
そんなボクらの気持ちをよそに、ナスをぐちゃぐちゃにしてるナスグレイブたちのあいだから、リーダーらしいひとりが出てきた。
「そこのオタンコナス！　〝紫の森〟で焼きナスを食べようとは、いい度胸だナス！」
彼がそうボクらに向かっていうと、ほかのナスグレイブたちは一斉に、ポップコーンみたいにぴょんぴょん飛び跳ねながら、「いうことナ〜ス！」「オタンコナ〜ス！」とシュプレヒコールを始めた。
「あたくしたちがドコでなにを食べようと、あたくしたちの勝手でしょ！」
おナスをふみつけられた腹いせか、ルルーももはやケンカ腰だ。いきなり超必殺技の〝女王乱舞〟が出ないだけマシかもしれない。
「まあまあ、〝紫の森〟って、キミたちのおうちなの？」
いきりたつルルーをなだめながら、ボクはいった。
「そうだナス」
なるほど、紫色のナスグレイブがいっぱいいるから、〝紫の森〟ってワケね。
「そんなところでキミたちのお仲間を食べちゃったのはゴメンなさい。だけど、ボクたちはそれを知らなかったの」

「仲間ぁ？」

不機嫌もあらわに、ナスグレイブたちはボクを睨んだ。……そういうかたちにメガネが曲がった、っていうのが正しいケド。

「失礼にもほどがあるんだナス！　我々は、ナスが死ぬほどキライなんだナス！　焼きナスの匂いがするだけで、ムシズが走るんだナス！」

そうだそうだというように、「いうことナ〜ス！」「オタンコナ〜ス！」とまわりから声があがる。声だけじゃなくて、身体もぴょ〜んぴょ〜んと飛び上がってる。

ナスグレイブのリーダーは、ビシィッ！　とボクらを指――正確には手――差した。

「よって、罰としてお前たちがここで焼きナスになるんだナス！」

「え〜〜っ！」

「それじゃ、単なるいいがかりじゃないの！」

ルルーはもうキレる寸前だ。

ボクも、なんだかムカムカしてきたぞ。自分たちがキライだから、おナスを食べちゃダメなんて、タダのワガママじゃない。ルルーよりひどいよぉ！

ナスグレイブの群れとボクたちは、いまにも爆発しそうなニラミあいをしばらく続けた。そのあいだに、カーバンクルはおイモを食べつくして、ぐうぐうと眠っちゃってる。

……ナスグレイブのワガママもなんとかしなきゃいけないケド、このコのお気楽もどうにか

なんないかなぁ。
　どれくらい時間がたったかわからない。
　ふと、睨み合うボクたちの頭上で、舌ったらずな声がした。
「待ってくだちゃい！」
　見ると、木の上に小さな人影が立っている。月明かりに照らされたその姿は、いわゆる忍者装束に身を包んだ、ボクより頭ひとつぶんくらい背の低い少年……。
　ボクもルルーも見覚えがある。
「ムラサメくん！」
　魔導学校でのクラスメイトだ。ニンジャとしての修業のために、魔導学校に入ったっていう変わり種。マスクをしてて顔はよくわからないケド、眼がクリクリしててかわいい。
「お久しぶりでちゅ、アルルちゃん、ルルーちゃん」
「なんでキミがこんなところに……？」
「おお、同志よ！」
　いきなり、ナスグレイブのリーダーが口をはさんだ。
「へ？　ど、同志って……？」
　そんなボクの疑問をよそに、リーダーは続ける。
「この者どもは、同志の知り合いだナスか？」

「うん」
シュタッ、と木からボクらの前に飛び降りながら、ムラサメくんは答えた。
「ムラサメくん、同志ってなんなの？」
「実は、ボクもナスがキライなんでちゅ。それを克服するのが課題だったんでちゅが、なんとなくみんなとお友達になっちゃったんでちゅ」
「ふぅ〜ん」
出し抜けにムラサメくんは、くるりとリーダーを向いて、
「アルルちゃんも、ルルーちゃんも、悪気はなかったんでちゅ。許ちてあげてくだちゃい」
「う〜む……。そうしたいのはヤマヤマなんだナスが、〝森のそばで焼きナス食い〟の罪は非常に重いんだナス。これも掟（おきて）なんだナス」
なんか、「そのまんまやないか！」ってツッコミたくなりそうな罪だね。
「キ―――――ッ！　いいかげんにしなさ〜〜いっ！」
いままで黙ってたルルーが、リーダーの一言でいきなりキレた。
「あたくしのおナスはどうしてくれんのよ！」
手にしたショウガを振り回しながら、ルルーは叫んだ。
ホントホント。せっかくおいしそうに焼けてたのに、結局ボクは一口も食べられなかった。
こうなったら、ボクもルルーと一緒にキレちゃおうかなぁ〜……。

と思ったけどやめた。ふたりでキレたらおさまりがつかなくなっちゃうもんね。心の中でルルーを応援するだけにしとこ。

「こうなったら、あんたたちを食べちゃうわよ！」

「げげ――――っ！」

ルルーが、言葉と一緒につきだしたショウガを見て、ナスグレイブたちは一斉に飛び上がった。さっきのシュプレヒコールより、ずっとずっと高いジャンプだ。

そして……、

「おろしショウガだけはやめてくれぇ～っ！」

「食べないでくれだナスぅ～っ！」

「焼きナスを食わせないでくれだナスぅ～！」

「いうことナ～スっ！」

と叫びながら、まさに蜘蛛（くも）の子を散らすように、わらわらと逃げてった。

「あらら……」

「行っちゃったでちゅ」

あとに残ったボクと、ルルーと、ミノタウロスと、ムラサメくんは、呆然（ぼうぜん）と見送るだけ。

「そうか！」

ボクはふと思い立って、ポンと手をうった。

「もしかして、ショウガってナスグレイブよけなんじゃない？　ムラサメくんみたいにナスがキライだったらいいんだけど、普通、そんな人っていないもんね」
「ナスは、人間の食べ物じゃないでちゅ！」
半分ムッとしながら、ムラサメくんはいった。
「うっさいわね！　そんなコトいってると、ナスと一緒に漬け物にするわよ！」
「う……」
ルルーに睨(にら)まれて、ムラサメくんは絶句。キライなおナスと一緒に漬けられちゃうぞっていわれちゃぁねぇ。
結局のところ、彼もまだ課題をクリアするところまではいってないみたい。それ以前に、ルルーの怒った顔でにらまれたら、誰だって絶句しちゃうよ。ヘビににらまれたカエル状態、ってヤツ？
「まあまあ」
ふたりをなんとか落ち着かせて、ムラサメくんから話を聞くと、〝紫の森〟で修業を続けてるおかげで、森の中がどうなっているか完全にわかってるとのこと。そのあたりは、さすがニンジャだね。
というワケで、罰として——とはルルーの意見——ムラサメくんに案内してもらって、森を抜けることにした。お守りのショウガもあるしね。

三　森の中で、またひと騒動！

……どうしてシェゾが……？

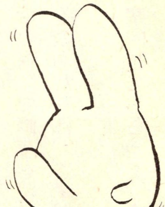
翌日、お日サマが完全に顔を出す頃には、ボクらはすでに森の中に入っていた。

〝紫の森〟は、紅葉しない木々で鬱蒼（うっそう）としていて、ところどころに紫色の正体、つまりナスグレイブが顔を出してる。ぴょんぴょん飛び跳ねながら歩いてるナスグレイブもいるね。でもボクらにはナスグレイブの同志だというムラサメくんもいるし、宿のおばさんにもらったショウガもある。

おかげでナスグレイブはボクらに近付いてこない。

森は深くもなく、浅くもなくといったところだけど、やっぱり地図なしで入ったら迷っちゃうほどには複雑だ。ずっと前に、旅の商人さんに簡単な地図を書いてもらったケド、それだけじゃちょっと心許（こころもと）ないなぁって考えてたトコだから、そこへきてムラサメくんの存在は、かなりありがたいね。感謝感謝！

「もう少しでちゅ……！」

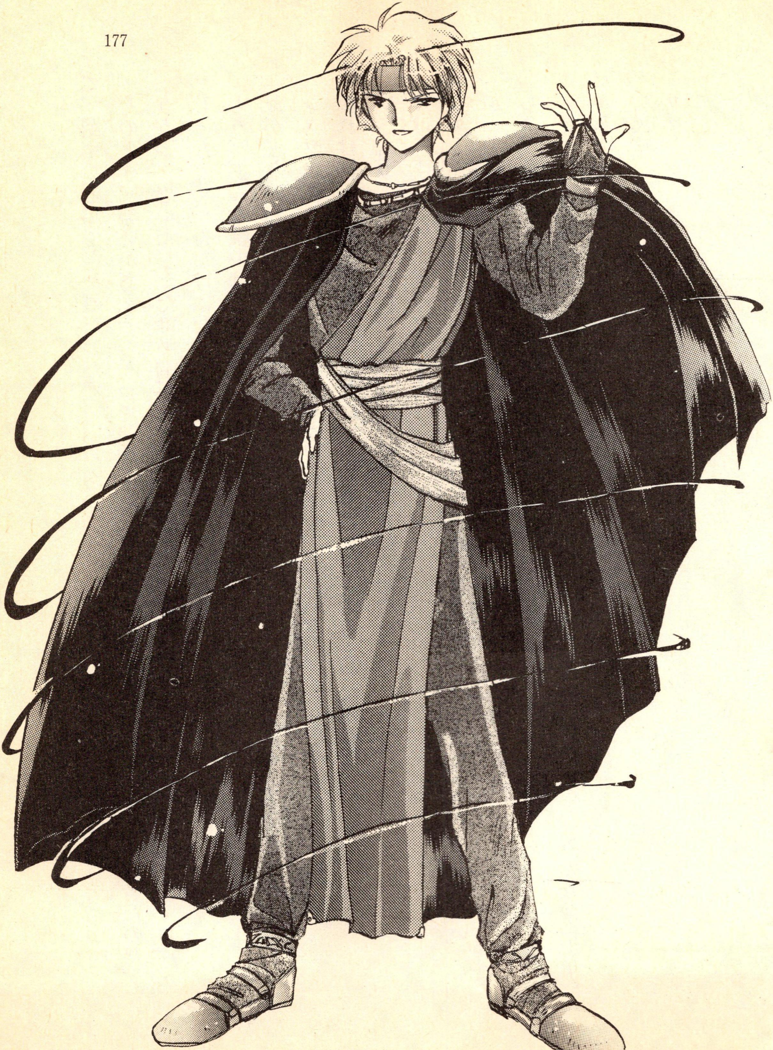


といったムラサメくんの足が、ピタリと止まった。
「どうしたの？」
「……人の気配がするでちゅ」
ムラサメくんの声は、いつになくマジメだ。……でも、舌ったらずな声はあいかわらず。それが、みょ〜に似合ってなくて、思わずプッと吹きだしそうになっちゃう。でもでも、ここは笑っちゃいけないシーンだ。
「どこどこ？」
ボクとルルーは辺りを見回した。だけど、気配なんかゼンゼン感じない。そのあたりは、さすがニンジャってところね。
「誰でちゅか！　出てきなちゃい！」
ムラサメくんがまわりを見回しながら叫ぶと、鼻にかかった笑い声があたりにこだまする。
「フッフッフ……。バレちゃぁしょうがないな……」

ブォンッ！

つむじ風とともに、ボクらの目の前に人影が現われた。
邪悪に光る切れ長の眼に、銀色の髪、黒を基調にした服とマント、そして、これまた邪悪そうな装飾が施された魔導師用の杖……。

「誰なのよ、あんた」
ルルーが問いかけるけど、ボクには見覚えがある。
出てきた人影が誰だかわかった瞬間に、ボクの身体は硬直した。怒ったルルーよりコワイ。
心の底から、まさにヘビににらまれたカエル状態……！
「シ、シェゾ……。ど、どうしてここに……？」
それだけいうのが精一杯。
だ、だって、ボクと戦って死んじゃったはずなんだもの！
「知ってるの？　アルル」
「う、うん……」
ルルーに返事をしたつもりだけど、ちゃんと声になってるかどうかもわかんない。
「まあ、驚くのも無理はないな。確かに、オレは一度死んだのだから」
そいつ、シェゾは余裕たっぷりにそういった。足があるから、少なくとも幽霊じゃない。
……って、冗談を考えてる余裕なんて、こっちにはない。
（考えてる考えてる）
心の中の、もうひとりのボクがタイミングよくツッコミをいれた。
シェゾ・ウィグィィは、早い話が〝悪の魔導師〟。以前、ボクの魔導力を吸収しようとして襲ってきたことがある。迷宮にとじ込められたりとかして大変だったケド、なんとか彼と戦っ



て、倒すことができたのだった。

そのとき、勢いがあまっちゃって、なんと、彼の首と身体が真っ二つになっちゃったのだ。

ううっ、思いだしただけで胸がムカムカする……。だって、単に首が飛んで死んじゃったワケじゃなくて、首だけになっても襲ってくるんだもの。

もう、あんな戦いはしたくないよぉ……。

「だがどういわけか、オレは復活した……」

シェゾは話を続ける。ボクのイヤな思い出を、わざわざ引っ張り出すかのように。

「これは神か悪魔の意思に相違ない。お前の力を吸収するまでは死ぬな、とな！」

いきなり、シェゾは杖を高くかかげて呪文を唱え始めた。

げげっ！　こ、これはヤバイ！

「なぁ〜んだ、目標はアルルだけなのね。じゃあ、骨は拾ったげるから、がんばんなさい」

ルルーはそういって、スタスタと後ろにさがり、切り株に腰をおろした。

「ちょ、ちょっとぉ！」

ムラサメくんは……、と見回しても、もうすでに彼の姿はない。……もう、みんな薄情なんだからぁ！　カーバンクルはミノタウロスの頭の上で眠っちゃってるし……。

「いくぞ、アレイヤード！」

カッ！

気合いとともに、シェゾの杖から稲妻が飛びだし、ボクに向かって飛んでくる！　魔導学校の先生も知らない、古代呪文だ。
「きゃあっ！」
ボクは、寸前でそれをよけた。
前に戦ったとき、さんざん見たので、よけるのはそれほど難しくない。すぐに呪文でお返しする余裕だってある。
ボクだって、シェゾが死んでるあいだに成長したんだから！
「このぉ、アイスストーム！」
ボクの手から発した吹雪が、シェゾを包み込む。
パキ――――ン！
だけど、杖のひとふりで、吹雪は弾き飛ばされちゃった。もちろん、彼が傷ついたようすなんてゼンゼンない。
「どうした、お前の力はこんなものだったのか？」
「う〜っ……」
ちょっと悔しい。
だけど、ファイヤーやアイスストームみたいな、それほど難しくない呪文を弾き飛ばしちゃうモンスターなんて珍しくはない。へへ〜ん、最初は小手調べだもんね。

なくて、こうするためだったワケね。感謝感謝！

カキ────ン！

だけど、シェゾは杖を使って、ボクのアイスストームを弾いたときみたいに、余裕でムラサメくんのカタナを受け止めた。ボクのほうを向いたままで。

ううっ、やだなぁ……。

「うるさいハエだな」

そうつぶやくと、シェゾはカタナを受け止めた体勢のまま、呪文(じゅもん)を唱え始めた。

さっきのアレイヤードよりも、ずっとずっと長い、あの呪文は……！

「ムラサメくん、あぶないっ！」

と叫んだときには、もう遅かった。

「アレイヤード・スペシャル！」

ドッゴ────ンッ！

「うわあああああっ！」

杖(つえ)から発した猛烈な光の玉が、ムラサメくんを包み込んで吹き飛ばす。
「ムラサメくん！」
どさっ。
ボロぞうきんのようになったムラサメくんが、ボクとルルーとのあいだに落っこちた。ピクリともしないケド、死んじゃったワケじゃあないみたい。
……だけど！　わざわざ最強の呪文を使わなくたって……！
「ふん、邪魔をするからだ」
シェゾの目は、まさに悪魔そのもの。前に会ったときより、ずっとずっとキョーアクになってる。
「こ、このぉっ！」
もう許さないぞ！
ボクは、たくさんのぷよぷよをやっつけたときみたいに、これでもかというくらいのダイアキュートを唱えた。
「ダダダダダダダダダ——かなり中略——ダダダダダダダイヤキュート！」
魔導力が、はち切れんばかりに身体(からだ)中をかけめぐる！
それを、呪文に乗っけて解き放つっ！
「ファイヤーっ！」

ドッゴ――――――ンッ！

猛烈な土煙をあげて、ボクの発した火の玉がシェゾを包み込んだ！

「や、やった！」

……と思ったのも束の間。

土煙が晴れても、そこには余裕シャクシャクの表情をしたシェゾが立っていた！　ケガしたようすなんて、これっぽっちもない。

「かゆいなぁ……。どうした、もう終わりか？」

ニヤリ、と悪魔のような顔をしてシェゾは笑った。恐（こわ）さでいったら、サタンよりシェゾのほうが上かもしれない。

「ううっ……」

これって、思いっきりマズイ状況じゃない？　ボクの超必殺技が効かないなんて……！　いつの間に、シェゾはこんなに強くなったワケぇ？

逃げよう！……と思っても、素直に逃がしてくれそうにないし。

「そろそろ、終わりにさせてもらうか……」

シェゾがまた杖（つえ）をかかげる。……だけど、ボクにはなすすべがない。

「！」

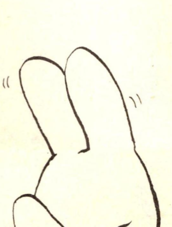
ふと、ボクの左手にナニかが触れた。

見ると、ルルーがボクの手を握っている。
「アルル、〝ジュゲム〟よ！」
「え〜っ！　そんな魔導力なんか残ってないよぉ！」
ジュゲムっていう呪文(じゅもん)は、ファイヤーやアイスストームより強力だけど、それだけたくさんの魔導力が必要。だけど、さっきダイアキュートを唱えすぎたおかげで、そんな力なんか、ちょっとも残ってない。
「いいから唱えなさい！　ムラサメくんのかたきよ！」
「そ、そうだ！　よぉ〜し……！」
呪文を唱え始めると同時に、ルルーは気合いを入れ始めた。その〝気〟がボクの左手を伝わって、身体(からだ)中に流れ込んでくる。すけとうだらを魔界に帰したときと、逆のパターンだ。これならなんとかなりそう……！
だけど、ルルーのほうからこんなコトをしてくるなんて……。いやいや、いまは呪文に専念しなくちゃ！
「アレイヤード・スペシャル！」
「ジュゲム！」
ドッカア――――――ンッ！

ふたつの呪文は、ボクたちとシェゾとのあいだでぶつかりあい、大爆発を起こした。
「きゃあああああっ！」
「うおおおおおっ！」
そのあまりの勢いに、ボクもルルーも、そしてシェゾも吹き飛んでしまった……。

四　戦い終わって

……まだ旅は終わらない



「う、う～ん……」
気がつくと、ボクらはくさむらの上に寝かされていた。おでこには、濡(ぬ)らしたタオルが載せられている。
「こ、ここは……？　あいたたたた……！」
起き上がった瞬間、身体(からだ)中に激痛が走った。
「まだケガが治ってないんだナス。もっと寝てるんだナス」
ナスグレイブのリーダーが、ボクの顔をのぞきこむ。よく見ると、そのまわりではほかのナ

スグレイブたちが、タオルや桶を手にわらわらとルルーやミノタウロス、ムラサメくんたちのあいだを行き交っていた。その中で、ひとりカーバンクルだけがぴょこぴょこと踊ってる。

「どうして……？　ボクたちはキミたちに悪いコトしたんじゃないの？」

それを考えると、ナスグレイブたちがボクらを介抱してくれるなんてコトはないはず。

「あいつ、悪いヤツ。イヤがる我々に、ムリヤリにナスを食わせたんだナス。〝無理やりナス食わせ〟の罪は、極刑に値するんだナス。それをあんたらはやっつけた。だからあんたらの罪は帳消しなんだナス」

「と、というコトは……」

ボクは、痛くならないように、ゆ〜っくりと身体を起こした。それでもやっぱり、痛みの精霊が、ボクの身体をピリピリ刺激するけど。

「シ、シェゾは……？」

「わからん。だがここにはいないんだナス。きっと死んだんだナス」

「は、はぁ……」

ほんの一瞬、頭がこんがらがっちゃって、なんのコトかわからなかったケド、だんだん思いだしてきた。ボクとシェゾが戦ったコト、ムラサメくんが最強呪文でボロボロにされちゃったコト、そうそう、ルルーが自分から〝気〟を送ってくれて、ジュゲムの呪文をパワーアップしてくれたコト……。

「や、やった！」
ボクは、痛みを忘れてガッツポーズをとった。
またも、シェゾをやっつけることができたんだ！
「う、う～ん……」
そうこうしてるうちに、ルルーたちも眼を覚ました。
「ありがとう、ルルー。おかげで、なんとかシェゾを倒したよ」
「と～ぉぜんじゃない、あたくしが協力したんですもの。だけど、あなたのためじゃなくて、ムラサメくんのためにやったコトなのよ、おわかり？」
「えへへ……」
ルルーの口調はあいかわらず。だけど、ボクに協力してくれた、っていうのは変わんない。ホントにムラサメくんの敵討ちだけだったら、そのまんま〝女王乱舞〟かなんかをシェゾにくりだしてたはずだもんね。
結局、ボクたちのケガはたいしたコトはなかった。爆発のショックに吹き飛ばされて、あちこち打ったくらい。ボクらは早々に手当をすませた。
「また学校で会おうでちゅ」
別れ際、〝紫の森〟の出口でムラサメくんはいった。
「ちゃぁんと、ナス嫌いを治してからね★」

ボクはウインクで、それに応(こた)える。
「う……」
絶句するムラサメくんを尻目(しりめ)に、ボクらは旅を再開した。
シュテルン博士の研究所まで、あともうひといき！

＊　＊　＊

暗闇(くらやみ)の中に、気配がふたつ。
砕け散った水晶玉のかけらが、まるで星のようにまたたいていた。もはや、気配の主を照らす力もなく……。
『どういうことだ、これは……！』
語気荒く、気配の一方が口を開いた。
『わからん』
と、占い師の声。
『なにか、特別なファクターが関与しているとしか思えん』
『そんな悠長に構えている場合か！』
ついに一方の声は、机を激しく叩(たた)いて怒鳴った。

『すでに〝大魔王〟は誕生、この現界に向かっているのだぞ！　そうなったら、我々の身とて危険にさらされることになる！』

『確かに、現界が維持できなければ、魔界も成り立たんな……』

占い師の声も、いつになく神妙な色を含んでいる。

『だからあれほど、さっさと原因を究明しろといったのだ！』

『だが、それが特定できなくてはしかたあるまい』

『もういい！　自分が手をくだす！』

『こうなった以上、私は止めはせん。だが、空間の歪みを破壊するようなマネだけはするなよ。そうなったら、我々の身体すら維持できなくなるかもしれん』

『フン！　もうすでに破壊されているかもしれんぞ、そのガラス玉のようにな！』

バサァッ！

とマントをひるがえして、占い師でない声の主は立ち上がった、……ようだ。

『おっと、灯りをつけてもらおう。この前のようにはなりたくはない』

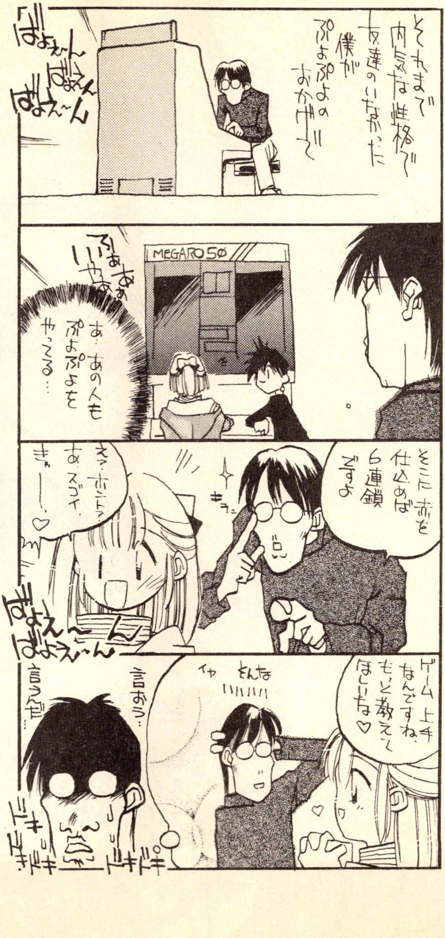
『ふふふ……』

パチンと占い師が指を鳴らすと、部屋中のロウソクすべてに火がともる。

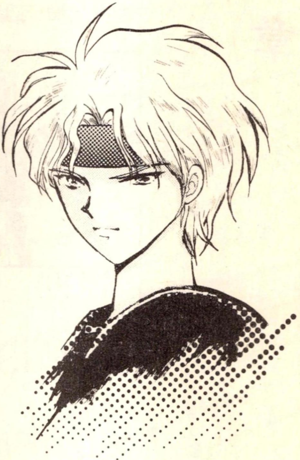
その灯りに照らしだされたのは、占い師であり、医師であり、魔導学校の教師でもあるルシファー、そして、立ち上がって彼に対峙するのは、〝魔界の貴公子〟サタンであった……。

冬の章

独りオチくん



それまで内気な性格で友達のいなかった僕がぷよぷよのおかげで
ばよえ〜ん ばよえ〜ん ばよえ〜ん
MEGARO 5Ø
あ…あの人もぷよぷよをやってる…
そこに赤を仕込めば6連鎖ですよ
キラン
え?ホント? あ…スゴイ きゃー…♡
ばよえ〜ん ばよえ〜ん
ゲーム上手なんですね、もっと教えてほしいな♡
イヤ そんな いいいい
言おう…
言うんだ…
ドキドキ ドキドキ ドキドキ

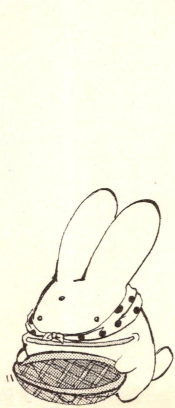


シェゾ・ウィグィィ

強大な力を手に入れるためならどんなことでもする、はーどでコワーイ悪の魔導師。アルルを狙っている。

一　着いたぞ、研究所！

……そこで聞いた、意外なる事実！



ズボッ。

ズボッ。

歩くたんびに、足が深く雪に沈み込んで、うまく歩けない。

「ああん、なんとかならないのぉ？　これぇ……」

とルルーはブーたれるケド、それは神様にでもいってもらわないと、どうしようもない。気を抜いてルルーの相手をしてると、こっちのほうが転んじゃいそうだし。

旅に出たときから、シュテルン博士の研究所が雪山の中にあるのは知ってたケド、こんなに深いとは思わなかった……。まあ、冬なんだから、あたりまえといえばあたりまえだけどね。

スキーかなんか持ってくればよかったかなぁ……？

だけど、今日は晴れてるからまだマシってもの。吹雪だったりしたら、ボクらはもうとっく

に道に迷って、遭難してたかもしれない。

ヒュウウウウウ……。

そんなボクたちのあいだを北風が通り抜け、粉雪が煙みたいに舞った。

「さ、寒い……」

「ぶもー……」

一応、オーバーとかミトンの手袋とか、防寒具はたくさん買ったケド、やっぱり寒いものは寒い。とくにミノタウロスなんか、サイズの合うのが少なくって、雪山用の重装備っていうには程遠い。ボクらより体力があるぶん、まだなんとかなってるケド……。

「ねぇ、アルルぅ、まだなのぉ？」

「ちょっと待って」

ボクは、リュックから地図を取りだした。そして、指でつつぅ～っとボクらの歩いた道を辿ってみる。

「あと、もうちょっとのはずなんだケド……」

地図上では、シュテルン博士の研究所は眼と鼻の先。もう見えてきてもおかしくない。

「まだ歩くのぉ？」

「まあまあ、もう少しだからさ」

とルルーを元気づけるのはいいんだケド、ボクもそろそろガマンの限界……。

「ぐっぐっ、ぐっぐっぐっ、ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ！」

先頭を歩くカーバンクルが、三三七拍子でボクらを応援する。軽いから雪に沈まないし、身体がちっちゃいから毛糸の帽子だけでもポッカポカ。こういうとき、カーバンクルになれたらなぁ〜って思うね。

……なぁ〜んて、余計なことを考えてると、歩く体力がなくなっちゃう。ドンドン進まなくっちゃ！

と、また一歩ふみだそうとした瞬間……！

「ハイッ！」

いきなり、みょ〜な叫び声が雪山に響いた。

「な、なに？」

「ハイヤーッ！」

耳をすましてみると、どうやらボクらの進行方向から聞こえてきてるみたい。

「ォアタ——ッ！」

声に合わせて、どす〜んどす〜んという地響きも聞こえる。

ずぼずぼずぼ、とできるだけ急いでそこに行ってみると、木を鉄で補強した小屋が見えてきた。そして、その脇の木を相手に戦ってる人がひとり……。

「ううっ、この寒いのによくやるわねぇ」

ルルーがそういうのもわかる。なにしろ、その人はカンフー胴着一枚で外にいるんだもの。

つるつるの頭に、ちょっとフケたほりの深い顔だち、筋肉りゅーりゅーの身体……。

真冬だっていうのに、服一枚で外にいるヘンなおじさん——っていうほどのトシじゃないんだけどね——こそ、ボクたちの目的の人だ。

「あれがシュテルン博士だよ」

「え、そうなの？」

一度講義を受けたことがあるっていうのに、ルルーは博士の顔を完全に忘れてた。……まあ、彼女のタイプじゃないからねぇ。

「シュテルン博士——っ！」

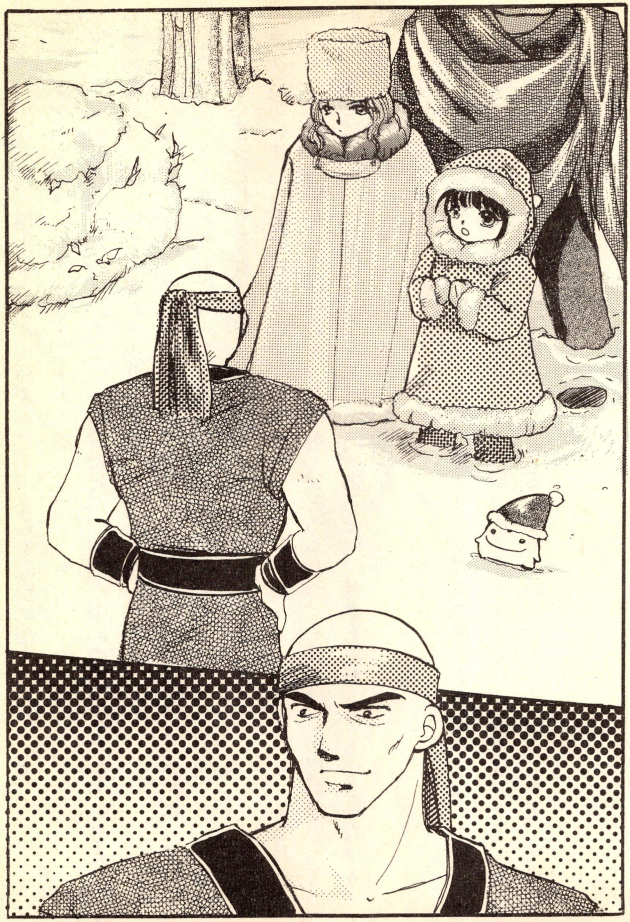
彼の姿を見たとたん、ほんのちょっぴり元気が出た。ボクらは声を張り上げながら、博士のもとへと走った。速さは歩くのとあんまり変わんないケド……。

「おう、来たな！」

博士は、汗をキラキラさせながら、ボクらのほうを向いた。その声は、さっきの掛け声に負けないくらい大きい。広い教室の講義に、これほど向いてる声はないね。

木を相手に、博士は格闘技のトレーニング中だったみたい。さっすがは〝格闘機械魔導師〟って呼ばれてるだけのことはあるね。

「あんまり遅いんで、どうしたかと思ってたところだ」



そういいながら、博士はタオルで汗をふき、ボクらを部屋に招き入れた。
シュンシュンシュンシュン……。
ストーブの上に乗っかっているヤカンの音だけが、部屋の中に響く。ボクたちは冷えた身体を暖めることに精一杯で、おしゃべりをするどころじゃない。
博士は、「さっさと汗を流さないと、カゼをひいてしまう」といって、お風呂に入りにいってしまった。……あとでボクも入らせてもらおうっと。
しばらくじっとしてると、部屋を見回すくらいの余裕が出てきた。
ボクらがいまいる部屋は、ものすごくちっちゃい。テーブルと、ストーブと、あとはヘンなかたちの機械や書類がいっぱい詰まった棚が、ひとつふたつ。それだけしか物がないっていうのに、あとは歩くのに最低は必要なスペースがあるだけ。外から見たときも小さいなぁ～って思ってたケド、中に入ると、もっと小さく感じる。
こんなちっちゃな家に、よく住めるねぇ～。
と始めは思ったケド、その秘密は、玄関のちょうど反対側の扉にあるんじゃないかな？　っていうことがわかった。位置的に考えて、その扉は山の中——土の中——に続いてる。たぶん、山を掘って、そこに広い広い地下室が造ってあるんだろうね。よくわかんないケド、ものすごい機械やなんかがたっくさんあってさ。
ガチャリ。

ようやく完全に身体(からだ)が暖まってきたころ、その地下室への扉から、博士がおぼんにあったかいココアを載せて入ってきた。今度はカンフー胴着じゃなくて、ちゃんとした白衣を着てる。寒いっていうのに、袖(そで)はまくってるケド。
「外は寒かったかい？」
ココアをテーブルに載せながら、そう博士は問いかける。
「ええ、とっても」
ボクらはさっそく、ココアを一口飲んだ。すると、身体の中からじぃ〜んわりと暖まる。
「ふぅ〜……」
ようやく人心地ついた、ってカンジ。
「よく、博士は胴着一枚でいられますわねぇ」
ルルーの問いに、博士はドンと厚い胸を叩(たた)きながら答えた。
「まあ、鍛え方が違うよ。ルルーくん、といったかな？　キミも格闘家のはしくれなら、わかるはずだぞ」
「え？　ど、どうしてあたくしが格闘家だって……」
「〝気〟でわかるよ。けっこう鍛練を積んでいるようだが、まだまだだな」
「は、はぁ……」
なんか、話し方がルシファー先生にそっくり。「まだまだだな」とかいわれたら、相手がど

んな先生でもやり返すルルーが、おとなしいのも、そのヘンにあるかもしれない。ルシファー先生と違うのは、やっぱり声の大きさ。話すたんびに、小屋が揺れそうなくらい。

「で、用件はなにかな？」

そういいながら、シュテルン博士は自分のイスに座る。

「え〜とですね……」

答えようとした瞬間……！

「ストォ————ップ！」

「わっ！」

「きゃっ！」

モノスゴイ博士の声に吹き飛ばされるように、ボクらはイスから転げ落ちた。ホントに、突風みたいな大声だ。

「ど、どうしたんですか？」

立ち上がりながらボクが聞くと、博士はすまなそうに、髪の毛のない頭をポリポリかいた。

「いやははは、すまんすまん。ルシファーから聞いてるから、その先は続けなくていいといおうとしたんだが……。まさかイスから落ちるとは思わんかった」

「もう、ヒドイですわ！」

ルルーもブーたれながらイスに座り直す。
なんだか、ちょっとイジワルな性格までルシファー先生にソックリ。博士を見てると、ルシファー先生が、ものすごく遠くて、ものすごく近くにいるような、変な気持ちになっちゃう。
「ルシファー先生をご存知なんですか？」
ルルーがいった。
「うむ。ヤツとは長いつきあいだからな。よく知ってるもなにもあったものではない」
「へぇ～。じゃあ、ボクがなにを取りに来たかまで知ってるんですね」
「ああ。……だが、少々気にかかるコトがあってなぁ」
ふと、博士は神妙な顔になった。
「と、いいますと？」
「すまんがふたりとも、いままでの旅のコトを、できるだけ詳しく話してくれんか？　なるべくなら、魔導学校に入る前のあたりから」
「は、はあ……」
ボクたちは、いわれた通りにした。……なんだかよくわかんないケド。
ボクは、子供の頃に腰の薬をおばあちゃんに届けようとして〝迷子の森〟を冒険したこと、魔導幼稚園の卒園試験、シェゾとの二回もの戦い、サタンやカーバンクル、ルルーたちとの出会い、魔導学校への旅、そしてここに来るまでのコト……。

ルルーは、サタンと出会うキッカケになった、吸血鬼(ヴァンパイア)の伯爵に誘拐されたこと、ボクたちとの旅、そして召喚魔法のコトなんかを――今度は正直に話した。

「ふ～む……」

それを、黙ってじぃ～っと聞いていたシュテルン博士は、やがて、ポンと手を打った。

「なるほど、それならつじつまがあう」

「どういうコトです？」

「まあ、学校に入ってからの話は〝魔導レーダー〟でモニターしていたのだがな……」

「まどうれーだー、って？」

聞いたコトないアイテムの名前だ。

「ああ、早い話が魔法探知機だ。もっとわかりやすくいうと、占い師がよく持ってる水晶玉があるだろう？　それを機械にしたものだ」

「へぇ～」

「それを使って、キミたちやほかの魔導師たちを観察していたのだ。……よし！　この際だから、いちから話そう」

ゴクリ……。

ボクたちはキンチョーのあまり、つばを飲み込んだ。

いったい、どんな話が飛びだすんだろう……？

「え〜と……」
博士は腕を組んだ。
「なんだったかな？」
ずるっ。
ボクたちはズッコケて、あやうくまたイスから落ちそうになった。
「は、博士ぇ……」
さんざんキンチョーさせておいて、それはないよぉ。
「ああ、思いだした。……最近、現界と魔界を結ぶ空間が歪(ひず)んでいるのは知っているか？」
「空間が不安定になってる、っていうのは知ってます」
ボクは答えた。そのおかげで、ワープやなんかが使えなくて、ここに来るまでにかなりの苦労をしなきゃいけなかったんだ。そういえば、簡単にワープできるアイテム〝どんぱうんぱ〟も使えないのかなぁ……？
「これは、事象的につじつまがあうというだけであって、確証はない、というコトを念頭において聞いてほしい」
「は、はい……」
あらたまってそういわれると、余計にキンチョーしちゃう。
「昨今、魔導師や魔界の生物を悩ませている空間の歪み、この原因に、キミたちふたりが関与

している可能性が非常に高いのだ」

「ええ――――――っ！」

ボクとルルーは、まさしくイスから飛び上がって驚いた。そりゃあ、そんなコトに関わってるなんていきなり聞かされたら、誰だって驚いちゃうよ！

「どどど、どうして……？」

博士は落ち着いたままで話を続ける。そのへんも、ルシファー先生に似てるなぁ。そうやって似たところが多いから、仲がいいのかなぁ？

「うむ、魔法というものは、〝魔〟というくらいだから、魔界と少なからぬ関係を持っているのは知っているだろう？」

「はい」

それくらいは、学校で習う初歩の初歩。たとえば、召喚魔法がいい例だね。

「そして、キミたちには特殊かつ強大な力が眠っている」

「は、はあ……」

そういうふうに、サタンとかルシファー先生とか、シェゾとか、いろんな人からいわれるケド、いまいちピンとこない。だって、意識してそんな力を使ったコトなんてないもん。

「そんなキミたちが本気で魔法を使ったとき、眠れる強大な力を解放させたとき、なんらかの

影響を空間のはざまに及ぼしているのだろう。それが積もり積もって歪みとなった、……これがいま立てた仮説だ」
「はぁ～……」
いきなりそういわれても、ムツカシクてなんだかわかんない。スケールも大きすぎるし……。
博士は立ち上がって、戸棚に向かった。
「まあ、これはあくまでも仮説だから、事実がそうかはわからん」
「そ、そうですわね、おほほほほほ……！」
ルルーの笑いが乾いてる。
よくよく考えてみると、実は証拠もなにもない、タダの仮説なんだけど、みょ～な説得力を感じちゃうのは、どうして？　ルルーもきっと、おんなじコトを考えてんじゃないかな。
「学校へ帰れば、いずれわかるだろう。そのために、キミはこれを取りに来たのだからな」
そういいながら、博士が戸棚から取りだして、ドンとボクの目の前においたのは、真っ黒で奇妙な形をした箱。
フタがなくて、上には手のひらくらいのナニかが差し込めそうな穴があいてる。箱の横からはヒモが伸びていて、先っちょに十字型のがひとつと、丸型のが三つで合計四つのボタンのついたものがくっついていた。
「なんです？　これは……」

「ルシファーによると〝メタドライヴ〟と呼ぶらしい。ヤツの設計図通りに造っただけだから、詳しい使い方はよくわからん。ヤツに聞いてくれ。見たところ、呪文の増幅機のようだが」
「へぇ〜」
さっそくボクはそれを受け取り、リュックにしまった。増幅、……って、いったいなんの呪文を増幅するんだろ?
「それからルルーくん、キミにはこれを授けよう」
とポケットから取りだしたのは、かなり古い巻物。
「これには、格闘家の使ういわゆる〝気合い〟を、魔導師の〝魔導力〟に変換するための極意が書かれている。これを読んで、修業に励むのだ」
博士の言葉を聞いた瞬間、ルルーの眼がパッと輝いた。
「は、はい！　がんばります！」
ルルーは心から嬉しそうな表情。やっぱり博士のところに来たのは間違いじゃなかったみたい。よかったよかった。
博士もニッコリ笑って、バンバンとホコリを落とすように手を叩いた。普通の人なら、パンパンっていう音なんだケド、シュテルン博士は身体が大きくて力強いから、モノスゴイ音になるってワケ。
「よし、これで用件はすんだ。ふたりとも御苦労だったな」

「あ……！」
それを聞いたとたん、ボクはいままであっちにおいといた問題を思いだした。
春に学校を出発して、ここに着いたのが真冬。ってコトは、いまから研究所を出発したら、学校に着くのは来年の秋とか冬になっちゃう。ボクの部屋に、〝どんぱうんぱ〟のどんぱでも置いとけばよかったなぁ……。
「どうした？」
「あのぉ～……」
博士の問いに、ボクはいま抱えてる悩みを素直に打ち明けた。すると博士は、
「なんだ、そんなことか。それなら〝物質転送機〟で送ってあげよう！」
「なんです？　それ……」
「簡単にいえば、ワープを機械的に行なうものだ。まあ、半分は魔導力を使うが、空間の歪み（ひずみ）には影響されないはず」
博士はボクたちを、ホコリと機械の部品と魔法の物品がちらかる地下室に案内してくれて、その〝物質転送機〟なるものを見せてくれた。なんだか、さっきの部屋にあったストーブにそっくり。……大きさが十倍くらいもあるケド。
ストーブでいうなら石炭を補給する場所が、ボクたちの入る場所になってるみたい。
「さ、入った入った」

扉をぎぎぎぃ～っと開けて、博士が手招きする。ボクらはいわれた通りにするしかない。

ガッシャン！

ボクとカーバンクル、そしてルルーとミノタウロスの全員が入ると、博士は外側から扉を重そうに閉めた。そうなると、真っ暗でなにも見えない。

「大丈夫か？」

くぐもった博士の声が、外から聞こえてくる。

「え、ええ、まあ……」

なんだか、すんごく心配……。真っ暗だし、狭そうだし、それよりもなによりも、これからいったい、ナニが起きるのかが……。

「開発したばかりだが、実験は一応すませてある。安心していいよ」

「ええ――っ！」

そ、そんな……！　もし事故が起きたらどうするのぉ？

ボクらのそんな不安を知ってかしらずか、博士はカチカチとスイッチを入れて操作し始めた。

やがて、ブゥ～～ンと機械がうなりはじめる。

「ホ、ホントに大丈夫かなぁ……」

そのキンチョーに拍車をかけるように、博士の声が聞こえてきた。

「あ！」

な、なにが起きたのぉ？

「きゃ――――――っ！」

ボクたちは恐怖のあまり、壁を思いっきり叩いた。

ドンドン！

「博士！　その『あ』ってナニ？　『あ』って！」

ドンドンドン！

……だけど、ビクともしない。

「ああ――っ！」

「は、博士ぇっ！」

もはやパニック状態！　ボ、ボクたち、いったいどうなっちゃうのぉ？

「アルル！　下がってなさい！」

こんな真っ暗で狭いとこで、どうやったら下がれるのかわかんないケド、ボクはルルーのいうとおりにした。

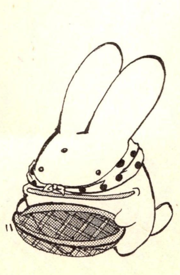
「はあああああああっ！」

気合いを込めてるルルーの声がする。

わかった！　扉を壊すつもりなんだ。
「やあっ！」
と扉に向かってルルーが力いっぱいパンチした——と思う。暗いからよくわかんない——瞬間、ボクたちの意識は出し抜けにプッツリと切れた……。

二　ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

……学校は大パニック！



消えたときと同じように、いきなり意識が戻った、……と思ったら、
ドテッ！
ボクらは落っこちた。
「アイタタタタ……」
そのショックで、おしりをちょっと打ったみたい。まあ、そんなに高いところから落ちたワケじゃないから、大したコトはないんだケド。
「もう、乱暴な博士ねぇ。もう少しなんとかならなかったのかしら、まったく……」

さっそくルルーがぼやく。でもホントは、無事に着いてよかったよかった、って喜ぶ場面なんだとボクは思う。
……ちょっと待って。
と心の中の、もうひとりのボクが待ったをかける。
ボクは急に不安になって、辺りを見回した。
そこには、懐かしい光景が広がってる。確かに魔導学校の正門前！
「よ、よかったぁ……」
ボクは、力が抜けてその場にへたりこみそうになるほど安心した。たとえ魔界とか空間のはざまじゃなくても、ヘンなところに出ちゃったらどうしようかと思ってたもんね。
とにもかくにも、ボクたちはまた学校に帰ってきたんだ！
「どうやら、無事に着いたみたいね」
ルルーも安心してつぶやく。
それにしても、博士の「あ！」って、なんだったんだろ……？
ま、いいか、なんとか学校に戻れたわけだし。
「早くルシファー先生のとこに行こうよ」
「そうね」
ボクらは、ルンルン気分で校門をくぐった。……のはいいんだけど、なにやら校庭のほうが

騒がしい。

がやがやがやがやがやがやがやがやがやがやがやがや……。

どうしたんだろ……？

運動会とかなにやらの季節って、もうとっくに過ぎてるはずなんだケド……。

「…………？」

校舎の隙間（すきま）から、なにやらみょ～な物の影が見え隠れしてる。ちょっとした丘のような、山のような……。

あんなの、校庭にあったっけ？

「なんなのよ、あれ？」

ルルーがいうケド、……そんなの、ボクに聞かれたって困るよぉ。

ボクたちは、かけ足で校庭にまわった。しばらく行くと、校庭にデンと座るそれの姿が見えてくる。

「うわぁ！」

それの、あまりにも大きな大きな姿に、ボクらは思わずかけ足を慌ててストップした。

ななななんと！　校舎と同じくらいの高さもある、〝超びっぐ〟なぷよぷよ！

「な、なんなの……？」

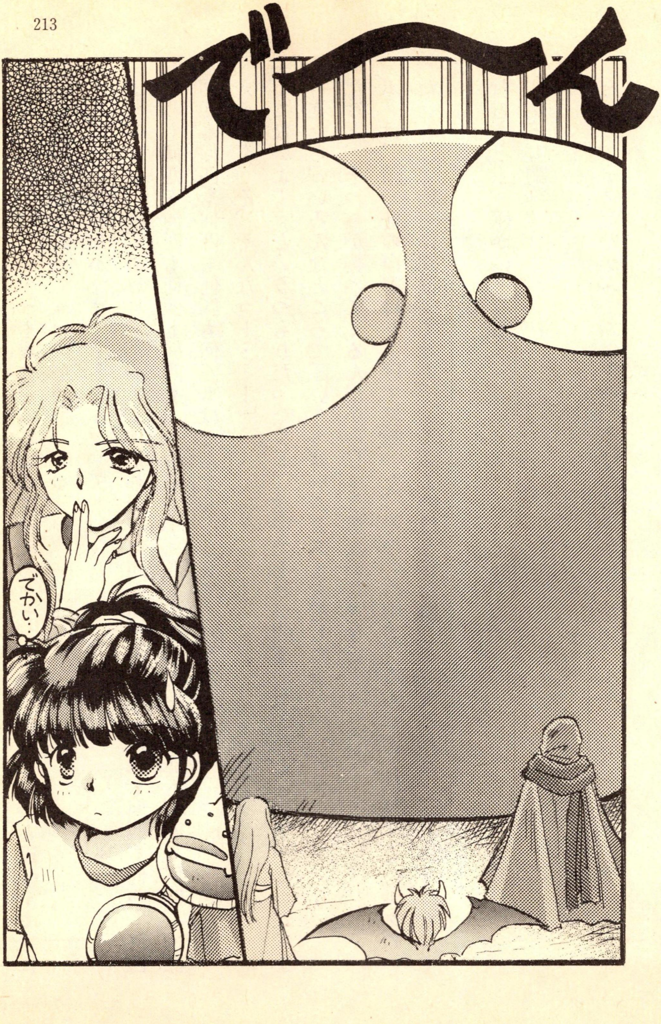
と、口をあんぐりと開けてその場に立ち尽くすボクらに、近付いてくる人影がある。

お懐かしいあの姿は……！
『やあ、帰ってきたな、ふたりとも』
「あ！　せ、先生」
ルシファー先生の声に、ようやっとボクらは我にかえった。
「どど、どうしたんですか？　あああ、あの〝超びっぐぷよ〟は……？」
でもやっぱり、まだ気が動転してる。だだだ、だって、あんなにびっぐなぷよぷよは、授業でも、図鑑でも、実際にも、いままで見たコトないんだもん！
『皆目見当がつかん』
先生は肩をすくめた。さすがのルシファー先生も、お手上げ状態。
『ついさっき、いきなり空から落ちてきたのだ。だがひとつだけ判明しているのは、彼が、アルルくん、キミを呼べといっていることだ』

「え――――――――――っ！」

もう、何回こうやって驚いたかわかんない。
これからは、もう絶対に驚かないぞ！……といっても、やっぱり驚いちゃうんだろうなぁ。
『まあとにかく、呼ばれている以上はしかたあるまい。来たまえ』
「は、はあ……」

なぁ〜んだかイヤな予感がするぞぉ。
シュテルン博士の話したコトが当たってるぞぉ、みたいな……。
「まぁったく、いろんなところで恨み買ってるわねぇ、あなた」
もはや、ルルーの憎まれ口さえも、ほとんど聞こえない。
あらためて近くで見ると、〝超びっぐぷよ〟はやっぱり大きい。ずっと見てると首が疲れちゃいそう。
ルシファー先生が、その〝超びっぐぷよ〟に向かって怒鳴る。
『〝ぷよぷよ大魔王〟よ！　アルルくんとルルーくんのふたりを連れてきたぞ！』
そうか、あの〝超びっぐぷよ〟は、ぷよぷよ大魔王っていうのか……。
「ふむ……」
ギョロン！
とそれだけでも普通のぷよぷよの何十倍もありそうな眼が、いきなりボクらを見下ろした。
「いったい、ボクたちになんの用なの？」
ボクもルシファー先生と同じように、大魔王に向かって怒鳴る。
「我輩は、空間のはざまが生んだ、ぷよぷよ大魔王ぢゃ……」
まるで、地響きみたいな声だ。大きさからいって、当然といえば当然なんだケド。
ぷよぷよ大魔王はやがて、おっきな身体(からだ)をぶるぶる震わせながら話し始めた。ぷよぷよって


でーーん
でかい…

いうモンスターは、いっつも身体をぶるぶるさせてるケド、大魔王のはちょっと違う。まさに、怒りで身体が震えるってカンジだ。

ボク、なんかしたかなぁ……？

「よぉ〜くも、我輩のカワイイぷよぷよたちを、何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も――中略――何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹も何匹もばたんきゅ〜させてくれたなぁ……」

「ええっ！　そ、そんなコト……！」

「してないよ！」というつもりだったケド、途中でそれが間違いだったことに気がついた。よく考えたら、いろんなところで、い〜っぱいぷよぷよを倒してる。

「だけど、そっちが襲ってくるんだからしょうがないじゃない！」

ボクは、精一杯の声をはりあげて怒鳴った。その心の中で、うんうんと納得する。ボクのいったコトは、絶対に間違ってない。ぷよぷよのほうから襲ってこなければ、ボクはなにもしてないもんね。

「むむう……、確かにそうぢゃ」

大魔王も納得。

「でしょでしょ？」

それに、ボクだけがぷよぷよをやっつけてるワケじゃない。ルルーだってミノタウロスだっ

てそうだし、きっと、サタンやシェゾだってばたんきゅ〜させてるよ。
「だが、モノには限度というものがあるのぢゃ。お前の倒したぷよぷよの数は、防衛のレベルをはるかに超えておる。……身に覚えがないとはいわせんぞ」
「う……」
た、確かに……。魔導学校に入る前、たくさんのぷよぷよを集めて、一気にばたんきゅ〜させたことがある。あれっていま考えれば、逃げようと思えば逃げることもできたかも……。
ボクが反撃するヒマもなく、ぷよぷよ大魔王は続ける。
「それがお前の実力の現われなのかもしれん……。ぢゃがな、倒されるほうはたまったモノではないのぢゃ。そんな、哀れなぷよぷよたちの断末魔の叫びが、お前の魔導力に呼応して、我輩を生みだしたのぢゃっ！」
「………」
もはや返す言葉もない。シュテルン博士のいってた、ボクの魔導力が空間の歪（ひず）みとかに関係してるって、こういうコトだったのね……。
「なんだかよくわかんないケド、悪いのはアルルなのね」
頼みもしないのに、ルルーが口をはさんだ。こういうときに口を出されると、さすがにちょっとだけムッとくるなぁ。
ギョロリ！

と大魔王はルルーを見た。
「お前は確か、ルルーとかいったな」
「そうよ」
超タカビーに、ルルーは答える。自分は関係ないと思ってるもんだから……。
「お前も無関係ではないのぢゃぞ。できもしない召喚魔法を、何度も使ったぢゃろう？」
「う……。だ、だけど、あれは課題で……！」
「そんな人間界のことなど、我輩の知ったことぢゃない。事実は事実ぢゃ」
「じゃあどーして、あたくしとアルルだけなのよ！」
いきなり、ルルーがキレた。
「それはお前たちが、他人より遥かに多くのぷよぷよを倒しておるからぢゃ」
「だったら、いきなりぷよぷよの雨を降らせたりとかして、わざわざあたくしたちの目の前に出てくることなかったんじゃないの？」
「う……」
「え？　どうなのよ？」
「あの……」
「さっさとなんとかいったらどう？」
「そ、それは……、そうなんぢゃが……」

「どーせ、始めからこの世界をぷよぷよの海にしようと思ってんでしょ？」
「う〜むむむ……」
ルルーのあまりの勢いに、ぷよぷよ大魔王は、タジタジと身体を震わせる。
いいぞー、もっとやれー！
ボクは、心の中でルルーを応援した。
確かにボクたちには、自分じゃ知らない力があるんだと思う。それが、ぷよぷよ大魔王を生んだ原因だ、ってコトもわかる。だけど、そのせいで他の人たちが迷惑するなんて、納得がいかないよ！　ルルーも、おんなじ理由で怒ってるんだと思う。
「だいたいねー」
そのルルーは、タカビーに腕を組んで、大魔王を見上げた。
「あたくしだけのせいじゃないのに、あたくしだけが責任を取らされるなんて、納得がいかないわよ！」
ずるっ。
ボクは思わずズッコケそうになった。
……やっぱり、ルルーはルルー。自分のコトしか考えてない……。
「あ、あのな、よく聞くのぢゃ……」
人間だったら、コホンと咳払いするようなカンジで、ぷよぷよ大魔王はいった。

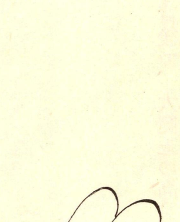
「なによ」
「普通の魔導師が使えば、いかな期限切れの召喚魔法とはいえ、あの〝すけとうだら大魔王〟も現界に引っ張られることもなかったのぢゃ……」
「あ」
ふと、ボクはあることを思いついて、ポンと手を打った。学校の先生にもいるけど、ぞう大魔王ってモンスターがいる。いまボクらが目の前にしてるのは、ぷよぷよ大魔王。そして、夏にルルーが間違って召喚しちゃったのは、すけとうだら大魔王ってワケか。ふんふん、なぁるほどねぇ……。きっと、ほかにも〝大魔王〟なモンスターがいるんだろうね。……なんだかありがたみが薄れちゃうケド。
「で？」
ルルーは、まだタカビーに腕を組んでる。
「……それも、お前の潜在能力のなせるワザかもしれん。ぢゃが、よく聞け、ルルー、そしてアルルよ！　すべての根源は、お前たちにあるのぢゃ！」
ぶるるん！
と、大魔王の身体が大きく震えた。そのショックで、校庭もゆれる。
「わぁ！」
「きゃっ！」

あまりの揺れの大きさに、ボクたち——校庭のみんなも含めて——はしりもちをついた。
……い、いったい、ナニが始まるの？
「くらうのぢゃ、我が裁きを！」
カッ！
と大魔王の眼が光ると同時に、
ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！
真っ黒な雲が空を覆い始めた。
そして……。
ボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテボテ——中略——ボテ……！
そこから降ってきたのは、とてつもなく大ツブの雨！
……じゃない、ぷよぷよだ！
「わぁ〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
これは、はっきりいってタマラナイ。
まるで、石をぶつけられたように痛い！
慌てて校舎の中に避難するボクやほかの生徒たちの背後で、大魔王の高笑いがこだまする。
「ふはははははは……！　現界をぷよぷよで埋めつくしてくれるのぢゃっ！」

じょ、冗談じゃない、なんとかしなきゃ……。

三　一世一代のぷよぷよ勝負！

……絶対勝たなきゃ この世は地獄！



ボクやルルーたち四人、そしてルシファー先生は、校庭に出ていた生徒たちを誘導して、イチバン最後に避難した。

どかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどかどか……！

……のはいいんだケド、ぷよぷよの降る音がものすごくて、外にいるより不安になってきちゃう。大丈夫だろうね、校舎は……。

『さて、この状況を、いかに打破するかだが……』

ルシファー先生の、声は落ち着き払ってるケド、顔——の下半分——はいつになく真面目（まじめ）。

「………」

こんな先生なんていままで見たことないから、ちょっとコワくて声も出せない。

『アルルくん、博士から〝メタドライヴ〟は受け取ってきたかな？』

「は、はい！　ここにあります」

ボクは、リュックの中から〝メタドライヴ〟を取りだした。ぷよぷよ雨のショックで壊れてないか心配だけど、目に見えて壊れてそうなところはない。

『不思議なものだな……』

〝メタドライヴ〟を受け取りながら、先生はいつものようなニコニコ顔に戻って、ボクのほうを向いた。

「なにがです？」

『キミ、そしてルルーくんが原因とは、さすがの私も読めなかった。……キミのまいたタネを、キミ自身の手で刈り取るために、それに必要な物をキミが取りに行く。運命とは、まさしくこういうものなのかも知れんな……』

「は、はぁ……」

ちょっとムツカシクて、よくわかんないケド、結局、シュテルン博士の話したコトは大当たりだったみたい。確かにボクがやったことなら、自分でなんとかしなきゃね。……ルルーの言葉じゃないケド、ボク自身が知らなかったことまでフォローしなきゃいけないのかどうかはアヤシイところだけどね。まあ、起きちゃったものはしょうがない。

『よし、〝メタドライヴ〟の使い方を教えよう……』

そういいながら、ルシファー先生は手のひら大の小箱のようなものを取りだした。

『この小箱――カセットには〝オワニモ〟の呪文を封じ込めてある。簡単にいえば、その呪文を〝メタドライヴ〟で増幅するのだ』

「へぇ～」

オワニモの呪文っていうのは、夏にボクとルルーでやったような、モンスターを魔界に帰す、いってみれば〝逆召喚〟の呪文。だけど、同じ種類、同じ色のモンスターが四匹以上そろっていなくちゃ使えなくて、普通なら役に立たない。だけど、相手がぷよぷよなら話は別。同じ色のぷよぷよを四匹以上集めるのは、それほどムツカシイことじゃないもんね。

『このカセットを本体に差し込み、スイッチを入れる。そうすると目の前にぷよぷよを二匹づつ誘い込む筒状のフィールドが発生するから、そこに落ちてきたぷよぷよを、コントローラーを使って移動、回転させ、同じ色が四匹以上そろうようにすればいい』

「なるほど、ちょっとしたパズルゲームみたいなものですね」

『まあ、簡単にいってしまえば、そんなものだ。ただし、フィールドいっぱいにぷよぷよが詰まってしまうと、フィールドが弾けてしまう。そうなったらもう一度やり直しだ』

先生は、これ以上ないっていうくらい優しい笑顔で、ボクの肩をポンと叩いた。

『地上がぷよぷよで埋めつくされる前に、なんとかせねばならん。……頼むぞ』

「は、はい！　頑張ります！」

責任重大だけど、ルシファー先生のその笑顔が、キンチョーを払ってくれる。

なんとかなりそう……！

「アルル、がんばってね！　あたくしも後ろから応援してるわ」

半分本気で、半分どうでもよさそうに、ルルーはいった。

『応援してる場合ではないぞ、ルルーくん。キミもアルルくんと同じことをやってもらうぞ』

「ええっ？　で、でも、機械が……」

『大丈夫、博士の物とは少々異なるが、私が造ったシステムがある』

そういいながら、ルシファー先生は〝メタドライヴ〟と同じような機械の箱を懐から取りだした。だけど〝メタドライヴ〟と違って灰色で、カセットもひとまわり大きくて、コントローラーの右側についてるボタンも、三つじゃなくて四つ。

こんなのまで造れちゃうなんて、やっぱりルシファー先生ってすごいよねぇ……。今度、シュテルン博士の〝格闘機械魔導師〟みたいに、なんかすっごい名前をつけてあげよう。

『使い方はアルルくんに説明したことと、基本的には同じだ。わかるね』

「は、はい」

『よし！』

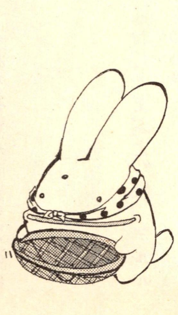
ルシファー先生は、ニッコリとボクたちを見つめた。

『地上がぷよぷよ地獄になるかどうかは、キミたちの双肩にかかっているといっても過言ではない。頼んだぞ』

「はい！」
『そうだ』
ふと、先生の目がちょっとイジワルな光を帯び始めた。……なぁんか企(たくら)んでるな。
『単にぷよぷよを消すだけでは面白くないな……。よし！　より多く魔界に帰したほうに、私からご褒美をあげよう。どうだ、これなら張り合いが出るだろう？』
出たぞ、先生の「面白くない」理論。……こういう大マジメなときに、あんまり出してほしくないなぁ。
でも、もう充分にやる気は出てるケド、ご褒美が出るとなったら、もっともっとがんばろうっていう気にはなるね。
ルルーの目も、もうご褒美のコトに頭が行っちゃってるみたいで、キラキラと輝いてる。
「がんばらせていただきますわ！」
「まかせてください！」
うんうん、とルシファー先生はうなずく。
「いっきま〜す！」
「いきますっ！」
ボクとルルーは一斉に窓を開け、校庭に向かって〝メタドライヴ〟のスイッチを入れた。すると、ブゥ〜〜ンとうなりをあげて魔導力のフィールドが外に発生し、どかどかと降り続くぷ

よぷよたちがそこに吸い込まれていく。
集まったぷよぷよたちは、二匹づつくっついて、フィールドの筒の中を落ちてくる。
うんうん、これをコントローラーで操作して、同じ色のを四匹そろえればいいワケね。
かくして、地上の未来と、ルシファー先生のご褒美を懸(か)けたぷよぷよ大勝負の始まりっ！

四　勝負の行方は？
……そしてご褒美(ほうび)は？



ボクたちは、ルシファー先生に教えてもらった通り、〃メタドライヴ〃を使ってぷよぷよを消し始めた。
同じ色のぷよぷよが四匹以上そろうと、ポ～ンと音を立てて、面白いように弾けていく。魔界に帰って行くってワケね。
「ほほう、面白いことを……。ならば、これならどうぢゃ！」
ボクたちのその様子を見て取ると、ぷよぷよ大魔王は、また眼をカッ！と光らせた。
すると、普通のぷよぷよにまじって、見たことない透明なぷよぷよが降り始める。

この透明ぷよぷよは、〝メタドライヴ〟のフィールドに入ってもほかのぷよぷよとくっつかなくて、ひとつだけで真っ直ぐにストンと落ちてくる。コントローラーでも操作できない。それに、この透明ぷよぷよだけを四つそろえたんじゃ消えてくれなくて、ほかの色のぷよぷよが四つ以上そろって、初めてその隣にいる透明ぷよぷよが消えてくれる。

んもう、オジャマなぷよぷよだなぁ。

「こんなの出すなんて、ずるいよぉ！」

ボクは、大魔王に向かって怒鳴った。

「ナニをいうか！　お前たちがぷよぷよを消す手段に出たのなら、それを我輩が防衛するのは当然ぢゃろうが？」

「むむむ……」

ごもっとも。

「ついでに、お前たちの機械もちょっと操作させてもらったぞ。〝おじゃまぷよ〟は、アルルがぷよぷよを消せばルルーに、ルルーが消せばアルルへと降り注ぐのぢゃ」

「げげげ！」

「まあ、せいぜい味方同士で張り合うのぢゃ、ふはははははは……！」

「ず、ずるぅ〜い！」

味方同士でジャマしあうなんて、ボクにはできないよぉ……。

「あたくしはよろしくてよ」
ルルーの眼は、もはや真剣そのもの！
「どちらがサタン様の妃（きさき）にふさわしいか、これで決着をつけようじゃない？」
「む〜……」
ボクにはサタンなんてどうでもいいケド、挑まれた勝負を捨てるなんて、なんだか後で夢見が悪くなりそう。
「わかったわ！」
「そうこなくちゃ！」
というワケで、ついにルシファー先生のご褒美だけじゃなく、サタンやメンツを懸（か）けた勝負へと発展した！
そうなってくると、さらに真剣さが増してくる。
「やったなぁ！」
ルルーが四色のぷよぷよを一度に消せば、
「やったわね！」
ボクは一段、二段、三段……と、連鎖的にぷよぷよを消していく。
始めは操作に慣れてないから、ぷよぷよをフィールドいっぱいにしちゃって、何度かやり直さなくっちゃいけなくなったケド、もう大丈夫！

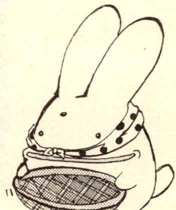
勝負は押しつ押されつの、まさにシーソー状態で、何日も続いた。
雨の日も、風の日も、雪の日も……。
ゴハンはルシファー先生が作ってくれて、ボクたちに食べさせてくれるケド、寝るヒマなんかはゼンゼンない。だけど、睡眠なんていらないほど、ボクらのテンションは高くなっていた。もはやこうなったら、意地の戦いだ！
「やったなぁ！」
「やったわね！」
そんな声だけが、辺り中に響く。魔導学校の先生や生徒たちは、じっとボクらを見守ることしかできない。……そのうち、普通に授業をするようになったケド。
やがて梅の花が散って、桜のつぼみがふくらみ始めた頃、ボクたちの体力はさすがに限界点をはるかに越え始めた。
「も、もうだめ……」
「オホホホホ……！　もうギブアップ？　無理しなくていいのよ」
「くっそぉ、負けないぞぉ！」
ルルーの憎まれ口が元気を引きだして、ボクはありったけの魔導力を〝メタドライヴ〟に注ぎ込んだ。ルルーも同じように、気力をふりしぼる。
「はあああああっ！」

ピ――――――ッ！
すると突然！　機械のほうが悲鳴を上げ始めた。それと同時に、シュウシュウと音を立てて煙を出す。
『い、いかん！　ふたりとも、早くスイッチを切るんだ！』
「え？」
カッ！
先生が止めに入ったときは、すでに遅かった。ルシファー先生の声に振り向いた瞬間、ボクとルルーのシステムは真っ白な光を放ち、ボクらを包み込んだ。ルシファー先生も、ボクらを見守るみんながいる校舎も、そして、ぷよぷよ大魔王も……。
「うおおおおおおおおおおっ！」
猛烈な光の中、大魔王は地震みたいな叫び声をあげた。身体もぶるぶるぶるぶるぶる震えてる。
そして……。
パア――――――――――ンッ！
大魔王ははじけた。
いや、それは間違い。
大魔王は、自分がさっき降らせてた数よりももっともっと多い、たっくさんの小さなぷよぷ

よに分裂した……。

五　サタン登場！
……そしてルシファー先生の正体！

「…………！」
ボクは、ベッドの上で寝ていた。
「ぐー」
そんなボクを、心配そうな表情のカーバンクルがのぞきこんでる。
「あり？　カーくん……」
「ぐー！」
頭がぼぉ――っとして、ナニがナンだかわからない。
「なんでボクは、こんなトコで寝てるんだろ？」
ぐりぐり、と首だけを動かして周りを見ると、ボクが寝てるのは、タコにも……いやイカにも〝保健室〟！　っていう部屋の中みたい。



「………」

だんだん思いだしてきたぞ。

シュテルン博士のところから〝物質転送機〟で戻ってきたボクとルルーは、ぷよぷよ大魔王とミツドモエのぷよぷよ勝負を展開して、それからえ〜と……。

「そうそう」

ボクは、ポンと手をうった。

〝メタドライヴ〟の爆発みたいな光に巻き込まれたんじゃなかったっけ……？

「そうだ、大魔王！」

急に思い立って、がばっとボクは跳ね起きた。その勢いで、カーバンクルがころころと毛布の上を転がる。

ふと、ボクの隣のベッドに座っているルルーと、その後ろで立っているミノタウロスの姿に気がついた。

「やあ、おはよぉ！」

「あいかわらず、お寝坊さんだこと」

ルルーの口調も、あいかわらずでなによりだね。……と口に出すと、またケンカになりそうなので、やめとこ。

「ぷよぷよ大魔王は？」

「さあ？」

ルルーは肩をすくめた。

「あたくしも知らないわ、だって、気がついたらここで寝てたんだもの」

「ふうん……」

なんか、光の中でポップコーンみたいにはじけたとこまでは覚えてるんだけど……。あれは、夢だったのかなぁ……？

「それにしても……」

はぁ～、とルルーはため息をついた。……ちょっと、おセンチな気分になってるみたい。

「それにしても？」

「よくやったわねぇ、あたくしたち」

「そうだねぇ……。いったい、何日くらい勝負してたんだろ？」

ぷよぷよ勝負を始めたのが、確か真冬だった。いまはというと、窓の外を見れば、桜が満開。ほとんどひと冬、戦い続けたみたい。

「ふにゃぁ～……」

あらためてそれを考えると、なんだかまた身体（からだ）の力が抜けてきちゃった。ボクは、ばふっとベッドに倒れ込んだ。

「つ、疲れたぁ～……」

「そうね。もう、結果なんてどうでもいいくらい」
おりょ？
いつもならここで、「勝負はあたくしの勝ちね！」とかっていうセリフが出てくるところなんだケド……。
「だけど……」
そういいながら、ルルーはよいしょっとベッドから立ち上がった。
「今回の結果がどうあれ、あたくしはあなたに勝負を挑み続けるわよ。サタン様が振り向いてくださるそのときまで、ね★」
パチッとウインクを残して、ルルーはミノタウロスと一緒に保健室から出た。
「はぁ……」
ボクは、それだけいうのが精一杯。
ルルーがいつもと変わんないのはいいんだケド、これからもずっと勝負しなきゃいけないのかぁ、と思うと……。こりゃタイヘンだ。
毎日が勝負！　っていう気がしないでもないケドね。
……と、いきなりルルーは戻ってきた。
「ほらほら、いつまでも寝てるんじゃないわよ。気がついたんなら、ルシファー先生にご報告しないと」

「あ、そうか……」

ボクは力の抜けた身体をなんとか起こして、ルルーの後についていった。

魔導学校の保健室は、ななんとルシファー先生の家の二階にある。階段をおりて、見覚えのあるキッチンに出たところで、ボクはようやくそれに気がついた。キッチンは、何度かゴハンを御馳走になったから知ってたケド、保健室は縁がなかったから……。

だけど、キッチンには先生の姿はない。書斎かな？　とも思ったけど、外から聞こえた話し声が、それは間違いだよっていってる。

「先生、テラスにいるみたいね」

ボクとルルーは、テラスに出た。

……瞬間！　ボクらの身体は凍りつく。

確かに、ルシファー先生はテラスでお茶を飲んでいた。もちろん、それくらいじゃ驚きはしない。一緒にいる、もうひとりが問題。

それも、とっても大きな問題っ！

よく通った鼻すじに、これまた綺麗に流れている鋭い眼、とんがった耳、キラキラ光るエメラルド色の長髪、ボクより頭ふたつみっつも大きな背丈、そしてなによりも特徴的なのは、その長身からさらに長く伸びている二本の角……。

「サ、サタン……」

「……様★」
ボクらの声に、テラスのふたりは一斉にこっちを向いた。そこで初めて気がついたケド、顔の下半分や身体つきは、まるで双子みたいにそっくり。だけど、ローブの様子から見て、ルシファー先生のほうには、角はないみたい。
『やあ、気がついたな』
最初に口を開いたのは、さすがにルシファー先生。サタンのほうはというと、先生のそれより邪悪っぽいイジワルな笑みを、ふっふっふってなカンジで浮かべてる。
『ついさっき、お茶がはいったところだ。さ、そんなトコに立ってないで座りたまえ』
「は、はあ……」
ルシファー先生っていう磁石に引き寄せられるように、ボクら四人はテラスの真っ白なイスに座った。正確には、ルルーの磁石はサタンだけど……。
「ぐっぐぐっぐっ、ぐっぐっ」
カーバンクルはもうとっくに、テーブルの上で「お菓子くれくれ踊り」をしてる。
『あいかわらず、カーバンクルくんは元気がいいなぁ』
「ぐー！」
「………」
ルシファー先生はそういいながら、ボクたちのためにお茶を淹（い）れ直した。

『どうした、まだ疲れてるのか？』

ボクたちが黙ったままでいると、先生はいつものニコニコ顔でいった。……ちょっと、イジワルな気持ちが入ってるみたいだケド。

「い、いえ、そうじゃないんです。ケド……」

『ふふふ……。わかってる、どうしてサタンがここにいるのか、といいたいのだろう？』

うんうんうんうん、とボクはうなずいた。

もはやルルーの眼は、サタンにくぎ付け。

『その前に、勝負の結果を教えておこう』

そんなコトより、どうしてサタンがここにいるのか教えてよぉ！……と思ったケド、ぷよぷよ勝負の結果も、やっぱり気になる。

『ぷよぷよを消した数は、一二億七八五三万、とんで六八三匹で同点だ。ふたりとも、よく頑張ったな』

「はぁ……」

数でいわれても、いまいち実感がわかないなぁ。ものすごぉ〜〜〜〜い数のぷよぷよを魔界に帰してあげた、っていうのはわかるんだケドね。

『そして、〝メタドライヴ〟が暴走したのも手伝って、ぷよぷよも、大魔王もすべて魔界に帰り、現界と魔界のはざまも修復された。結果として、私の目した通り、キミたち自身の手で事

態を収拾することができた、というワケだ』

『さすが、オレの妃（きさき）と見込んだだけのことはあるな』

サタンが口をはさんだ。声のトーンは先生と一緒だけど、サタンのは冷たくて、氷みたいな雰囲気を持ってる。

「サタン様ぁ、あたくしにはなにもないんですの？」

『いやいや、お前もよくやったよ』

サタンのその言葉に、ルルーはポッと顔を赤らめた。

……へぇ～、珍しい。

どっちかっていうと、ルルーが顔を赤くするってコトより、サタンがそうやってねぎらいの言葉をかけることが。

今度は、先生がサタンの言葉を引き継いだ。

『アルルくんと、ルルーくん、ふたりの力があるからこそ、苦難を乗り越えることができたのだ。……まぁ、苦難を呼び込む結果にもなったがな』

「はぁ」

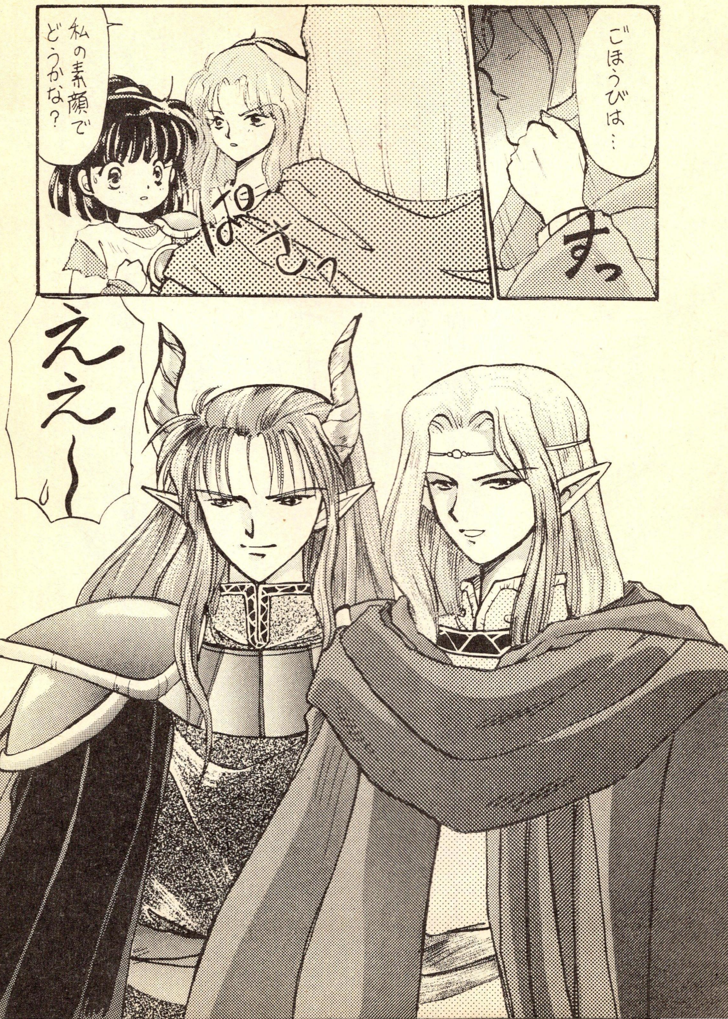
『これで、自分の中に眠る能力がどんなものか、ある程度はわかったはず。次は、それを自覚できるレベルまでに引き上げる修業を積むことだな』

「わかりました！」

……って、大きく返事をしてみたものの、ううっ、そうあらたまっていわれると、なんだかキンチョーしちゃうなぁ。
『まあ、そう堅くならなくてもいいよ。これから修業すればいいんだからな』
「はぁ……」
「そういえば、ご褒美はどうなったんですの？」
ルルーの問いに、ルシファー先生はポンと手をうった。
『そうそう、それを忘れるところだった。同点だけど、ふたりともよくがんばったからな。ご褒美は、……そうだな、私の素顔でどうかな？』
「へ？」
ボクたちに有無をいわせずに、先生はフードをあげた。
そこから出てきた顔を見た瞬間……！

「ええ——————っ！」

冗談抜きで、ボクたちは驚きのあまり、三メートルほど飛び上がった。……いままで何年か生きてきて、こんなに驚いたのは初めてだよぉ！
だって、だって……、ルシファー先生の素顔は、隣にいるサタンとまったくおんなじなんだもん！　違ってるのは、先生には角がないってコトくらい！


ごほうびは…
すっ
私の素顔でどうかな？
ばさっ
ええ〜〜

『お前も、いいかげんイジワルなヤツだな……』
ボクとルルーの驚きようを見て、サタンがニヤニヤ笑いながらいった。
『いままで隠しておいてすまなかったが、サタンと私は双子なのだよ』
「…………」
もはや、ボクらは声も出ない。ぷよぷよ大魔王を初めて見たときより、ショックがずっとずっと大きい。
はぁ、さいですかぁ……、みたいな。
『ま、そういうコトだ。……さて、オレは行くぞ』
突然、サタンは立ち上がった。
「ど、どちらへ……?」
すがるように、ルルーが問いかける。
『なに、お前たちのおかげで、面白い勝負方法を思いついたんでな。それの準備をするためよ。
……というワケで、アルル！』
じっ、とサタンはボクを見つめた。
「な、なによ」
『オレは、とある遺跡でお前を待っている』
い、いや、待たなくてもいいんですケド……。

『そこで〝ぷよぷよ勝負〟だ！　見事オレを負かすことができたなら、お前を妃にするのを諦めよう』
むむ！
そういうコトなら、勝負してもいいかなぁ～……？
サタンは、ニヤリと笑って続ける。
『一時的にな』
「そ、そんなのズルイよぉ！」
『ま、お前は、オレが妃にと見込んだほどの能力の持ち主。その力を最大限に発揮して、このオレを退かせればよかろう』
そういいのこして、サタンはマントをバサァッ！　とひるがえす。
「ああ、お待ちになって！　あたくしもご一緒しますわ！」
テラスから去るサタンの姿を、ルルーは慌てて追いかけた。
「ぶもー！」
さらにその後を、ミノタウロスがお茶を飲み干してから続く。
ほどなくして、三人の姿は見えなくなっちゃった……。
「あらららら……」
あいかわらず、なぁんてワガママなんだろう、サタンって。

……それにしても、ルルーは課題をどうするつもりなんだろう？　卒業できないよぉ！

って叫ぼうと思っても、もうルルーの姿は見えない。

ふと、ボクの肩に、ルシファー先生の手がおかれているのに気がついた。振り返ると、サタンとまったくおんなじ顔なんだケド、まったく雰囲気が正反対の先生が、いつものニコニコ顔でボクを見下ろしてる。

『ヤツから聞いたよ。いろいろキミに迷惑をかけているようだが、許してやってくれ』

「そ、そんな、迷惑だなんて……」

サタンとおんなじ顔でそういわれるなんて、なんだか複雑な気分。彼だったら、ぜぇ～ったいにこんなコトはいわないもんね。

『まあ、あれも一種の愛情表現なのだ。それを受けるかどうかは、キミの自由だがな』

おんなじ顔なら、ボクはルシファー先生のほうがいいな……。

だけど、勝負を挑まれたら受けないワケにはいかなくなっちゃうのが、ボクの悪いクセ。これ以上サタンにつきまとわれないタメにも、なんとかして勝負に勝たなきゃ！

『ヤツの勝負を受けるかね？……といっても、その目を見れば、答えは出てるようだな』

ボクのやる気が、もう目に出ちゃってるみたい。

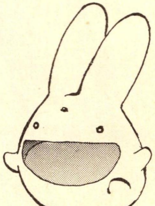
「もちろん、勝ちます！」

『よし、その意気だ。……それまでは卒業はお預けだな』

「え――っ！　それとこれとは別ですよぉ……」
いきなり、やる気が消え失せてきちゃった……。
『はっはっは。半分冗談で、半分本気だ。キミもルルーくんも、書類上では卒業できる。だが、キミの本当の意味での卒業は、サタンに勝った時点でその資格が得られるのだ。それを忘れるんじゃないぞ』
「はいっ！　がんばります！」
ボクは、サタンたちの去った方を眺めながら、力を込めて返事をした。その向こうでは、もうすぐ沈みそうな太陽が、キラキラ光ってる。
まだまだ、一流の魔導師への道は遠いなぁ……。

エピローグ もう一度、卒業試験 ……いっきまぁ〜す！

『ひとつ、困ったことに……』
卒業式の前日、ボクはルシファー先生に呼びだされた。もちろん、お小言とかじゃなくって、正確には、お茶のお呼ばれなんだケド。で、お茶を淹(い)れて、イスに座った先生の第一声がコレ。
先生は、いつものようにフードをかぶって、ニコニコ顔をしてる。魔導学校の中で、ルシファー先生の素顔を見たことあるのは、ボクとルルーだけなんだと思うと、なんだかトクした気分になっちゃうね。
まあ、それはおいといて……。
「困ったコトって……？」
『うむ。ここ最近、異様にぷよぷよの数が多いことに気がつかないかね？』
そういわれてみると、確かに多いかもしれない。
いまも、先生の家のまわりでぴょんぴょん跳ねたり、草原でぷるぷるしながら歩き回ったり



してる。カーバンクルが、ぺろぉ〜んとかいって舌をのばして食べちゃおうとするのを、ボクはなんとか止めるのにちょっと忙しい。

大魔王の降らせたぷよぷよが、まだ残ってるのかなぁ〜と思ってたケド……。

『キミは、〝メタドライヴ〟が暴走する際、大魔王が分裂するのを見なかったか？』

「あ！」

ボクは〝メタドライヴ〟が暴走して光に包まれたときに大魔王がポ――ンってはじけたコトを思いだした。あれは、はじけたっていうより、ホントに分裂したっていうのが正しいかもしれない。

いままで、てっきり夢だと思って、忘れてた……。

『あのあと、壊れた〝メタドライヴ〟を検査してみたのだが……』

先生は続けた。

ううっ、イヤな予感がするなぁ……。

『暴走の原因は、キミとルルーくんの強大な魔力に耐えきれなかったことによる』

「ふんふん」

『そして、大魔王が分裂した要因は、暴走した〝メタドライヴ〟が、その力を逆の方向に増幅させてしまったからだ。つまり、本来なら魔界に帰すところを、また逆に呼び寄せてしまったわけだな』

先生は、ニコニコ顔でいうけれど、ボクにとっては、そんな余裕なんかない。ものすごくイヤな予感が、頭の中でぐるぐるしてる。
「そ、それってまさか……！」
『そのまさかだ。早い話、ぷよぷよ大魔王を生みだしたのもキミたちの力なら、それから地上を救ったのもキミたち、だが、また新たに大量のぷよぷよを生みだしたのも、キミと、そしてルルーくんの力なのだ！』

「ガガ――――――――――ンッ！」

ど、どうして、ボクのまわりってこんなコトばっかり起きるわけぇ？
……って思っても、やっぱり答えは出てこない。
運命、なのかなぁ……。
「あ！」
ボクは、ひとつマズイことを思いだした。
「ま、まさか、それで卒業できないなんて……」
『安心したまえ、それはない』
「ほっ」
よかったぁ～。

と安心したのはいいけれど、ルシファー先生の口が、ちょっとイジワルに曲ってる。
『だが、本当の意味での卒業試験に、もうひとつ課題ができたな。なんとかしてぷよぷよのバランスを取らなければ、また第二、第三のぷよぷよ大魔王が現われるかもしれんからな』
「う、うん……」
まあ、自分でやったコトだから……。それに、誰かがぷよぷよ大魔王をまた呼びだすとしたら、きっと、その誰かはまたボクになるんだろうし……。
いやいや、そうやって考えてると、ホントにそうなっちゃうから、なるたけ考えないようにしとこっと。
ルシファー先生は、いつものニコニコ顔より、ずっとずっとずぅ〜っと優しく微笑（ほほえ）んだ。
『まあ、卒業はしても、私はいつまでもキミの教師だ。困ったことがあったら、いつでも相談に来るといい』
「はい！　わっかりましたぁっ！」
たとえウソでも——ルシファー先生は、冗談以外でウソはいわないケドね——、先生にそういわれると、モノスゴクうれしい！
がんばらなくっちゃね★
というワケで、卒業式っ！

ボクは式に出た。……のはいいんだケド、ルルーの姿はどこにも見えない。やっぱり、ホントにサタンと一緒に旅立っちゃったみたいね。

卒業式が終わってすぐに、ボクはムラサメくん——なんとか、ナスは克服できたみたい——やルシファー先生たちにお別れをいって、そのまま旅に出発！

あ、それから、卒業式にはシュテルン博士も出てた。そのとき、物質転送機のときの「あ！」ってなんなのか聞いてみたケド、タダの冗談なんだって。

まったく、イジワルなんだから……。

「ぐ～ぅ、ぐぅ……」

桜のひらひらと舞う、学校のそばの街道。

カーバンクルはいつもの通り、ボクの肩の上で気持ちよさそうに眠ってる。

思えば、去年の今頃も、こうして街道を歩いてたんだっけ。試験の内容は、あんまり変わってないみたいだね。目的地と、目標の人物が違うだけ。あ、目的はかなり違うか……。

ひとつだけ問題なのは、サタンの居場所がゼンゼンわかんないコト。

だけどルシファー先生が、なにかわかったら教えてくれるっていってくれたし、シュテルン博士のところに行くときも、最初はなぁんにも情報がなかったワケだから、なんとかなるでしょう、……多分。

「とりあえず、ドレイクお兄さんのところにいってみようかな？」
ボクはひとりごちた。……と、その瞬間！

「があお！」

「わっ！」
街道の脇から、人影がおどりでた。ボクは思わずあとじさる。
でも、出てきたのは人間じゃない。
とがった耳、二本の長い角――サタンより短いけど――と背中に生えた龍の翼、これまた龍みたいなしっぽ、真っ赤な袖なしのチャイナドレスみたいな服に身を包んだ見事なプロポーション、なかなかの美貌……。
人型のモンスター、ドラコケンタウロスだ！
「お前っ！」
彼女は、いきなりボクをビシッと指差した。
「ここを通りたければ、あたしと勝負していきなさい！」
「勝負？」
内容は……？

「ま、まさか、美少女コンテスト？」

ボクがそういうと、ドラコケンタウロスはルルーのようにタカビーな含み笑いをした。

「ふふん。あたしの美しさにかなうと思って……じゃなぁ——いっ！」

いきなり彼女は怒りだした。ち、違うのかな……？

「勝負は、〝ぷよぷよ地獄〟よっ！」

〝ぷよぷよ地獄〟！

ぷよぷよ大魔王との一戦以来、ここ最近でにわかに流行りだしたヤツだ。

卒業式の前日、ボクにスベテを話す前に、ルシファー先生は各地の魔道師に呼びかけて、〝オワニモ〟の呪文を広めた。大魔王がはじけて生まれたぷよぷよを、みんなで片付けようっていうワケ。

これがまた大成功！

ちょっと魔法を知ってるんならすぐ使えるから、モンスターから魔導幼稚園の生徒まで、あっというまに広まった。だれでも四匹以上の同じ色のぷよぷよを集めてきて、ちょっと呪文をかければいいだけだもんね。

で、相手よりどれだけ多くのぷよぷよを消せるかっていう勝負が、〝ぷよぷよ地獄〟。

そんな勝負を挑まれたとあっては、一二億七八五三万、とんで六八三匹ものぷよぷよを消し

たボクが受けないワケにはいかない！
ボクは勝負に備えて、大きく深呼吸をした。
「すぅ〜、はぁ〜……。すぅ〜、はぁ〜……」
よーし、魔導力がみなぎってきたぞ。
「さあさあ、やるの？　やらないの？」
ドラコケンタウロスがせかす。
ボクは身構えた。
「望むところよっ！」
新たな戦いの始まりだ！

つづく……？

あとがき

魔導音頭はとぉっても楽し、
みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。
はぁこりゃこりゃ。
はじめまして！　のっけからハイ・テンションの山本剛と申します、以後お見知りおきを……。って、ンなこたぁカバー見りゃわかることですね、はい。
さて、みなさんは『魔導物語』なるゲームをご存知ですか？　ＭＳＸやＰＣ９８、最近ではゲームギア版も出てますね。
それを知らないという方でも、『ぷよぷよ』ならご存知のことでしょう。色とりどりの〝ぷよぷよ〟がこれでもかとばかりに落ちてきて、人をサルにしてしまうというパズルゲームです。アーケードからパソコンからファミコンまで、ほとんどのゲームメディアで出ていますから、遊んだことはなくても、聞いたことくらいはあるでしょう。
その『ぷよぷよ』の母体が、『魔導物語』なのです。
これがまた、しゃべることしゃべること。「ウキーッ！」とゲームに負けないくらい叫びな

から遊んだ記憶があります。

……とはいうものの、これは小説だから、実際にしゃべらせるにはもう少々の技術革新が必要ですな。いまでは、ゲームギアとかゲームボーイくらいの大きさの電子機器で文庫が読めるそうだから、〝しゃべる小説〟なんてのが出るのも、そう遠くはないでしょう。

まあ、そんなコトはおいといて……。

ペーパーメディアのこの小説で、いかにアルルやルルー、サタンたちがぺらぺらしゃべっているような雰囲気を表現するか！

さてさて、どうしたもんでしょうねぇ……。

なぁんてなコトをあとがきで悩み始めるなんて、ちょっとワザとらしいっすか？

主人公アルル・ナジャは、『魔導物語』というRPGの中で、サタンやルルーを始め、カーバンクルやぷよぷよ、ナスグレイブといった、いろんな人やモンスターたちと出会い、ときには戦います。そして、ふたたび彼らと〝ぷよぷよ地獄〟で大勝負っ！　というワケです。

『魔導物語』は、〝魔導幼稚園〟を卒園したアルルが〝魔導学校〟へと向かう道中を描いた物語です。そこから『ぷよぷよ』でサタンたちと再戦するまでに、彼女はいったいどのような冒険をくぐりぬけてきたのでしょうか？

本文をお読みになられた方なら、もうお分かりのコトですね。え、読んでない？　あとがきから開いた？

うぉ～っ！　先に本文を読んだらんかい～っ！
……とは、ボクは申しません。思いっきりいってますが……。
文庫を手にしたとき、まず後ろを開いてあとがきを読むというのは、人間のサガみたいなもんですからねぇ。ボクだって同じです。
ウチワの話をしますと、我がＦＥＡＲの重役であり、作家として大先輩にあたる伏見健二氏が、処女作『ブルーフォレスト物語』を会議の場で提示したとき、
「ほほう、どれどれ」
と社員みんなが手に取り、開いたのはやはり後ろからでした。
伏見氏はそういって暴れてましたが、人間なんてそんなものです。
「うぉ～っ！　後ろから読むなぁ～っ！」
でも、買ってから読んでね★
そして、冒頭でもふれましたが、小説という文字の羅列の中で、アルルやルルー、サタンたちが実際にしゃべっているように感じられたかどうかを評価していただけると幸いです。立ち読みの方には……、そうですね、ルルーの〝女王乱舞〟でもくらっていただきましょうか。
ほらほら、後ろで彼女が気合いをためて待っていますよ……。
まあ冗談はこれくらい――冗談じゃなかったりして――にしておいて、またどこかでみなさんにお会いできることを楽しみにしております。

最後に、執筆中、病魔により若くして亡くなられてしまった豊嶋編集長のご冥福をお祈りすると同時に、締め切りブッちぎりのボクを最後まで面倒みてくださった編集の塚越さんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

もちろん、仁井谷社長、グッドなイラストを描いて下さった壱氏をはじめとするコンパイルの皆々様、伏見氏、健部氏をはじめ、ＦＥＡＲ内外を問わず、協力してくださったみなさん、そして著者近影のイラストを描いてくれた小谷部憲一氏にも心から感謝しております。そんな気持ちを込めて、最後に一言……。

できたよっ！

一九九四年三月吉日　ＦＥＡＲ事務所にて

魔導物語

ぷよぷよ大魔王の降臨っ！

山本剛

角川文庫　9329

平成六年五月　一日　初版発行
平成七年十月二十日　九版発行

発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集部（〇三）三八一七―八四五一
営業部（〇三）三八一七―八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――旭印刷　製本所――本間製本
装幀者――杉浦康平

S 56-1　ISBN4-04-415601-8　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

SNEAKER BUNKO

ファンタジーから恋愛まで
夢と感動の青春ノベル

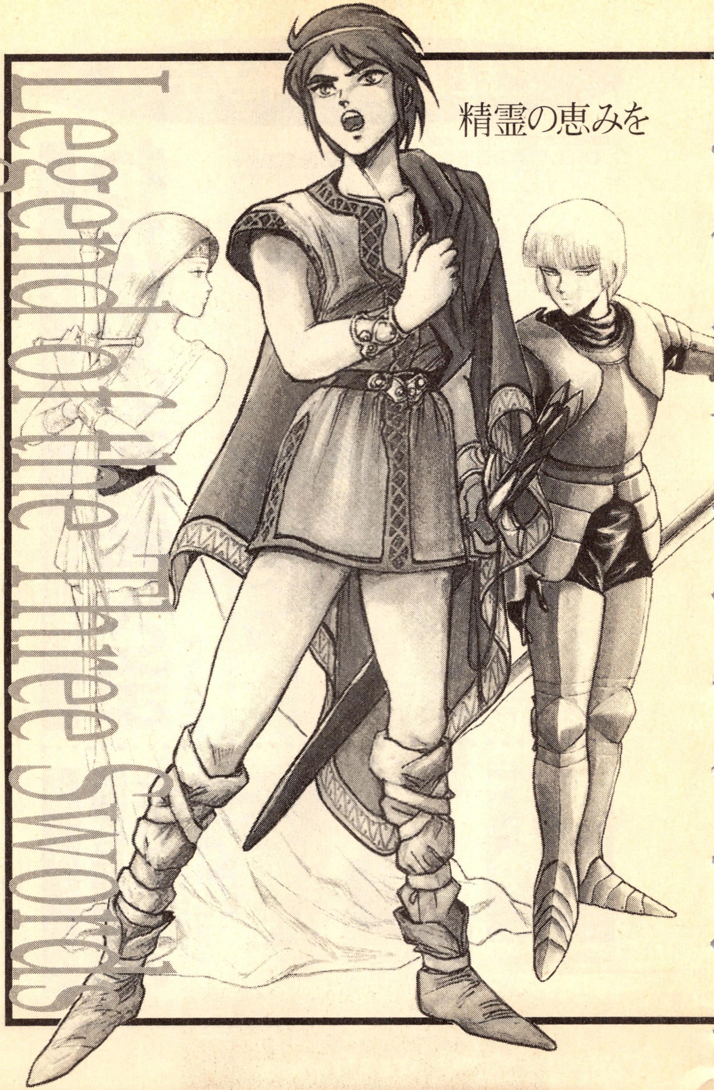
スニーカー文庫

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか?
ぜひ、ご感想をお送りください。

＊＊＊

〈ファンレターのあて先〉
〒113 東京都文京区本郷5-24-5
角川書店　編集部気付
「山本　剛先生」係

精霊の恵みを



とまとあき／塚本裕美子の本

ファンタジック・コメディの決定版！

わたしの勇者さま

イラスト 伊東岳彦



わたしの勇者さま(前)



わたしの勇者さま(後)



続 わたしの勇者さま
魔法使いのティータイム

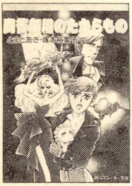


わたしの勇者さま 外伝
ぼくの女神さま

宇宙大活劇風（スペース・オペラ）コメディ

問答無用のたからもの

イラスト 新谷かおる



問答無用のたからもの



問答無用のたからもの２
海賊でいこう！



問答無用のたからもの３
これが天下の大当たり！


見知らぬ世界の
扉が開く！
松宮陽子。17歳。ごく普通の生活を
送っていた彼女の前に現れた青年シンは、
異世界から来た勇者さま…!?
大人気、ファンタジック・コメディ決定版！！
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO





封印された力が
蘇るとき、
新たなる神話が
誕生する――。

ネオ・マイス

上杉 光　ILLUSTRATION 神村幸子



1 六家再臨



2 流光断つ



3 風の閃影



4 飛鳥封



「人とちょっと違う」力を持つ空知文也は、一応普通の高校生。ところがある日、「一族の盟主」と名乗る美少女が現れて……。超常能力を持つ一族・六家が活躍するアクションコメディ。



スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO